

ABC 表による性格論と芸術論

近 松 良 之

- I. 序 言
- II. T. Parsons と ABC 表——特に Deviance の問題
- III. ABC test
- IV. 本 論
 - I. 世俗グループと世俗芸術
 - II. 反俗グループと反俗芸術
 - III. C 要素と人間の偉大さ・高貴さ—公理への註

————— ○ ————— ○ ————— ○ —————

I. 序 言

A. “初めにドグマありき”——人間が客観的なタイプで割り切れてたまるものか、といふ言葉に対しては、説明文で触れた通り ABC 表は単に heuristisch な原理である事を繰り返へさねばならない。生きた個性への道は、極めて難しく、他の typology もその点では同様に常に、補助的手段なものに過ぎない。ABC 表に関していへば、先づ消極的には、人間の個性が実体的なものでなく機能的なものである事を、それは教へる。例へば、甲は、乙にとっては A'B であり、丙にとっては AB' であり、丁にとっては CA である。そして、乙丙丁は、その事を不明にしたままで甲に就いて語り、而も、互いに他も自らと同様の判定を前提としてゐるかの如くに、思ひ込んでゐる。それは、人間の個性を実体的に把へる無意識の習慣から来てゐる。更に積極的には、特に B 要素並びに C 要素の独自の意味、A 要素の 2 つの相異なる意味、A:B といふ関係に複合的にからみ合ふ B:C といふ関係、それらは、吾々にとって重大な意味を担った事であり、而も、応々にして不明確なままで見逃されてゐる事である。

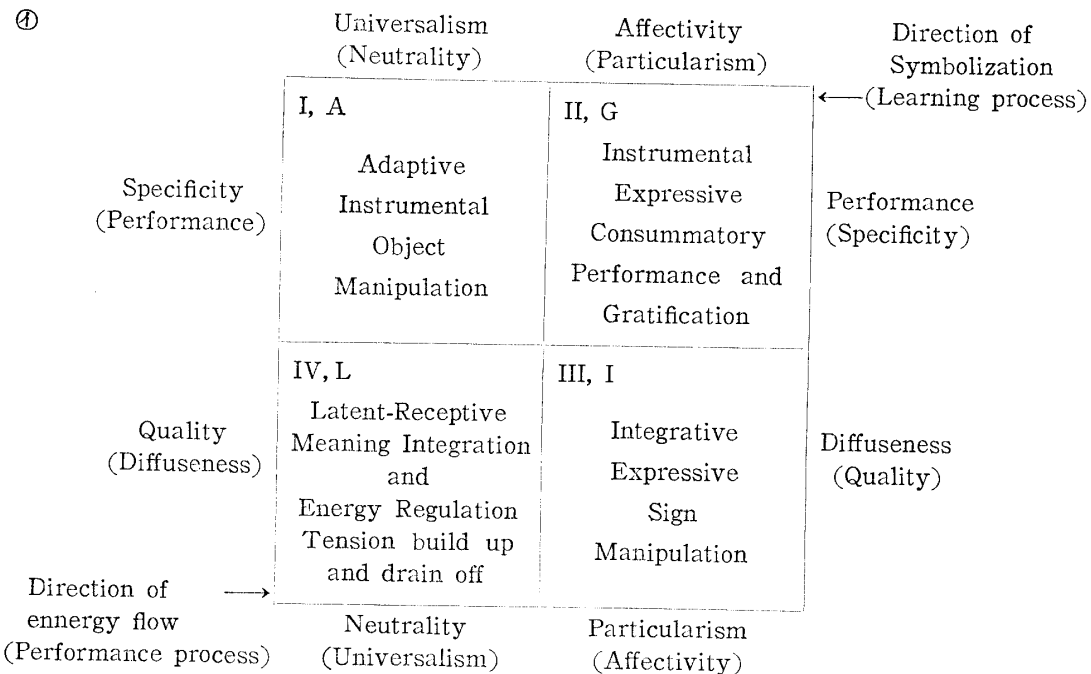
又、ABC 表が非論理的であり科学的でない、といふ非難に対しては、科学といふものが仮説と実証の繰り返へしから成るものである事を、指摘しなければならない。出来合ひの公式 or わく組をあてがはれて、それに準拠して事柄への範疇付けを行つてゆく事が、科学であり論理であると思ひ込んでゐて、其の立場から、例へば ABC 表を非科学的といふ人があるとすれば、その人が実は非科学的な人なのである。

B. 本論に就いて——改訂版の説明文で已に触れた通り、ABC 表での“気質”は、biologisch な temperament ではなく、Inter-act としての act の函数たる attitude のパターンを示すものである。そして、attitude の習慣化されたものが Ethos であるとすれば、ABC 表での気質は、人間の基本的 Ethos の typology といふ事が出来る。以上の事は、II 章でふれられてある。

ABC テストは、T. Parsons の4つの phase と ABC 表とを基にして作られた。このテストでは、CA''' と A'''B との区別〔更には CA'-CA''-CA''' の区別〕が現はれず、又、C'A と C'B との区別に関して多少の曖昧さが残されてゐる。その故に、このテストは、なほ pretest の域に留まるものといへるが、数次に渡る訂正と 200 数人に就いてのテストの結果、当面の意図である ABC 表の諸定理の実証と肉付けとに対しては、十分な役割を果してくれる事が分った。

本論では、“世俗芸術と反俗芸術”といふ基本類型が中核になってゐる。参考文献として、シラー“素朴文学と情感文学について”〔邦訳、岩波文庫、高橋健二訳〕、マン“ゲーテとトルストイ”〔邦訳、新潮文庫、高橋義孝訳〕を挙げておきたい。

II. T. Parsons と ABC 表——特に Deviance の問題



I, A —— Adaptive Phase [適合・局面]

II, G —— Goal Gratification Phase [目標充足・局面]

III, I —— Integrative Phase [統合・局面]

IV, L —— Latent Pattern Maintenance Phase [潜在的型維持・局面]

{ Working Papers in the Theory of action, Chap V, p. 182, Fig 2, Phases
in the Relationship of a System to its Situation }

I. 4つの Phase と ABC 表

T. Parsons の社会学は、Inter-act としての act の学である。対象としてのその act の函数として、彼は、cognitive な conception [conceptuation: what the object is といふ問ひへの答へ] 並びに cathexis [情念的な意味での what the object means といふ問ひへの答へ—attachment and aversion], そしてその2つの function を統合する evaluation, を挙げてゐる。従つて主体としての act は、第1の cognitive に対応する object orient [客体への構へ] といふ性格と第2

の cathexis に対応する attitude, そして第3の evaluation に対応する symbolization といふ3つの函数をもつてゐる。そして第3の symbolization へと向ふ第1と第2, 即ち主体としての act の object orient と attitude との2つの function から, その都度の act の二者択一的な性格付けが考へられる。それが Pattern Variables と呼ばれる。そしてその pattern variables の組合せから4つの phases が考へられ, その4つの phases によって Social Structure が構成されるのである。

Pattern Variables の原形は, 次の如くに考へられてゐる。〔Working Papers in the Theory of Action, by T. Parsons, R. F. Bales and E. A. Shils, 以下 W. P. の略字を用ひる, Chap V, Phase Movement in Relation to Motivation, Symbol Formation, and Role Structure, p. 179, 2番目のペラとして挙げられてゐるもの, 但し順序は④図の4つの phases を顧慮して変更してある〕。

- i Universalism [o] — Neutrality [a]
- ii Performance [o] — Specificity [a]
- iii Particularism [o] — Affectivity [a]
- iv Quality [o] — Diffuseness [a]

その夫々の組が更に $i \rightarrow ii \rightarrow iii \rightarrow iv \rightarrow i$ の方向に組合はされて, $i + ii = I$, $ii + iii = II$, $iii + iv = III$, $iv + i = IV$ といふ Pattern Variables [以下, P. V の略字を用ひる] が, 夫々 $I = \text{Adaptive Phase}$, $II = \text{Goal Gratification Phase}$, $III = \text{Integrative Phase}$, $IV = \text{Pattern Maintenance Phase}$ を形成するのである。上の $i \rightarrow ii \rightarrow iii \rightarrow iv \rightarrow i$ といふ方向の組合せは, 換言すれば隣接し合ふ Phase 同志が, 相互に夫々の P.V. を共有し合ふ如き組合せ〔即ち, $I [i + ii] \begin{matrix} \nearrow II [ii + iii] \\ \searrow IV [iv + i] \end{matrix}$ 〕において, I と II とは ii を, I と IV とは i を, といった具合に〕である。又 I, II, III, IV 夫々の P. V. において基調になってゐるのは, 最初原形としての P. V. における i, ii, iii, iv [即ち, I では i , II では ii , III では iii , IV では iv] である。

なほ, その基調となる P.V. に関して, 以下の事が注目される。即ち, object orient の面での各 Phase の主要な P.V. は, $A, \text{Phase} \rightarrow \text{Universalism}$, $G, \text{Phase} \rightarrow \text{Performance}$, $I, \text{Phase} \rightarrow \text{Particularism}$, $L, \text{Phase} \rightarrow \text{Quality}$ であるが, 先づ考へられるのは, $A = \text{Universalism}$ 対 $I = \text{Particularism}$, $G = \text{Performance}$ 対 $L = \text{Quality}$ といふ antithetical な関係である。 $G = \text{Performance}$ は, 行為の目的論的原因〔従つて Process に即して云へば, 目的〕と解される意味・価値から見られた overt act としての act の性格を意味し, $L = \text{Quality}$ はその行為の Process 的性格〔例へば Simmel に倣ふならば, 前者は行為の内容的意味, 後者は行為の過程的性格〕を意味する。又 A, Phase 対 I, Phase では, $A, \text{Phase} = \text{Universalism}$ は, 種的社会的普遍主義, 更に $G = \text{Performance}$ は類的意味論的目的論的普遍主義, それに対して $I = \text{Particularism}$ は個的特殊主義〔自立主義〕と考へられる。従つて, I, Phase の Integrative [統合] とは, 当然, A, Phase における種的社会的普遍主義に由来する社会的律法〔命令〕による“統一”を意味せず, 又 G, Phase の類的意味論的普遍主義からする“総合的統一”を意味しない事が, 注目される。それは個的人間的情念の意味での Integrative である。

以上の P. V の原形は、T. Parsons と E. A. Shils との協同研究から生れたものであるが、今此処では、その由来、変遷又その当否は別の問題として触れない。又 R. F. Bales は small group の研究で、当 group の structure を Task area と Social emotinal area [夫々を代表するのが task leader と sociometric star] の2つの領域、並びに4つの Dimension に分けてゐるが、その区分はそのまま T. Parsons に引継がれて、その2つの Area [又4つの Dimension] と上の P. V との組合せから、T. Parsons の4つの phase による social structure が生れたのである。

より具体的に4つの Phase を把へるための説明としては、彼の言ふ social control の phase movement に即して行はれるのが適當であらう。その social control の phase movement は、 $L \begin{matrix} \nearrow I \\ \searrow G \end{matrix} A$ といふ方向の movement を指してゐる。この movement の説明として、彼の採用する psychotherapy の例がある。それによると、先づ L, phase は Permissiveness の局面と云はれる。その局面では、患者の病める Leben は、治療のための前段階として、予め先づ何等のてだても加へないそのままの形で放任され黙許される〈[a] としての Diffuseness〉。次いで I, Phase では、その Leben はその方向の如何に拘らず積極的に Support される〈[a] としての affectivity〉。そして G, Phase では、黙許され support された患者の Leben は、実質的な将来の adaptation を予想しつつ denial [拒否と懲罰] の局面を経験せしめられる〈[a] としての Specificity〉。その denial な局面を介して自らの Leben の方向を矯める事を覚えさせられた患者の生の Energie は、初めて次の局面である normal な社会生活へ adapt する事への準備態勢に入る。そして患者の生が正しい adaptation へと導かれた局面が、Adaptive phase である。L=Permissiveness, I=Support, G=Denial, A=Adaptation [Manipulation]。

以上の4つの phase と ABC 表の関係に関しては、以下の如くである。先づ原形となる P.V は、ABC 3要素に対応してゐる。但しその場合には、説明文で指摘した如く、A要素は、AB 的 A と CA 的 A とに2分される必要がある。その対応の仕方は次の如くである。

A要素 $\begin{cases} \text{AB 的 A=P.V, i} \\ \text{CA 的 A=P.V, iv, B要素 P.V, ii, C要素 = P.V, iii} \end{cases}$

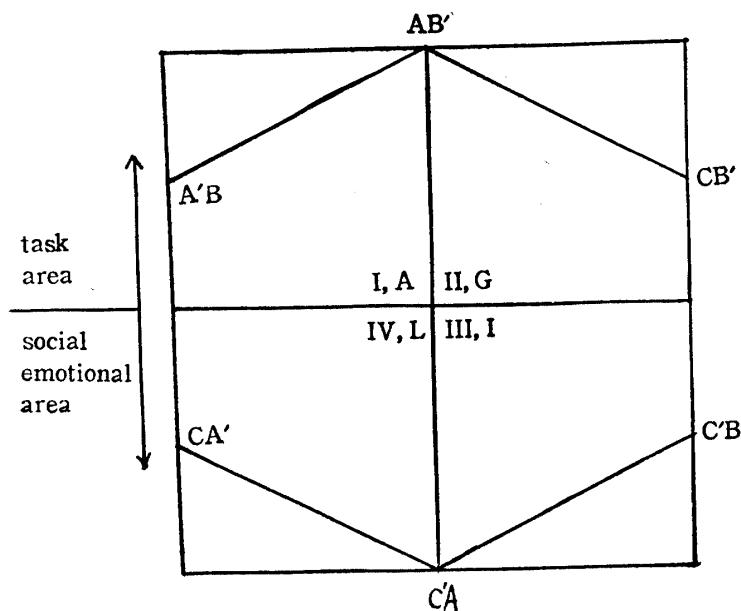
原形となる P.V の組合せによって出来た P.V, I, II, III, IV は、ABC 表における基本形と対応してゐる。そして、その P.V によって組成される4つの Phase は、ABC 表における基本的複合形を示す ABC 6角形と対応してゐる。

上の social control の例で考へるならば、先づ Permissiveness の L, Phase は、B 的配慮を欠いた CA' 的 Leben そのものを示す phase と言へよう。I, Phase の Support は、当然 C'A の寛容性、又特殊な形では C'B の CA' への郷愁愛に示されてゐると言へよう。G, Phase の Denial は、AB'-CB' における Idee・Wert・Sinn—Geist のコレラートの源泉となる B' 要素が示す固有の態度に示されてゐると言へよう。そして最後の A, Phase は、当然 A'B と重り合ふ phase である。なほ夫々の Phase の基調となる P.V に関して言へば、A, Ph=Universalism は特に A'B の、又 G, ph=Performance は AB' の、又 I, ph=Particularism

はC'A の、又 L, ph=Quality は CA' の中核的特徴を示すものと言へよう。

以上の T. Parson の4つの phase と ABC 6 角形〔説明文の㊸図参照〕を重ね合はせると次の㊸図の如くである。

㊸



註]

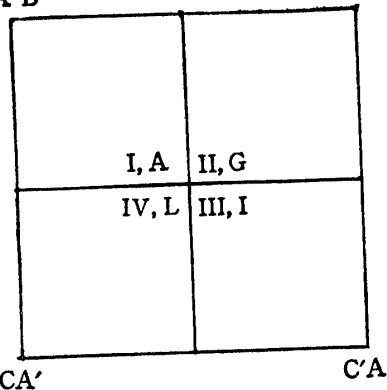
○AB' と C'A とは、夫々 II,G, IV,I に属しつつ、更には、AB' は I A と II G との接点、C'A は III I と IV L との接点に位置すると考へる事も可能である。

○Deviance を顧慮すれば、㊸図以下の如くなるのであるから、これは暫定的な重ね合せである。

II. Deviance の問題

上の4つの phase は、normative な social structure を形成してゐる。ところが、更にその上に T. Parsons では、Deviance の structure が顧慮されてゐる。ABC 6 角形で考へるならば、CB' 並びに C'B は後述する compulsive alienative な Deviance [A欠除の Deviance, 後述] に該当するが故に、normative な social structure を示す4つの phase からは除外されるべきである。従つて、T. Parsons の言ふ normative な social structure と ABC 6 角形の関係は、後者から CB', C'B を除外した㊸図の如くなる。

㊸ A'B



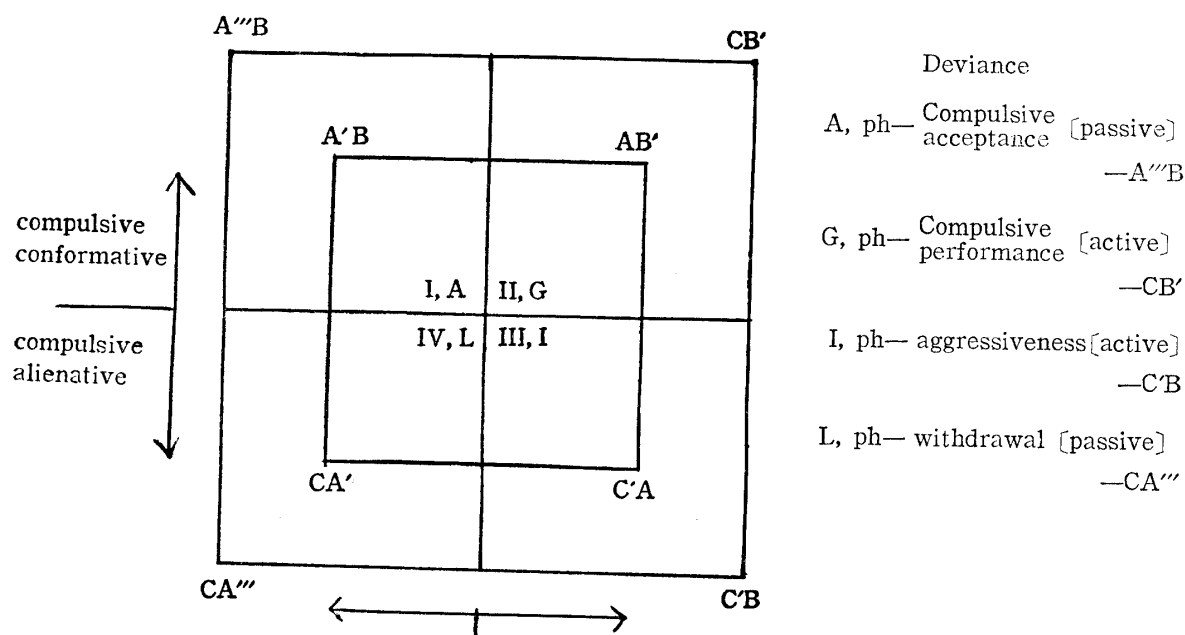
㊸図における normative な Social structure は、A 並びに A' 要素を備へたタイプによって構成されてゐる事が、先づ指摘される。Deviance は、T. Parsons では compulsive conformative と compulsive alienative の2種類に夫々 active と passive の形体が考へられ、都合計4種類の Deviance が、夫々上述した4つの normative な phase に対応するものとして把へられてゐる [the Social System, 以下 S, S と略す, VII, Deviant Behavior and the Mechanism of Social Control. W, P, chap III, the Dimensions of Action Space, p. 74, Fig 3]。ABC 表との関係で言へば、compulsive conformative な Deviance は、A 要素過剰に由来するものである [A'''B, CA''']。そして compulsive alienative

ABC 表による性格論と芸術論

な Deviance は、A 欠除に由来するものである [CB', C'B]。㊦図で A''B と CA''' とが隠されてゐるのは、それ等がもともと conformative なものとして A'B, CA' に同質的に連つてゐる事に由来してゐる。従つて、CB'・C'B は質的 Deviance, A''B・CA''' は量的 Deviance と考へる事も出来る。

Working Papers における Deviance を含んだ social structure と ABC 表との関係を図示すれば㊦図の如くである [W. P, III, p. 68]。

㊦



ところが㊦図で注意される事は、T. Parsons では図の左側の矢印の如くに compulsive conformative と compulsive alienative との領域が分けられてゐる事である [W. P, III, p. 68]。これは上述の区分 [図の下側の矢印] と相異なるものと言はねばならない。しかし “the Social System” での把へ方を参照すると、初めに述べたやうに図の下側の矢印の如く A''B と CA''' を compulsive conformative, CB' と C'B を compulsive alienative とするのが適切であると思はれる。其処で把へられてゐる所を、ABC 表との関連を含めて図示すれば以下の如くである [S. S, VII, p., 259 table 4]。

activity		passivity	
Compulsive Performance orientation		Compulsive Acquiescence	
Focus on Social Objects	Focus on Norms.	Focus on Social Objects	Focus on Norms.
Dominance	Compulsive Enforcement	Submission	Perfectionistic Observance (Merton's ritualism)
A'B → A''B (㊦図では Gph-CB')		CA'' → CA''' (㊦図 Aph-A''B)	

alienative Dominance	Rebelliousness		Withdrawal	
	Aggressiveness toward Social Objects.	Incorrigibility	Compulsive Independence	Evasion
	$AB' \rightarrow CB' \left(\ominus \boxtimes \text{Lph-C'B} \right)$		$C'A \rightarrow C'B \left(\ominus \boxtimes \text{Lph-CA}''' \right)$	

S. S の本文では, Withdrawal の例としては Hoboism [hobo は「米俚」, 浮浪労働者・放浪者・流浪乞食] 乃至 Bohemianism, Rebelliousness の例としては, 破壊的犯罪の傾向を備へた gang, そして, active な compulsive conformist の例としては, 過度に又不法に “ambitious” な人間 [p. 271], 更に compulsive achiever の名のもとに過度の競争を自他に強ひる事又自己の意志並びに normative pattern を強制する事 [p. 286] が, その例として挙げられてゐる。これは $A'B \rightarrow A''B$ の方向に見られる特徴である。更に又 passive な compulsive conformist は当然 CA' に該当すると思はれるが, T. Parsons ではこれが R. Merton の ritualism と重なり合ふ事が指摘されてゐる [S. S, VII, p. 258, 猶其処では Merton の挙げる innovation と ritualism が conformative なもの, rebelliousness と retreatism が compulsive alienative である事が指摘されてゐる。更には W. P, III, p. 75 参照]。

そこでついでに R. Merton の Anomie に関する paradigm を ABC 表との関連において参照すると次の如くである。なほ夫々の paradigm において, T. Parsons の夫れは Inter-act における object orient と attitude の2つの function から, 又 R. Merton では motivational function [即ち, attitude の面] が欠けてゐる事, 従つて R. Merton では専ら object orient の面からその paradigm が考へられてゐる事, 更に ABC 表では問題が専ら attitude の function から把へられてゐる事, が注意されねばならない。

Merton's paradigm

ABC 表

	Cultural Goal	institutionalized Means	
Conformity	+	+	$= A'B [CA]$
Innovation	+	-	$= \begin{matrix} A'B \rightarrow A''B \\ CA''' \end{matrix} \begin{matrix} [\text{smart guy}] \\ [\text{tough guy}] \end{matrix}$
系 [欠除]	\pm	+	$= \begin{matrix} AB' \\ C'A \end{matrix}$
Ritualism	-	+	$= CA'$
Retreatism	-	-	$= CA'''$
系 [欠除]	\mp	\mp	$= \begin{matrix} \diagdown \\ C'B \end{matrix}$
Rebellion	\pm	\pm	$= CB'$

註]

○Merton の註によれば, +acceptance, -rejection, \pm rejection of prevailing values and substitution of new values, その Merton の paradigm では, Cultural Goal は世俗的成功・金儲けとして把へられてゐる。従つて $AB'-CB'$ 的精神的な Cultural Goal は当然 \pm と考へられる。更に \mp は \pm と区別して SeinsWert の意味である。

○T. Parsons は Merton の conformity に関して、それを、4つの phase の間の Inter-act が健全な関聯を保つ場合の、従って、各 phase が夫々の role expectation を夫々に果してゐる場合の名称としてゐる。従って Conformity を represent するのは CA と考へられる。しかし、先述した social control が $L \begin{smallmatrix} \nearrow I \\ \searrow G \end{smallmatrix} A$ の方向をもった movement として、そして、A, ph を終着点としてゐる所から、A, ph を represent する A'B を特に conformity と呼ぶ事も出来るであらう。

○R. Merton における object orient からする定位と ABC 表における attitude の面からする定位との相同性並びに相異性は、特に Innovation と Retreatism において注目される。

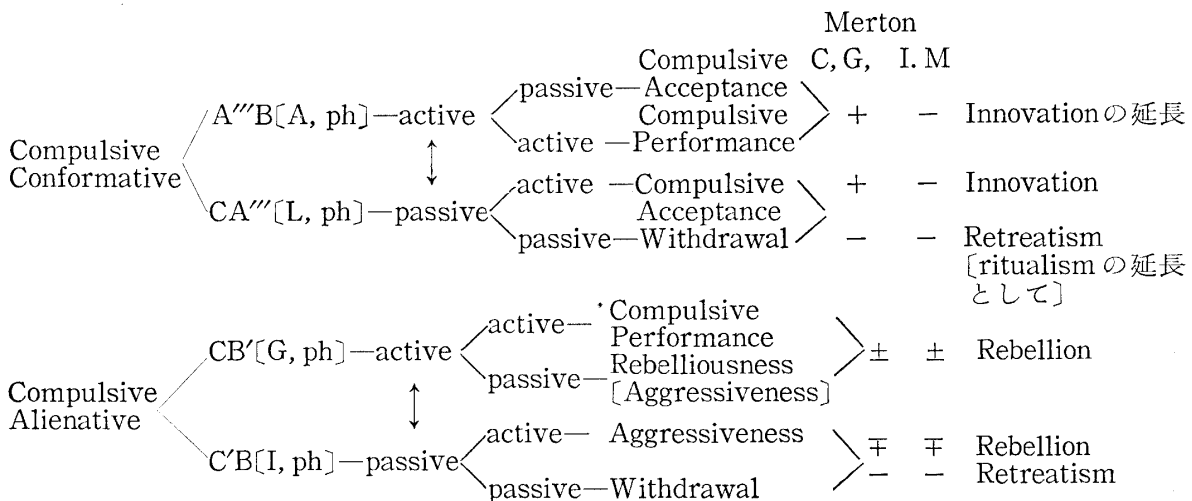
なほ Merton の paradigm に就いて、T. Parsons は自らのものが Merton のものに欠けてゐる motivation の function を含んでゐる事を一つの理由として、“此処に示された所見は、R. Merton の夫れを極めて重要な但し特殊なケースとするより一般的なものである” [S. S, VII, p. 257-258] と述べてゐる。

以上の事から S. S と W. P とのずれを重ね合はせると以下の如くである事が分る。

Deviance		W. P	ABC		S. S
I, A, ph =	i	Compulsive Acceptance	[passive] = A''B =	ii	Compulsive Performance [active]
II, G, ph =	ii	Compulsive Performance	[active] = CB' =	iii	Rebelliousness [active]
III, I, ph =	iii	Aggressiveness	[active] = C'B =	iv	Withdrawal [passive]
IV, L, ph =	iv	Withdrawal	[passive] = CA''' =	i	Compulsive Acceptance [passive]

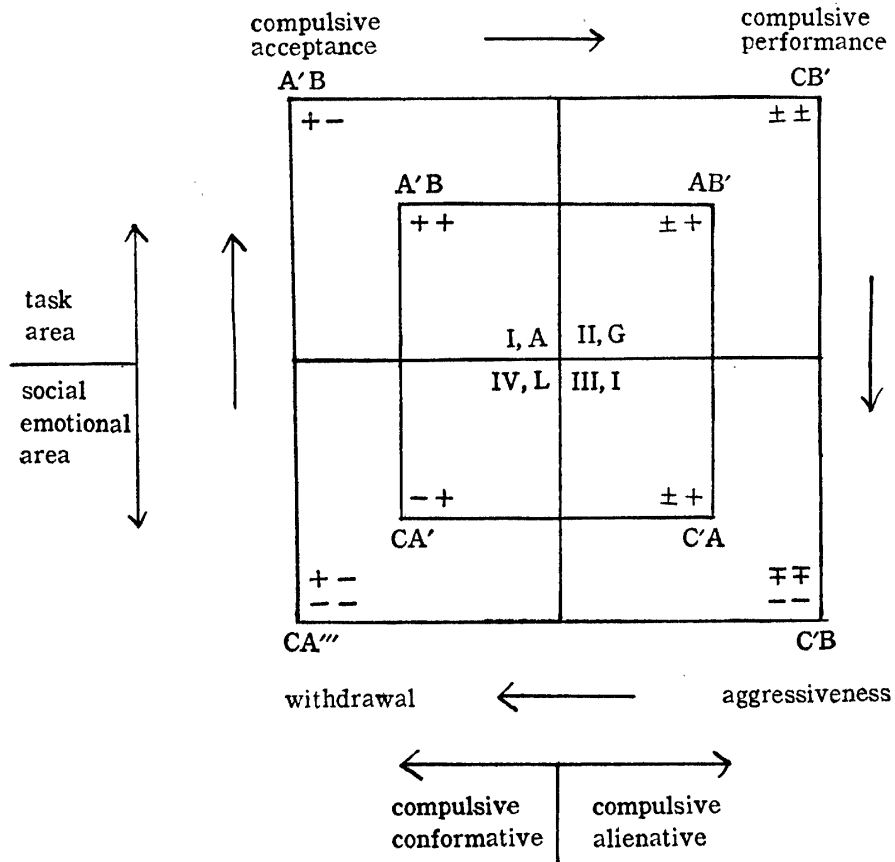
㊦図の W. P における 2 領域並びに 4 つの Deviance を、normative な social structure を固定した軸として、左へ一つだけずらすと S. S での 2 領域並びに 4 つの Deviance の位置付けが出て来る。

当然 S. S での把へ方が適切と思はれるが、W. P での夫れが誤りであるとは言へない。丁度、normal な場合の P. V の組合せが、 $i+ii=I$, $ii+iii=II$, $iii+iv=III$, $iv+i=IV$ 即ち、 $i \rightarrow ii \rightarrow iii \rightarrow iv \rightarrow i$ の方向になされてゐるやうに、Deviance の場合にもその pattern は W. P の夫れを基にして考へるならば、 $i+ii=I$, $ii+iii=II$, $iii+iv=III$, $iv+i=IV$ となると言へる。そして Conformative と Alienative の領域に関しては、S. S での類別を採るのである。結極 Deviance は次の如く把へるのが至当と思はれる。



図示すれば次の如くである。

④



註]

- Merton における I. M の+は normative pattern を示し、その-[±, 干]は deviance を示してゐる。又その deviance に関しては、C, G における+が量的 [conformative] な deviance を、その-[±, 干]が質的 [alienative] な deviance を示してゐる。
- 上の表で、初めの active-passive は同一領域内での相対的關係を示し、次の active-passive は同一 phase そのものの現象形体としての P. V を示す。即ち、例へば A''B は CA''' を passive とする active な deviance であり、かつはそのものとして時に active 又 passive な現象形体をもつてゐる。
- ④図における矢印の方向に active-passive の P. V を共有すると考へられる。従つて例へば CB' では Compulsive Performance を active な P. V とし、aggressiveness を passive な p. v としてゐる。又 CA''' では withdrawal を passive, compulsive acceptance を active としてゐる。

○2つの領域と Performance Process —

T. Parsons によると Performance Process は $L \begin{matrix} \nearrow I \\ \searrow A \end{matrix} G$ の movement として把へられてゐる。その movement の終局の Goal は、G, ph=AB' である。act 一般は、L, ph を起点として G, ph における idee・意味・価値を終局の目標とし、その目標を充足する事によって初めて充的な意味をもつ。逆に言へば、G, ph の価値・idee は、Learning Process において L, ph を肉化する事 [symbolization] によって初めて充的な Goal としての意味をもつ。そして L, ph 的 Leben, Energie を無視する事によって、G, ph の deviance が起ると

考へる事が出来る。即ち、G, ph が自らに課せられた role expectation を超えて自らの意味・価値を主張する所に Compulsive Performance—Aggressiveness を P. V とする CB' 的破壊的破壊的理想主義が生起するのである。

元来 G, ph の normative な role-expectation は、A, ph と task area を共有しつつ、act 一般の意味化 [evaluation] として act そのものの目的論的 Goal たる所に示されてゐると言へる。

しかし同時に、G, ph における意味・価値・Idee が、潜在的に alienative な性格を担つてゐる事が、注目されねばならない。即ち、G, ph の Idee 化の働きは、act 一般の終局の Goal であると同時に、A, ph 的 adaptation を超える性格を帯びてゐる。Social control の movement の終着点が A, ph であり、performance Process [裏返へしにすれば Learning Process] の movement の pole が G, ph である事は、夫々の phase が task area を共有しつつ、而も同時に social adaptation を示す A, ph と act 一般の Goal としての G, ph とが亀裂 [p. v の共有による連続性と共に否それ以上に非連続的な断絶] を示してゐる事をあらはしてゐる。G, ph は act 一般の最終 Goal でありながら、而も同じ act の他の最終 Goal である A, ph を超越してゐるのである。この事は、本文において指摘した如くに同一の行為の当為性 [べし] が、同じ“べし”のもとに時としては A'B べし又時としては AB' べしとして発現し、而も AB' べしは A'B べしをべしたらしめてゐる Grund を否定し超越する性格を担つてゐる事に見る事が出来よう。

Compulsive conformative と compulsive alienative の2つの領域を、S. S を参考にしながら訂正する理由の一つは此処に在る。

上述の事から、Social structure そのものの機能を、閉鎖的作用と開放的作用乃至吐く息と吸ふ息 [ベルグソンに倣ふなら、社会そのものの機能としての開らく働きと閉じる働き] といふ2つの相反的な機能において把へる事への手がかりが展らけると言へるかも知れない。即ち、政治・教育・宗教 etc は、一方では文化価値として吾々の行為一般に最高目標となるものを指示すると同時に、他方ではある意味で別種の最高価値である社会的統制的目的性を突破し超越するといふ相反的な二重性格を担ふ事が、Social structure そのものの構造から理解されるのである。先きに挙げた道德の問題としての吾々の当為性の A'B 的べしと AB' 的べしの相反的二重性も、吾々自身の Social structure そのものの構造並びにその機能に根ざした必然的な相反的二重性と考へられるのである。その事は social structure の場においてみられた場合の教育・宗教・政治にもそのまま当てはまる事である。

Ⅲ. Deviance の諸現象

①隣接し合ふもの

○A''B 対 CB' —— 上述した A, ph と G, ph の task area 的同族性と alienative に関する相反性との拡大された現象が、A, ph 的 Deviance [A''B] と G, ph 的 Deviance [CB'] との間に見られる。両者が共有するのは、compulsive Performance といふ P. V である。此の

事は例へば A''B 的家康, CB' 的信長が^{〇〇}乱世の task leader であった事に示されてゐる。所が、前者は passive な形では compulsive acceptance [normative pattern の acceptance の強制] であるのに対して、後者は A'B-A''B に対する Aggressiveness をその passive な P. V にしてゐる。この事は、例へば A''B 的家康が乱世→治世, CB' 信長が治世→乱世にかけての leader 性格を担つてゐる事に示されてゐる。又両者が compulsive performance を active な P. V として共有する相反者である所から、A''B 的術策的権力主義者と CB' 的破滅的超俗的理想主義者との敵対性の烈しさが理解される。

○CB' 対 C'B——normative pattern への Aggressiveness を共通の P. V とするのは、CB' と C'B である。但し前者はそれを passive な P. V として、後者はそれを active な P. V として。説明文で挙げたドストエフスキイの“白痴”における C'B ムイシュキンと CB' ナスターシャとの間に働いた相互牽引は、恐らくこの共通の P. V から来てゐる。而もその Deviance が、A 欠除の compulsive alienative に属してゐる事が、両者の同族意識の強度を更に強めてゐる。ゴッホとゴーギャンの間に働いた牽引作用の由来もそこにあったと言へる。ところが CB' の active P. V と C'B の passive P. V とが、両者を相反的に離隔させる。ゴッホの画に溢れるのは“ldee における狂熱”である。その狂熱は彼を駁り立てて、絵画を超えた実践的思惟の世界へとおもむかせ勝ちであつた。一方ゴーギャンの“郷愁愛”を本質とする画業は、彼を更にタヒチ島への帰郷に迄 withdraw させた。その Performance と Withdrawal とに由来する離隔が、伝記に見られる悲劇的な狂態に連つてゐる。

○CA''' 対 C'B——withdrawal といふ現象 [Hoboism or Bohemianism] には、C'B 的 Evasion と CA''' 的 Withdrawal といふ2種類の形体が考へられる。その相異は、前者がその active P. V において反 A'B 的 Aggressiveness を示すのに対して、後者がその active P. V において A''B 的 compulsive acceptance への上昇を求めその acceptance を通じて normative pattern への相補性的連りを示す所にある。

CA''' 的浮浪者と C'B 的浮浪者とは、同一の浮浪者といふ現象形体を示しつつ、而も前者は量的 deviance として“やくざなかたぎ”であり、後者は質的 deviance として世間への rebelliousness を P. V とする“やくざなやくざ”である。CA''' 的浮浪者が世間への rebelliousness を示す場合には、それは、彼が世間への同和性並びに世間への意志を持つにも拘らず心ならずも余儀なくされてゐる彼の状況 [並びにその Grund となる社会制度] に由来するものである。C'B の rebelliousness は、彼の状況並びに社会制度に拘りなく彼が世間に対して抱く active P. V としての rebelliousness である。

Merton はチャップリンの映画に現はれる浮浪者・失業者・乞食 etc を retreatism の例として挙げてゐるが、その際恐らくは、チャップリン自身は C'B 的 deviance, 主人公の浮浪者は CA''' 的 deviance と言へよう [但し、当然作者の性格が作中人物にも投影されてゐるようが]。

○CA''' 対 A''B——compulsive acceptance を共通の P. V としつつ、A''B は compulsive performance を active P. V とし、CA''' は withdrawal を passive P. V としてゐる。

改めて CA''' 的 deviance の3つの現象形体を示すと次の如くである。

①その passive P. V に専らアクセントが置かれる場合—— CA''' 対 $C'B$ の項目で挙げた CA''' 的浮浪者はこれに該当する。normative pattern から withdraw する事によって専ら passive P. V のみを浮上らせてゐるのが、 CA''' 的浮浪者的 withdrawal である。但しこの場合でも $C'B$ に対して相対的な性格を指摘するとするなら、その潜在的 active P. V において CA''' 的浮浪者は normative pattern への連りを示してゐる。

②特定の pattern への適合を欠いた生まのまの質料的 Energie が空転的奔騰を示す場合—— CA''' に特有の、“Form”を欠いたなまのEnergieが、“慾望の直線性”を示す事によって破壊的ナラズ者 tough guy が誕生する〔潜在的理想性を孕んでゐる CB' 的ナラズ者との相異〕。 CA''' ラゴージンの位置は此処にある。但し上述のやうに、彼の Ethos からすれば、この場合でも彼は同時に $A''B \rightarrow A'B$ への相補性的同和性を示す事によって、彼は“やくざな^〇か^〇た^〇ぎ”である。ドストエフスキイの“白痴”ではそのラゴージンのならず者のかたぎ氣質が vivid に描かれてゐる。

③何等かのFormを獲得した場合——④ $A''B \rightarrow A'B$ への相補性的連りによって何等かの形で Normative pattern への適合性を獲得した場合に、 CA''' の質料的 Energie は、 CA''' を実践的な天才的人物に迄上昇させる〔秀吉の場合〕。⑤別種のFormを介して間接的に $A'B$ への和合性を示す時に、時として CA''' は芸術上又思想上の天才的指導者となる〔ピカソ・ラッサール〕。

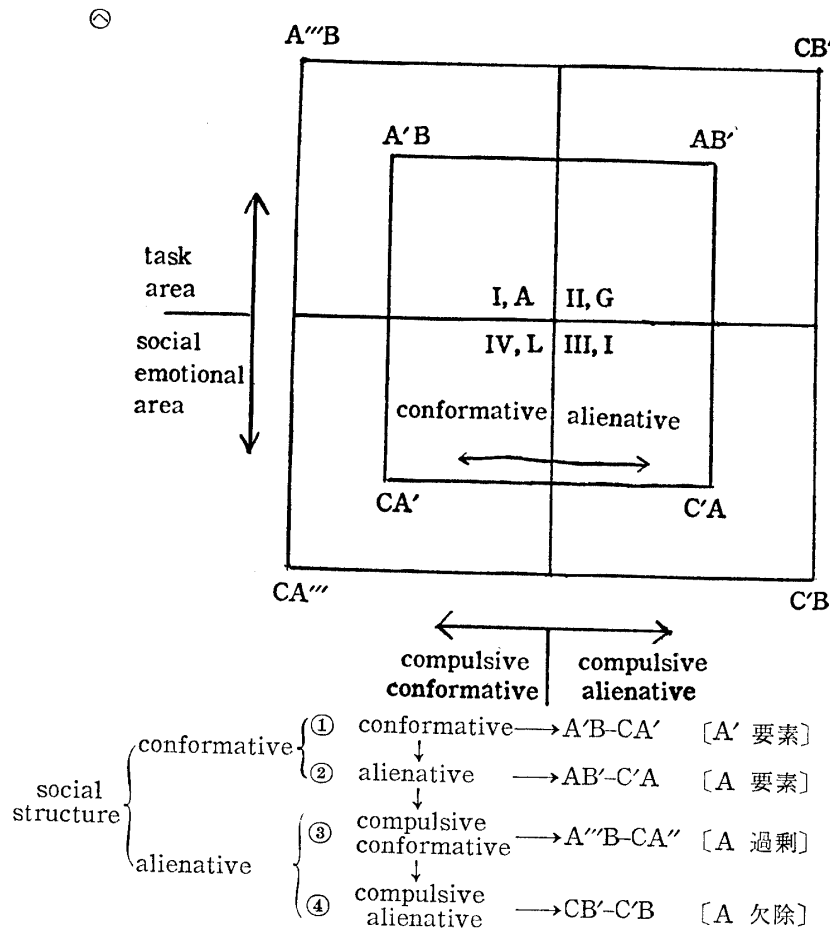
$A''B$ との関係が問題になる場合の CA''' は多くの場合②の形で考へられる。その例は西部劇に見られる。 $A''B$ はそのB的配慮によって、時として銀行家・町長・保安官 etc の仮面を冠った術策的権力主義的悪人として現はれ、 CA''' はその手下・かいらいとなる白痴的衝動型 tough guy の肥満型として現はれる。両者をつないでゐるのは、Compulsive acceptance といふ共通の P. V である〔 $A''B$ と CA''' の外に $C'B$, CB' がそるへば、西部劇における outlaw の世界が完備すると言へよう〕。日本の戦後の“太陽族”の破壊的 Energie も、 CA''' 的衝動性の現はれとして、その passive な形では withdrawal へと傾きつつ而も同時にその active な形では、彼等の外見上の無秩序・頹廢・破壊性にも不拘、 $A''B$ 的ファッション的 Form〔鉄の規律〕への同和性を介して間接的には $A'B$ 的健全さへの相補性的連りを示してゐると言へよう。

②対応し合ふもの

CB' 対 CA''' , $A''B$ 対 $C'B$ ——これは説明文並びに本文での“似而非の関係”の項目に委ねておく。後者の $A''B$ 対 $C'B$ は $A'B$ 対 $C'B$ の系として扱はれるべきであらう。

なほ附言すれば、Deviance と normative を含んだ social structure は、A要素を基準にして、conformative→alienative の方向に順序付ける事が出来る。

又、task area と social emotional area の2つの領域は、normative pattern の範囲内では、B対Cの区分と考へる事が出来る。但し、夫々の area において、如何なる task leader, sociometric star が選出されるかは、当該社会乃至 group の先述した二重性格に応じて定まると言へる。



付]

○以上 T. Parsons, R. Merton に関しては、園直樹兄の教示に負ふ所が多い。なほ、Deviance に聯る問題を扱ったものとして、同兄の“ボーダー・ライン層の意識過程”〔日本福祉社会学編“低所得階層の生活構造”1959.〕参照。

Ⅲ. A B C test

◎説 明

質問用紙〈次頁〉の横の欄Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳは、夫々 T. Parsons における A, G, I, L, ABC 表における CA', A'B, AB', C'A に対応する。本来ならば番号は、T. Parsons の I=A, II=G, III=I, IV=L, にならふのが便利であるが、CA 的 A 要素が他の全てのタイプの Ur-Leben の意味をも担ってゐる事を考へて、前記の如き配列にしてある。

更に各欄の夫々の組合せ〔例へば I=3, II=6, 基本的 Ethos CA'+副次的 Ethos A'B, 又 II=4, III=5, 基本的 Ethos A'B+副次的 Ethos AB'〕は、ABC 表の説明文での諸定理が、現実どんな形をとって現はれるかを実証する事になった。同時に又、その説明文に不足してゐた事への反省にもなった。但し、数次の訂正と 200 数人に就いてのテストの結果、CA''' と A''B との区別〔更に CA'-CA''-CA''' の区別〕が検出不能な事、又、C'A と C'B との区別がやや曖昧である事が分った。その意味では、このテストはなほ pretest の域に留まるものであるか、乃至は、更に第 2 表をまっけて初めて完全なテスト表になるか、であるが、当面の必要だけは少くとも満

ABC表による性格論と芸術論

A B C test

◎質問用紙

	I	II	III	IV
☆ 結婚について（親の意見とくいちがいのあるとき）				
一	親の意見を充分に尊重する。	五分五分の立場で妥協点をみつけるまで話し合いをする。	親の無理解をあくまで説得する。	家をはなれて勝手に結婚する。
☆ 人気スターについて				
二	なりたい。あこがれる。少くとも、その存在はみとめる。	はかないスターになるよりは健実な生活力を備えた人間になる。	その卑俗さに反撥を感じる。	人気というものの浮動性にハラハラする。又は気の毒に思う。
☆ 世の中の道徳について				
三	他人から後指をさされるようなことはしたくない。	吾々が社会生活を営む以上当然守られるべきことである。	それは功利的なおきてでしかない。より純粋な精神のおきてがあるはずである。	恐ろしいと思う。
☆ 迷信について				
四	信じる。あるいは心ひかれる。信じないまでも関心をもつ。	生活の合理化と進歩によって打破されるべきである。	まじめな信仰と比べて、その価値をみとめることはできない。	それはそれなりに価値をもつと思う。
☆ 生存競争について				
五	つらいことだがやむをえないと思う。	生きていく以上当然の事である。	より高い価値のためには時として、あえて生活上の敗者となる事がおととい。	逃げ出すにかぎる。
☆ 落伍者について				
六	気の毒だとは思いますが自分にはなりたくない。	無関心又は向上心の欠除の結果だともう。	その中に精神貴族や天才が居るかもしれないと思う。	身につまされる。
☆ 怠惰について				
七	なまけているとそれだけで身も心もなまって不健全になる。	明日の活動のレクリエーションとしてならみとめる。	精神の惰眠を意味する限り悪徳である。	うしろめたい安心を感じる。
☆ 背徳について				
八	恐ろしいと思うが時として魅力的である。	少くとも吾々の実生活では許せないと思う。	反俗精神又は理想主義の一変種としてならみとめる。	すべて存在するものは意味をもつ。
☆ 権力について				
九	恐れと憧れを感じる。	権力に対しては権力が必要であると思う。	権力が人間を俗物にすると思う。	無力な反撥を感じる。

◎回答用紙

例

I	II	III	IV
◎	○	×	△

注意……○どうあるべきか、あるひは、どうありたいか、
といふ事は除外する事。

○しっくりするしないは、よい悪いとは無関係。

- ◎……最もしっくりするもの
○……二番目にしっくりするもの
△……しっくりしないもの
×……最もしっくりしないもの

氏 名

	I	II	III	IV
一				
二				
三				
四				
五				
六				
七				
八				
九				

たすものと認める事が出来る。

又、テストの途次、質問の辞句が一般向きではないといふ疑義に出くわしたが、この点は、将来より適当な辞句に改められるべきであらう。注意は、例へば ABC 表に就いて熟知の人の場合は、よく守られない事があったが、未知の人の場合は、テストの際注意に就いて念をおす事で割合に守られた。

☆CA' 群——他の個所の◎とは無関係に、I に◎が3つ以上 [$I \geq 3$] のものは、CA' 群である。この事は、観察法による身近な人達へのテストから判明した事であるが、CA 的A要素が、他の全てのタイプの Ur-Leben である事とも照応してゐる。なほその際、I が基本的 Ethos、組合はされる II, III, IV が副次的 Ethos を示してゐる。

① 類型的 CA'

	I	II	III	III
一		◎		
二	◎			
三		◎		
四	◎			
五		◎		
六	◎			
七			◎	
八		◎		
九		◎		

② インテリ CA'

	I	II	III	III
一	◎			
二	◎			
三		◎		
四			◎	
五	◎			
六			◎	
七			◎	
八		◎		
九			◎	

詩人・落伍
③ 垢抜けした CA'

	I	II	III	III
一	◎			
二				◎
三	◎			
四		◎		
五	◎			
六				◎
七				◎
八	◎			
九				◎

① I + II = 類型的 CA' [例、I=3, II=5, III=1, ◎2個以下は切捨てて考へる。この①は定理1の相補性の原理に照応するものである]。

② I + III = インテリ CA' [観念 AB' 生地インテリ CA', 説明文参照]。

③ I + IV = 詩人 CA', 落伍しかけた CA', 垢抜けした CA' [説明文で不足してゐたもの]。

☆CA' → CA → C'A

④ CA' → CA

	I	II	III	III
一	◎			
二			◎	
三	◎			
四		◎		
五				◎
六	◎			
七		◎		
八				
九		◎		

⑤ CA

	I	II	III	III
一			◎	
二	◎			
三				◎
四		◎		
五				◎
六	◎			
七			◎	
八				◎
九		◎		

⑥ CA → C'A

	I	II	III	III
一			◎	
二		◎		
三				◎
四	◎			
五			◎	
六				◎
七				◎
八			◎	
九				◎

②CA'→CA, ③CA, ④CA→C'A, IとIIから◎が減って, IIIとIVに移ってゆくのが, CA'→CA→C'Aの変化を示してゐる。この事は, 説明文で中間型CAに就いて説明した事に照応してゐる。

☆A'B——IIに3つ以上のもの〔II≥3〕。例へば, I:II=4:5と現はれるのはCA'である。しかし, 2:7ならA'Bである。なほ, テストの結果IIに◎が集るA'Bでは, Iには◎が殆ど出ない〔端数の◎〕事が分った。それに反して, Iに◎が集るCA'では, IIにも◎が多く現はれてゐる。この事は, 説明文でのCA'の無意識的A'Bポーズ, A'Bの意識的意図的CA'ポーズといふ事に由来するものである。即ち, 回答に際して注意がよく守られる場合, 記入の態度は, ポーズに関して無意図的である。従つて, CA'はA'Bポーズを自然に示し, A'BはCA'ポーズを示さない。上述の事は, その事に照応するものである。

① A'B

	I	II	III	III
一		◎		
二		◎		
三			◎	
四		◎		
五	◎			
六		◎		
七				◎
八		◎		
九		◎		

④ インテリA'B

	I	II	III	III
一			◎	
二		◎		
三			◎	
四		◎		
五			◎	
六		◎		
七			◎	
八			◎	
九		◎		

⑦ ものわりのよいA'B

	I	II	III	III
一		◎		
二				◎
三		◎		
四				◎
五		◎		
六				◎
七		◎		
八				◎
九		◎		

① II + I [但し I ≤ 2] = A'B [上述の如く殆どのA'BではIに◎がない]

④ II + III = インテリ A'B

⑦ II + IV = もの分りのよい A'B [説明文でのA'BとCB'との似而非の關係に照応してゐる。例へばソフィストの性格は恐らくこれである]。

☆AB'—CB'——IIIに◎が多いもの。但し, I, IIに3つ以上の◎が組合さつて現はれるのは, 夫々上述CA', A'Bである。従つて, 組合されるのがI, IIの場合, 夫々I, IIは2つ以下である。

⑧ III + II [II ≤ 2] = AB' } CB'に関するテストの量は充分ではなかったが, AB'とCB'

⑨ III + IV [但し III > IV] = CB' }

は共にIIIを基にしながら, AB'はA'Bを副次的Ethos, CB'はCB'を副次的Ethosとする事が分った。この事は, AB'とA'Bとの同族性, CB'とCB'との同族性に由来するものと考へる事が出来る。

㉞ AB'

	I	II	III	III
一			○	
二			○	
三		○		
四			○	
五			○	
六		○		
七			○	
八			○	
九			○	

㉟ CB'

	I	II	III	III
一			○	
二				○
三			○	
四				○
五			○	
六				○
七			○	
八			○	
九			○	

☆C'A-C'B

㊦ C'A

	I	II	III	III
一				○
二			○	
三				○
四			○	
五				○
六				○
七			○	
八				○
九				○

㊧ C'B

	I	II	III	III
一				○
二			○	
三				○
四				○
五				○
六				○
七	○			
八				○
九				○

㊦ IV + III [但し IV > III] = C'A [III > IV = C'B と区別される]

㊧ IV + I or III [但し I, III ≤ 2] = C'B [I + IV = C'A との区別]

◎実 例

		文芸学科3回生 [特 講]		文.4[at random]		福祉学科3	
		男 子 14	女 子 15	女 子 14	女 子 15	女 子 14	女 子 15
A B族	A'B	0	0	1	4	4	9
	A'B-AB'	0		3	5	5	
	AB'		1		0		0
C A族	CA'-A'B	5	4	3	4	4	
	CA' < AB' / CB	1	0	1	1	1	
	CA'-CA	2	2	4	8	1	6
	CA	4	0	0	0	0	
	CA-C'A	0	1	0	0	0	
	C'A	0	1	0	0	0	
C B族	C'B	0	0	0	0	0	0
	CB'	1	0	1	1	0	0

ABC表による性格論と芸術論

○ A'B の数 文3, 男子=0 女子=7 男子 CA'→CA=2 } 6 が女子=7 にかわる。
西京大学の特長ないし文科系に於ける男子の性格? CA=4

○ $\frac{A'B + [A'B \rightarrow AB']}{CA' + CA}$, 文3. 女子 = $\frac{7}{7}$, 福3. 女子 $\frac{9}{6}$ } 文芸学科 対 福祉学科
 $\frac{A'B}{[A'B \rightarrow AB']}$, 文3. 女子 = $\frac{1}{6}$, 福3. 女子 $\frac{4}{5}$

○ 男子と女子における反俗性

文3. { 男子——AB'=1, CB'=1, CA→C'A=0, C'A=0
女子——AB'=0, CB'=0, CA→C'A=1, C'A=1 }
文4. 女子——AB'=1, CB'=1, CA→C'A=0, C'A=0
福3. 女子——AB'=0, CB'=0, CA→C'A=0, C'A=0

○ AB族 対 CA族, $\frac{AB族}{CA族}$

文3. 男子 = $\frac{0}{12}$, 女子 = $\frac{7}{8}$

文4. 女子 = $\frac{4}{8}$

福3. 女子 = $\frac{9}{6}$

文3. 女子 A'B の比率 $\frac{7}{15}$
文4. 女子 A'B の比率 $\frac{4}{14}$ } に平行

IV. 本 論

I. 世俗グループとその芸術

○ 世俗グループと反俗グループ——[A'B+②組(CA族)=世俗グループ]+[AB'+3組(CB族)=反俗グループ]=social structure を, 以下を通しての大前提とする。但し, I章で触れたやうに, T. Parsons の social structure を考慮に入れると, 世俗グループは, AB'を加へた A'B+AB'+C'A+CA' [Aph+Gph+Iph+Lph I章⑥参照] といふ形で把へる事が出来る。しかし此処では, AB'における“人間”と“事柄”とのずれ〔後述 AB'の項 p. 55〕を考慮に入れて, AB'を反俗グループに入れてをく。この世俗グループにおける芸術〔以下Kの略字〕の意味は, その中核となる A'Bを発端として把へられるべきである。

○ 世 間 人 A'B

△ R. Merton のいふ conformity に該当するのは, ある時は中間型 CAであり, 又ある時は social control movement の終点である Aph 的 A'Bである。CA と A'B は, 広義の世間の中核を形造り, そして, その中核の主導権を握るのが A'Bである。CA は, T. W. Adorno のいふ “easy going” として, そのC要素によって寛容で開放的な, 又, B要素を欠除する事によって非主導的なタイプである。

世俗グループは, A'Bを主導的中核とする故に, 其処で把へられるK〔その他学問・宗教・etcの文化価値〕は, その相補性となる CA的領域に限定される。その際II章で明にされたやうに, A'Bは, AB'的又 C'B的〔又 CB'的〕な副次的 Ethos によって, 反俗グループ又反俗Kへの理解を示す可能性を持つてゐるが, その理解は, 事態を曖昧かつ混乱なものにするだけのものにしかない。従つて, 以下副次的 Ethos は, その基本的 Ethos へ還元した上で問題を考へてゆく必要がある。

註] AB' 的 A'B [インテリ A'B] に就いては、後述 AB' の項 p. 55 参照。

△副次的 Ethos による外見を払拭して、基本的 Ethos を基にして学問的態度そのものを考へると、それは、抽象的客観的意味での普遍妥当性をもつものではない。学問的態度そのものに、もともと主観性が宿ってをり、普遍妥当性は、学問的態度における主観的格率を意味するに留まる。

従って、K論においても、その学的態度そのものに主観性が宿ってゐるといへる。即ち、例へば A'B 啓蒙的——CA 実証的——CA' 情緒的学的態度でK論がなされると、意識的無意識的に [CA' Poesie+CA Technik]=K が中心的な課題として選ばれ、[[CA' Poesie+CA Technik]+B要素]=反俗 [AB'-CB'-C'B] Kは除外されるか、或ひは、副次的 Ethos によって歪曲的に理解されるか、になりやすい [後述, Schelling の方式 p. 53 参照]。

○庶民 CA' 群

△ 以下世俗グループのKは、当然 CA' 牧歌Kが中心になるが、それを取上げる前に庶民 CA'・芸能人 CA' が、夫々その前段階として考へられる。

△ 説明文の㊦図四辺形の左半分が、広義の庶民層を示してゐる。狭義には、A要素の稀薄な C'A, CA を除外した CA'-CA''-CA''' の太線が、庶民プロパーを示してゐる。その CA' 群は、Ⅱでふれた如くに T. Parsons のいふ latent pattern maintenance phase を represent するタイプであり、そのB欠除性を A'B を基準にして anomie とみるならば、R. Merton のいふに ritualism に該当する。

△ 元来A要素には、2種類を考へる事が出来る。AB 的A要素と CA 的A要素である。換言すれば説明文で触れたやうに、前者の術策的権力意志と後者の純粹衝動的意志、又、自然主義的自然と生命的自然の2種類である。T. Parsons でさう考へられてゐるやうに、Lphase を他の諸 phase の latent な源泉と見るならば、それは時として、完全に latent なタイプ以前の機能性として把へられるか、さもなくば、latent な源泉として他の phase を支へる Ur-Leben 的 phase と考へられる。その事は、CA' 群が、他と並ぶタイプの一群であると同時に、そのA要素が他の全てのタイプの Ur-Leben である事と、照応してゐる。

その CA 的A要素を Ur-Leben として、其処にB要素が加はる [同時にC要素と離れる] 事によって、世俗的配慮によって formen された生の Energie=世俗的術策的欲望=自然主義的自然=AB 的A要素が現出すると考へられる [後述, シラーの自然観 p. 60 参照]。A'B を主導的支配的大衆, CA' を非主導的庶民たらしめるのは、夫々の含む以上の2種類のA要素である。フィジオグノミッシュには、その2種類のA要素から、A'B の暗い偏狭な表象, CA' の明るい寛容な表象が生じる。

△ その CA' 群には、詳しくは3種類が考へられる。

①生まの素朴な庶民 CA' [系, インテリ CA' or A'B 的権力意志に庇護された貴族的 CA' 後述Ⅲ章]

②芸能人 CA'

③牧歌K家 CA' [系, 文学研究家 CA']

その3つは、同質的連続性をもって連り、①②は③の前段階と考へられる。

①庶民 CA' 群

△ 例へば庶民プロパー CA' の副次的 Ethos の種々相を、芸能人 CA' or 牧歌K家 CA' の夫等と比較する事は、具体的な社会層としての庶民層を把へる場合に必要な事である。しかし此処では、上述の場合と同様その基本的 Ethos に問題を還元して考へる事にする。

なほ又、CA'-CA''-CA''' に関する区別に関しては、ABC テストでは現はれないので、夫々の場合に観察法を適用する外ない。

△ CA' 群は、そのB欠除性によって、多くの場合、A'B 的世間の“縁の下^{〇〇}の力持ち”的な陰の部分として、“the lower middle class”を形成してゐる。そして、事実上“the lower middle class”に属してゐるとしても A'B は、可能的には已にその階層に属さず、それに対して主導的性格をもつ大衆^{〇〇}に属してゐる。

△ その庶民に関して、庶民的 Pathos といはれるものは、〈CA''' 的衝動性+CA' 的明るさ・お目出度さ+CA' 的牧歌的甘美哀傷性〉といふ合成物と考へられる。又、庶民が“哀しい存在”であるのは、彼等が自らの非力さ、無力さに無自覚な長閑さ〔B欠除に由来する〕を示す事に対して、さういはれるのである。

△ 資本主義体制のもとばかりでなく、たとへ社会主義体制のもとでも、CA' 群は多くは、A'B 的世間の陰の部分として日の当らない場所を形成しつつづけるであらう。

例へば社会主義の基盤となる基礎情念として、社会主義的な“愛と憎しみ〔怒り〕”を考へると、それは元来は、庶民 CA' への仲間愛・同志愛と優勢な A'B 的権力意志の優勢な権力に由来する人間悪・社会悪への憎悪〔怒り〕とから成るものである。ところが現実の社会主義では、愛も怒りも共に“下位の A'B”を排他的な意味で中核とするものに変質する可能性が多い。即ち、怒りは A'B 的権力意志による上下相剋となり、愛は当然 A'B の排他的な仲間愛となる。そして結局、CA' 群の多くは、権力の座から離脱した場所で相不変広義の被支配階級として日の当らない日陰の存在であり続けるに違ひないといへる。

△ 世俗の権力面と CA'——世俗の権力面で Führer となるのは、平時ならば A'B、そして、非常時ならば CB' [or AB'] と考へられる。又、世俗的精神面〔例へば精神的指導者 or 大学の学長〕での Führer としては C'A が選ばれるであらう〔I章, task leader と sociometric star 参照〕。しかし、例外的現象として、世俗の権力面にまぎれこんだインテリ or 貴族的 CA' 群が、カブキでいふシロズラの統領として祭り上げられる事がある。そのシロズラの統領となる CA' は、恐らくは、A'B を副次的 Ethos としかつは他動的にその世界にまぎれこんだ CA' である。そしてその際、シロズラの CA' 的統領のかげには、必ず A'B 群がアカズラの黒幕の実権者として控へてゐるのが常である。ただ CA''' タイプの場合、彼は、シロズラ的性格と共にその異常な行動力によって、同時にアカズラ性格をも兼備した Führer となる可能性を例外的に持つてゐる。例へば、CB' 信長、A'''B 家康と並ぶ秀吉の CA''' 的性格が夫れである。

註〕 コミュニズムが、その基礎情念特にその“怒り”において、殆ど陰惨なまでに異常な敵愾心を纏綿

させてゐるのは、現実の革命・闘争において要求される敵愾心の強烈さではなく、寧ろ、祖師マルクスの CB' 的限界踏越的な怒りの苛惜なさに由来を求める事が出来る。

而もその際、CB' の人間はマルキシズムにとって許すべからざる反社会的タイプである。その事は、ソ聯におけるドストエフスキイ CB' の取扱ひ方に見る事が出来る。ところが、マルキシズムの祖師マルクスその人が CB' 的 Ethos の持主であった事は、注目されて然るべき事である〔マルクスの CB' 的性格に関しては、カー評伝参照〕。

②芸能人 CA' 群

△ 実生活的世間の中核が A'B であるとすれば、芸能人もある意味で庶民と等しく現実の生活からの括弧付けを加へられた世界の住人として、CA' 群に属してゐると考へられる。

此処でも、実生活的庶民と芸能人 CA' 群との副次的 Ethos の相異、又、その内部での、例へば万才師の場合、その二人が如何なる副次的 Ethos 上の組合せを形成してゐるか、といふ類ひの問題、又更に、庶民 CA' 群と比較した場合の芸能人 CA' 群の CA' 群における CA' 的性格の比率等々の事に関して ABC テストを加へる必要があるが、それは将来の問題として、此処では上の場合と同様その基本的 Ethos をめぐる問題に考察を限ざる事にする。

△ 大衆的芸能にたづさはる人に 2 種類が考へられる〔勿論一人で両方を兼ねる場合を含めて〕。

1. 万才・落語・講談・浪曲・歌謡曲・映画・ショウ etc の作家、脚本家、演出家、プロデューサー。
2. 万才師・ハナシ家・浪曲家・歌手・俳優・おどりこ etc としてそれ等を実際に演じる芸能人。

前者が直接に関係をもつのは、大衆的芸能の内容^oに^o関してである。そして、その内容を規定するものとして、一般的に、CA' Poesie に由来するものと A'B の CA' ポーズ〔大衆的ミーハー調、後述 p. 42 参照〕によるものとが考へられる。大衆芸能の内容の質を代表するのは前者〔CA' Poesie〕であり、量を代表するのは後者〔A'B の CA' ポーズ〕である。

そして後者の場合は、A'B の CA' ポーズに生地^oの A'B 的配慮^oがつけ加はる事によって、そのポーズは、時として商業主義を背景にする大衆への意図的媚態、乃至、A'B 的 Sitte への配慮と結付いた勸善懲惡主義的政策主義〔コミニズム的 or ファシズム的プロパガンダ〕と結付きつつ現はれるのが普通である。

△ 大衆芸能を実際に演じる側の芸能人の場合には、前の場合とは逆に、量的には CA' 群として質的には時として A'B 更にそれ以外のタイプが、芸能人の基本的 Ethos を示してゐる。

その芸能人は、当然、職業的芸能人を主体にしつつ、更には、セミプロ的 or 教養派的芸能人〔ラジオのイロモノ担当のアナウンサー、20の扉・話の泉の常連 etc〕を含んでゐる。そして、それ等の人達に日曜画家の多い事は、芸能人 CA' と牧歌K家 CA' との同質的連続性を物語る事である。

△ 例外的芸能人の基本的 Ethos として、AB' or C'B, CB', 更には特に同族中でも CA''' or C'A が考へられるが、此処では特に A'B 的例外的芸能人に就いて考へる事にする〔以上のうち特に CA'' 道化師対 C'B 道化師に就いては後述 p. 46 参照〕。

普通 A'B は、いかにカマトト演技に腐心するにしても、大衆の人気を獲得する事は難しい。無論上述の如くその内容に関しては、A'B の CA' ポーズによる大衆的ミーハー調が量的に多いが、それを実際に演じる側には、それは歓迎されないのが普通である。たとへば A'B が舞台に登れば、一言も発しないうちに観客は、バツの悪い白けたものを感じるであらう。

ところが、世俗的権力面にまぎれこんだ CA' 群に例外的な成功の例があるやうに、普通なら CA' 的な芸能の世界に無縁な筈の A'B が、同様に何等かの偶然によって、即ち、たとへば年少時にその世界に他動的に入れられた場合に、例外的な芸能人 A'B が、而も、その B 要素を駆使する事によって、稀に CA' 芸能人を圧倒する成功を収める事がある。そしてその成功は、常に大衆からの反撥と危く境を接した極めて危険な成功である。例へば映画での田中絹代、流行歌手での美空ひばりが、その例である。

△ なほ囲碁将棋の世界は、それが特にプロの世界となると、烈しい勝負の世界として A'B 的なものが連想されるが、しかし、その世界はそれ自身としては上の場合と同様、現実の A'B 的世界から括弧付けの加へられた CA 的世界といへる。従って当然、その世界にも CA 族に属したタイプが多いのが当然であるが、上の例にならふならば、此処でも年少時に他律的にその世界にまぎれこんだ A'B の木村名人や大山名人が、長く名人として君臨し続けた事が注目される。例へば、よく“将棋界の秀吉論”がなされるが、基本的 Ethos の上からいへば、恐らく、塚田一信長 CB', 升田一秀吉 CA'', 大山一家康 A'B といへる。

③牧歌K家 CA' [系, 文学研究家 CA]

△ 後述する Schelling の方式 Poesie+Kunst=Kunst は、CA' Poesie+CA Kunst[Technik]=CA'K と考へる事が出来る。CA 族の特徴である相互滲透性から CA'→CA→C'A といふ同質的連続性をもった成長・変化が、説明文で触れた如くに考へられ、その事から、上の方式は、自然の連りとして把へられる。

その方式の実例として、“文学青年”の場合が考へられる。文学青年の一般的な型として次の2つが考へられる。① A'B の CA' ポーズによるもの、②生地 CA' Poesie に頼るもの、が夫れである。その際、反俗グループに属した文学青年の場合は、考慮の外におく。又、副次的 Ethos によって反俗を単なるポーズとする例も除外する。

文学青年が文学青年で終るのは、①の場合では CA' ポーズの A'B 的生地への還元、②の場合では K 外の CA タイプへの成長・変化に基因する。例へば菊池寛の場合は、後者の実例である。前者は、高校・大学の文芸部で活動する文学青年に多いタイプである。この種の A'B 的文学青年は、他のタイプの文学青年よりも、その AB 的 B の配慮によって、うまく立ちまはる術を知ってゐる文学青年であるが、社会に出てしばらくすると“おこり”が落ちたやうに実生活的 A'B の本性に還へるのが普通である。

ところが更に、A'B の CA' ポーズで押し通す文学者もないわけではない。彼は多くの場合、大衆小説作家となるか、ラジオドラマやシナリオの作家になるか、である。その A'B 的大衆作家は、その A'B 的ミーハー調を介して、先述の場合と同様に商業主義に乗じて大衆への媚

態を売り物にするか、さもなくば、自らの権力意志を勸善懲惡主義、乃至は、政策主義にすりかへて広義のプロパガンダ文学に走るか、である。AB 的 A 要素の極めて強い作家として、石川達三を挙げる事が出来る。

CA' 文学青年のもう一つの型として、CA'→CA なる成長を $\overset{\circ}{K}$ 内部〔上の例は $\overset{\circ}{K}$ 外的 CA への成長〕で経験する事によって、CA' Poesie+CA Kunst を新しい仕事の間として、文学の仕事を続けて行く場合が考へられる。初めに掲げた事の例となるのが、この種のタイプの文学者である。文学内部での CA'→CA といふ成長・変化の極めて極端な例として、シュトルムや梶井基次郎の場合を考へる事が出来る。彼等はその文学を、前者はほぼ純粋な CA' Poesie、後者は病的 CA' Poesie〔後述 p. 43 参照〕でもって始め、その後期に至るや初期の彼等の持味から遠い〔実際は同質的に連続してゐるが、一見するとさう見える〕CA 的リアリズムを強く打ち出してゐる。

日本の現代作家のうち多くの私小説・風俗小説作家群は、Poesie と Kunst とのいづれかにアクセントをおきつつ、CA' Poesie+CA Kunst を仕事の間としてゐる。ところが、小説の場合には、特に媒材となる“言葉”のもつ社会的機能性のゆゑに、CA' Poesie+CA Kunst の成長的兼ね合ひに関して、問題が多くなる。即ち、他のジャンルでは、CA'→CA の成長が、比較的容易に Poesie+Kunst の組合せを造りやすいが、小説では、CA への成長といふ事に、言葉のもつ社会的にリアリスティックな機能が重なり合つて、題材としてのリアリズムといふ事が、CA' Poesie+CA Kunst の中に介入して来る。そして、小説家としての CA への成長は、同時に、その仕事を、〔CA 的リアリスティックな題材+CA Technik〕といふ組合せの仕事にさせる傾向をもつてゐる〔但し、此処では、言葉のもつ B 要素的批評的性格に関しては、伏せておく。これは後述する反俗 K での問題である〕。従つて、CA' 小説家の小説内部での CA への成長が、特に CA' Poesie の枯渴を招きやすい事が指摘される。その CA' Poesie の枯渴を防ぐための方策として、次の 3 つの道が考へられる。

① CA' Poesie の病的な駆り立て——よく言はれる事だが、私小説作家にとって、幸福は敵である。彼は常に不幸でなければならない。元來 CA' Poesie そのものが心理的にいつて負符号の形でその Poesie 性を強く現はすものである〔この病的 CA' Poesie は CB' 的なものと区別されねばならない。p. 43 参照〕。

従つて、年齢の変化と共に小説が売れ、生活が安泰になる事は、なほ一層の CA' Poesie の枯渴を招来しやすい。そこで私小説作家は、この危険を防ぐために、不健康・頹廢・不幸 etc といった負符号の生活価値を自ら望んで引き寄せ、その中に無理にでも飛びこまねばならない事になる。私小説作家は、年齢の増大と仕事の成功の過程の中で、意識的無意識的にその必要を感じてゐるに違ひないのである。上林暁・川崎長太郎・尾崎一雄等がその例である。

② CA 的にリアリスティックな題材そのものに Poesie を見出す事——私小説から風俗小説へと移つて行つた作家は、極めてリアリスティックな題材を選びつつ、而も、その題材そのものに附着した CA' Poesie を見出す。その際、CA' Poesie は、作者から題材の側に場所を移し

てゐる事が注目される。井上友一郎・藤原審爾等がその例である。

③ CA 的 Virtuosity——名人芸とは音楽上の言葉であるが、小説の世界でも CA' Poesie を殆ど CA Technik そのものによってカヴァーする事が考へられる。アルチザンとアルチストに関する議論の一つの場所は、此処に見られる。舟橋聖一がその例である。

○C'A 作家——以上の CA'→CA がそれ等の作家群の仕事の場であるが、特にある場合、例へば志賀直哉は、C'A 乃至 C'A への近接に至った作家と見られてゐる。彼が“小説の神様”といはれるのは、恐らくは、CA 的 Technik の巧みさをのみ指すのではあるまい。寧ろ、それが C'A 的気韻・香気を帯びるに到つてゐると認められる所から来た言葉である。なほ、志賀直哉に小説の範例を求める作家群は、又同時に、スタンダードに私淑する事が多いやうである。そして、それ等の作家群の殆どが CA'-CA 的作家群である事が、同時に注目される。

ところが、その志賀直哉に対して烈しく反撥する作家もある。例へば太宰治 [C'B] がその例である〔ついでに挙げるなら坂口安吾は CB' と見られる〕。その反撥は、恐らくは、志賀文学の B 欠除性〔例へば小説に対して A'B 的限界を超えて、いかに生きるべきかといった問題を要求するのは、この B 要素である。CA 文学の特徴の一つは、B 欠除的“人生的無問題性”である。その事は、CA' 堀辰雄から C'A 森鷗外に至る CA 族文学一般に共通する性格である〕、並びに、その帰結としての“世俗性”への反撥である。

しかし一方、太宰治は、C'A 作家に対しては相補性的承認を示す筈である。事実彼は、井伏鱒二 [C'A] 氏に対しては、終始変る所なく師事し続けてゐる。従つて、彼の志賀文学への反撥は、彼が其処に C'A 的性格を認める事が出来なかったからだといへる。そしてその際、C'A への近接といふ事は、それ丈け余計に非 C'A 的性格を強く彼に感じさせたに違ひないのである。CA リアリズムを通しての C'A への成熟といふ事は、恐らく、予め已に CA' Poesie を自らの内部に遠い血脈として稀薄化した形で内含してゐる C'A 高僧・学者の系たる C'A K 家にして初めて本来的に可能といへる。C'A の相補性である C'B が、その A 欠除性を介して Leben-Sein への郷愁乃至帰郷を基本的 Ethos とするのに対して、C'A は稀薄化された A 的 Leben を内含する故に世界をピタゴラス的秩序への形式付けにおいて所有する。従つて、C'A 的 Ethos は、そのまま自然に幾何学的形式感を通してピタゴラス的學問に連つてゐる。従つて、C'A K 家の中には、常に学者が同居してゐるといへる。或ひは逆に C'A 学者は、そのまま自然にギリシヤ的古典的 K 家たりうるともいへる。例へば、森鷗外の歴史小説に學問と文学との C'A 的結合を見る事が出来る。〔但し、その際素朴な疑義に対して付言するならば、鷗外の初期の作品例へば“舞姫”に描かれてゐる主人公の言動を A'B と判定し、それを直ちに作者の性格と見做す速断は避けられねばならない。一定の描写対象をいかなる角度から、又、いかなる態度で取扱つてゐるかといふその取扱ひ方の wie, 即ち、作品を一貫して脈打つ Innere Form に、作者の個性は読み取られるべきである。例へばその小説が、短篇か長篇か、又、一人称か、物語形式か、又その文章が文章心理学でいふ簡略体か冗長体か、といった事柄は、作品の外的な外面形式に属した事である。それに対して、その作品の内容・形式を貫いて流れる生のリズムを Innere Form といふのである。作品を介しての作者の個性並びにそ

のK的世界は、当然その Innere Form を通して受取らねばならない]。

又、元来 C'A 学者であって、時として文学にたづさはる場合に CA' 文学者めく型の人もある。寺田寅彦・木下杢太郎 etc が、その例である。C'A K家の例としては、絵画では安井曾太郎〔梅原龍三郎は C'B〕、彫刻では高村光太郎〔智恵子夫人 CB'、武者小路 C'B、高村光太郎の智恵子抄は、CB'-AB' の相補性的連りから生れたものではなく、CB'→C'A なる郷愁的敬愛に対する C'A からの応答歌である。彼の C'A 性格は、K論にみられるピタゴラス的世界像、C'A バッハへの同質的親近感、少数の彫刻品、多数の詩の Innere Form から読取る事が出来る。なほ、付言すれば相補性的牽引の働くのは、友人・恋人 etc として身近に接触可能な範囲であって、著書、作品を介した間接的な連りの場合には、寧ろ、同質的親近感が働く事が多いといへる。ただ敬愛関係は、その両方を通じて働くものと見る事が出来る]。

外国では、レオナルドとバッハとが C'A の典型である。バッハに見られる多声音楽的カソリック的秩序感〔彼自身はプロテスタントの家系に属してゐたが〕とレオナルドの自然観に見られるコスミッシュな秩序感とが、夫れである。宗教的な秩序感と自然科学的秩序感とは、その内容においては天と地程のへだたりがあるが、夫れ夫れの世界素材を formen する仕方には、共通する C'A 的ピタゴラス的秩序感が見られる。

そして例へば、バッハの舞踊組曲のあるもの——例へばG線上のアリアと称されてゐるもの——、又、レオナルドのデッサンの装飾模様や幼児の巻髪等に二重映しのやうに投影されてゐる CA' Poesie が、注目される。

フロイドは、そのレオナルドを例にしてリビドの昇華に就いて語つてゐるが、それは、レオナルドの C'A 性格のゆゑに当てはまる事である。即ち、C'A が動物精氣的 Energie たる A 的リビドの点で CA''' の反対の極に立つ事、又、その際 conflict の一方の当事者たる B 要素を欠除してゐる事が、リビドの昇華を容易にしてゐるのである。C'A が生得的解脱者として祖師型高僧・学者・K家たりうるのは、恐らくは、彼に生れながらに A 要素が稀薄である事が大きな原因である。但し、A 的 Energie が、量的に大か小かといふ事は、稀薄といふ事とは無関係である。稀薄とは、質的な意味での稀薄である。従つて、C'A タイプには、当然量的な意味で energisch な人はありうる。例へばレオナルドにせよバッハにせよ、量的には極めて energisch な人達である。又、彼等がおのづからなる君子人たりうるのも、彼等の内含する稀薄化された A 要素のせいである。その稀薄化された A 要素が、彼等を学問的宗教的 K 的な高次の精神的なナルチシズム的な生の円環へと自然に導くのである。

現代の外国の例としては、ヴァレリー〔短いエッセイで C'B リルケをミュンヘンの館に訪ねた時の事を書いてゐる。そして其処で両者の文学的 Ethos の相異に就いても述べてゐる〕、アラン、カロッサ、シュヴァイツァーが C'A である。

上の事からも明かであるが、先述のやうに此等 C'A に共通するのは、ピタゴラス的幾何学的秩序感である。それは、CA 的実証的経験科学的な夫れと比して、より高次のコスミッシュな哲学的な比例均衡的〔ピタゴラスにおける天体のハルモニア〕な秩序感である。

註]

○フロイドのいふリビド対超自我の Conflict は、恐らく厳密には、AB族において該当する事であり、又、リビドの昇華といふ事は、CA族〔特にC'A〕に当てはまる事といへる。CB族にはその両方は当てはまらない。

○ニイチエのアポロ的対ディオニソス的は、C'A対C'Bの相補性に対して当てはまるが、その場合、C'Aは稀薄化されたA要素を内含する故に生の形式を求め、C'BはA要素を欠除する故に生の内容を求めるのである。そしてそのC'Aの求める形式は、その内容となるA要素が稀薄化されてゐるが故にピタゴラス的形式となるのである。

○純粹 CA' 牧歌K

当然 CA Technik を内含するが、にも拘らず特に CA' Poesie をその主要な特徴とするもの。以下特に現代 or 現代に近い例をあげると――

絵画――ルソー、ローランサン、シャガール、フジタ、ユトリロ

音楽――メンデルスゾーン、ショパン、ラロー、チャイコフスキ

詩――メーリケ、アイヘンドルフ、ホフマンスタール、立原道造、大手拓次

小説――ビーダーマイヤー派〔ケラー、シュトルム〕、堀辰雄

童話――アンデルセン

この一群の特徴は、人生的無問題性的情緒性・白痴的無邪気さ・牧歌的甘美哀傷性・ひよはで舌足らずの甘美さにある。

そのひよはさは、B要素の欠除・B的意識の度合の低さ・無精神性に由来してゐる。例へばある種の人間は、どれ程体格ががっしりしてゐても、B要素が欠除してゐる時、彼には無精神性としての一種のひよはさがつきまとひ、舌足らずといった趣が纏綿する。後述のやうに、B欠除といふ事は、体形としては肥満型に連つてゐる。従つて、その肥満型の体形には、特に上述のひよはさが目立つといへる〔アンコ型の力士、山下清画伯〕。

このひよはさといふ事は、又、吾々に郷愁を起させる牧歌的甘美といふ事にも連つてゐる。美の様態としては、B性を欠除した美は Reiz 甘美である。崇高→美→優美→甘美といふ矢印の方向は、美におけるB性の過剰からB性の欠除へと向ふ方向と軌を一にしてゐる。即ち、B要素的意味での geistig な性格を、美の様態において CA''' の方向に消去してゆく途上に、この CA' Reiz は位置してゐる。

又、一見 CA' 甘美と相反的に見えるパセティックな情念〔例へばチャイコフスキー No. 6〕も、決して CA' 甘美と矛盾するものではない。それは決して AB' 的に geistig な又 elegisch な情念と同質ではない。従つて、それは更には、決して CB' 的 Pathos と混同されてはならない〔CA' 対 CB' の似而非の関係、特に病的 CA' の場合は後述〕。それはあく迄、seelisch-triebartig な領域内での無 Geist 的な情念である。例へば堀辰雄の小説によくこのパセティックといふ言葉が出て来るが、それも上述の意味でのパセティックである。AB' パセティックと CA' パセティックとの区別は、ある意味でKの基本類型に関する、無視すべからざる区別である〔この区別の混同の張本人は特にインテリ CA' である〕。シラーに言はせると、その際、AB' 的なものは

本来的 Pathos であり、CA' 的なものは単に Seele に根ざした Leidenschaft に過ぎない。彼は CA' 的嘆きに就いて次のやうに言ふ、“その苦痛の中には余りに力が乏しく精神と気品とが乏しい。その嘆きを発したのは、Begeisterung〔感激〕ではなくて Begehrung〔欲求〕である”〔素朴文学と情感文学・邦訳 71 頁〕。キェルケゴール風に言へば、CA' 的 Geist は“精神”ではなく“才気”を意味するに過ぎない。以上の区別が、説明文の表での AB' 情感性と CA' 哀傷性の区別に連る区別であり、かつは又やがて AB' 情感 K と CA' 牧歌 K との区別にも連る区別である。

付]

○A'B 的ミーハー的甘美——A'B は当然 CA' 甘美の愛好者であり、彼が K 的なものにかかはる場合には必ず KCA' ポーズをとる。そしてその A'B が KCA' ポーズを通して CA' 甘美をねらふと、其処に現はれるのが、A'B 的大衆的ミーハー的甘美である。

その A'B 的甘美と CA' 的甘美との区別も、上述の区別と同様に無視する事の出来ない区別であらう。上述の CA' K 家群は、時として A'B 大衆作家と殆ど境を接しつつ而も危い所で質的にそれと相異してゐる。例へばフジタツグジ・ローランサンの絵の俗受けする性格を考へる場合に、その質的差異を無視する事は出来ない。

日本語でセンチといふ語が使はれる場合に、それは多くの場合、A'B 的ミーハー的甘美哀傷と CA' 的な夫れとが混同された上で、さう言はれる事が多いと言へる。

従つて結局、センチといふ言葉の元に、正確には、A'B 的ミーハー的センチと CA' 的センチと AB' 的情感性との 3 種類が区別されるべきある。

○文学における CA' 的内在律——CA' 的無 B 性は、多くのメルヘン詩人・童話作家・等の CA' 文学者に共通する、けだるく・かんまんな・ものうげなリズムを備へた文体として現はれてゐる。

題材や外的形式の如何に不拘、彼等の作品に共通するのが、そのけだるく・かんまんな CA' 的リズムである。堀辰雄や立原道造の文章のリズムが、その好例である。

其処には吾々が幼い頃眠りに沈みながら聞かされた、“昔々”といふあのおぼろで間遠なお話の調子が、顔をのぞかせてゐる。

元来抒情詩の母胎として民謡が考へられてゐるやうに、CA' 文学の母胎としてお話や子守唄が考へられるのかも知れない。

従つて、若し CA' K が一切の K の Ur-Poesie の意味をもつものとすれば、民謡、民話、伝説、神話は、その CA' K そのものの母胎として、そしてその故にそれらは K の Poesie のその又 Poesie であると言へよう〔Schelling 芸術哲学参照〕。

以上の如き CA' 文学の CA' 的内在律は、B 要素を備へた読者を、ある時は回顧的帰郷的な夢心地へと誘ひこむ作用をもつが、又ある時は逆にひとをイライラさせ落付を失はせる作用をする事がある。

例へば堀辰雄の小説によく、“うつけた”という副詞 or 形容詞が出て来るが、その言葉はそのまま彼の小説の内在律を示す言葉と言へる。ひとは時としてうつけた放心へと誘ひこまれる事を悦びそして又同時にそのうつけた放心に対してイライラさせられるのである。

以上の如き CA' 的にかんまんではだるいリズムを備へた文体は、外的文体としては、CA'→CA→C'A なる連続的变化と共に、次第に簡潔な引きしまった文体へと変化する。鷗外の歴史小説の文体、又文章心理学で簡略〔簡潔〕体の標本と見做される志賀直哉の文体が夫れである。それらは一見すると CA' 的にかんまんなそしてけだるいリズムに対して相反的に異質な文体と見える。しかしそれは CA'→CA→C'A なる同質的連続性の上に立つた外的形式上の変化であつて、CA or C'A 文体もその内在律の点では、B 欠除性の特徴を CA' 文体と共に共有してゐると言へる。そしてその B 欠除的内在律は、CA 文学一般の内容的な B 欠除性〔人生的無問題性〕に連るのである。

○CA 族的文体——外的形式の点では、CA 的文体なるものは、C'A の簡略体から CA' 的緩慢体を経て、CA''' 的爆発的文体に連ってゐる。

CA''' 的爆発体は、外的形式上ある点で C'A 的簡潔体に近いと言へるかも知れないが、しかしその CA''' 的爆発体は、CA''' の衝動的で energisch な爆発的性格に基づくものであって、当然 C'A 的秩序感に根ざした簡潔さとは異ってゐる。

簡潔体といへば、AB'-CB' 文体、更には現代的〔A欠除の自意識を備へた〕CB 文体も亦、当然息の短い一種の簡潔体と言へよう。その点でも CA''' の爆発的文体は、B過剰に由来する CB' の文体と似而非の関係を示してゐると言へる。

CA''' 的文体に就いて、“鴨東綺譚”〔谷崎潤一郎〕の中で次のやうな会話がある。“「まるで精液を放射するやうに詩を作る人だね、この人は」。「やはり一種の才能ね」。「才能といふより、もっと体質的なあの方のエネルギーと同じ性質のものじゃないか」”。

ところで、CB' 文体は自己をセーブする時、C'A への郷愁の敬愛によって C'A 的秩序整然さを備へた沈静した文体となって現はれる事がある。芥川龍之介の文体がその例といへる。但し、その際でも何処かに文体上の破調が、CB' 的なものとして顔を出す筈である。

又上にその文を引用した谷崎潤一郎〔A欠除に関する自意識の稀薄な現代 CB といふ極めて奇異な例〕に関係のある CB 文体に就いては、古典 CB 文体と現代 CB 文体とが、夫々のテンポなりリズムなりを極端に異にする事が注目される。

谷崎潤一郎の文体は、現代 CB でありながらその現代 CB には奇異な古典 CB の文体である〔その奇異さが、彼の小説の内容にどう現はれるかは後述〕。

○CA'K 家と病氣——CA'K 家に特有のけだるさ・ひよわさ・ものうさは、不思議に病氣殊に結核患者の微熱性のけだるさを連想させる。病氣と人間の尊嚴の關係に就いて、マンは次のやうに言ふ〔GuT. 邦訳 38 頁〕。“病氣は二重の面、人間的なものとその尊嚴とに對して二重の關係をもつてゐる。病氣は肉体的なものを強調し、又人間を自らの肉体に立戻らせ、又其処に投げかへす事によって、反人間的な作用を及ぼし人間を単なる肉体に貶下するのであるから一面において人間的尊嚴の敵である。しかしながら他面、病氣を何か高度に人間に相應しいものと考へる事も可能だ。病氣は精神である。いや〔非常に偏頗に響くだらうが〕精神は病氣であると言へば言ひすぎになるかも知れないけれども、とにかくこれらの概念には何か極めて深い連絡がある。精神とは即ち誇りであり、自然に対する解放者の反抗〔この言葉は純論理的に又懷疑的な意味に用ひられてゐる〕であり、自然からの遊離であり離脱であり背馳である。人間、即ち自然から高度に遊離して極端に自然と對立し合つてゐると自ら感じるところの存在者を、他のあらゆる有機的存在から引離すものが精神なのである……”。そのマンの言葉から考へられる事は、病氣ことに結核と關係の深いのは、B要素の過多と欠除とであるといふ事である。

先づB過多の AB' は、元來が病氣の存在と言へる。そして其処では、マンの言ふ“病氣は精神である”が通用し、病氣は人間の精神化・靈化として働き、そして病氣が深まると、AB' は靈化の度を深める事によって CB' 化すると考へる事が出来よう。

それに対して、CA 族では、病氣は人間の肉体化として働くと言へる。そして CA' は、病氣によってB要素を眠らされ肉体化された A'B であると言へる。後記の如く、CA' が一般的にいつて肥満型であるのは、CA' における病氣の肉体化の象徴と考へられ、AB' が細長型であるのは、AB' における病氣の精神化の象徴と考へる事が出来る。

CA' 文体と結核との照応は、CA' タイプの詩人・画家・音楽家と結核との事実上の關係をも、当然示してゐよう。従つて、結核の CA' 詩人がゐるとすれば、これこそ正しく CA' 詩人の典型と言へよう。CA' 詩人の代名詞として、“星莖派詩人”よりも“微熱派詩人”の方がより相應しいゆゑである。

○B要素と人間の体型との關係——B要素を介して文体上の區別が考へられるやうに、B性の過多・有無は、人間の体型にも關係をもつと考へる事が出来よう。例へば、B欠除〔CA 族〕の肥満型、B過剰〔AB'-CB'〕の細長型、B適度〔CB-A'B〕の筋肉型と考へられる。

但し、以上の事は当然一般論としてであるし、恐らくは又男女共に自らの Ethos の定まる一定の年齢を越えてからの事である。結核との関係では、恐らく肥満型と細長型の結核がありえよう。ところが病気が深刻化する事によって、CA' 化それ自体が畸形的に深刻化する場合 [CA', CA'', CA''' が夫々に畸形化するのであって、CA'→CA''→CA''' の意味での深化ではない] には、その畸形化した病的 CA' 群は、病気の深刻化によって CB' 化した AB' [乃至は生地 of CB'] と並んで、ロマン主義を形造る事が考へられる [此処でも病的 CA' 対 CB' の似而非の関係が区別されねばならない]。

A'B→CA'→病的 CA' [ノヴァーリス]

→AB'→CB' [ヘルダーリン]

ゲーテがエッケルマンに語った言葉は、以上の事と照応してゐる。

“私は古典的なものを健康なものとし、浪漫的なものを病的なものとする。かういふ性質から古典的なものと浪漫的なものを区別すれば、吾々はそのうちにすっかり合点がゆくであろう”。

○世界観とタイプ——古典的と浪漫的の類型に関しては、前者は C'A, C'B [但し A 欠除の自意識を欠いた]、後者は病的 CA', CB' を含み、AB' は両者の中間的位置を占めるものと考えられる事が出来る。又現実主義対理想主義に関しては、前者は A'B, CA'・古典 C'B, 後者は AB'・CB', そして C'A はその中間的位置を占める。Nietzsche のアポロ的対ディオニソス的に関しては、C'A 対 C'B。なほデイルタイ、ノール、ヤスパース等における世界観の類型並びにその心理学に関しては、此処では保留しておく。

○文学研究家 CA'

趣味的情緒的学的態度による文学研究家 CA' [乃至は美学や美術史の研究家 etc] は、CA' K 家の一つの系と考へられる事が出来る。学問といふものが、ある程度の知的能力と一見しての非乃至反 CA' 性格を示すので、時として CA' 的学的態度は隠されてゐる。しかしある場合に、文学研究家が詩人小説家志望のなれの果てと冗談まじりに言はれるのは、先述した文学青年の在り方にある程度の語学力と知的能力がプラスされた場合に、文学研究家 CA' が生れる事を指すものと言へよう。

高度の趣味性と知的能力との合成による文学研究家 CA' の例として [同時に CA' 文学者・評論家をも兼ねてゐるが]、竹山道雄先生の場合を挙げる事が出来る。先生の知的作業としてのエッセイは、その内容からすれば、ある時はナチスの分析を介しての社会批評ある時は古美術を通しての文明批評であり、その分析の精緻さ・深さ又高度の良心性によって、吾々を魅了するものである。ところが、先生の文学作品は勿論の事として、それ等の知的論文さへもを貫いて流れてゐるのは、まぎれもなく上述して来た CA' リズムである。先生の名前をポピュラーにした“ビルマの堅琴”が、ある意味で童話風の作品であった事は、極めて暗示的である。その CA' 的リズムは、一見極めて離れた所に位置するやうに見える堀辰雄の夫れに酷似してゐる。竹山先生は特に戦後、フアッシュ批判のエッセイや小説によってその鋭い分析振りで人々を驚かし、ある時は反フアッシュ的な時代の良心とさへ目されてゐる。それはいかにも非乃至反 CA' 的な Ethos を示すものの如くである。しかし先生の場合、その鋭い分析は、決して時としてさう目されてゐるやうなシニクなメフィスト的懷疑に由来するのでは勿論ないし、又更には理想主義的にヒューマニスティックな Pathos に基づくでもないやうに思はれる。それは寧ろ、無垢であどけない時としては幼児めく知的貪婪さに、極めて高度の知性が結付いて生れたものと言へよう。

一方最近のエッセイである“大和紀行”の中の一文中に“天理”と題するエッセイがある。この“天理”の内容は、これ迄の反ファッショ^{ic}的な良心といふ定説に対してかなりのくひ違ひを読者に感じさせるものである。其処には危くファッショ^{ic}的なものの讃美に連るものが語られてゐる。それは時代の良心を求めて竹山先生のものを読む読者に途惑ひを感じさせるものと言はねばならない。その結果今度は極端な例として、これ迄の定説の逆を行く“あの先生はファッショ^{ic}だ”といふ一見極めて奇異な意見さへ聞かれる程である。その意見はさておくとして、先生の従来の反ファッショ^{ic}的なファッショ^{ic}批判のエッセイと“天理”に関するエッセイとのくひ違ひの源には、一貫した“ファッショ^{ic}への呼びかけ”が、ある時は隠微な形でそしてある時は露呈された形で続いてゐるのではないかと思はれる。即ち、従来の反ファッショ^{ic}的なファッショ^{ic}批判のエッセイは、実は反ファッショ^{ic}を目指してゐるのではなくて、本来は批判のための分析といふ事に藉口したファッショ^{ic}への隠された共感的呼びかけから生れたものと思はれるのである。そのファッショ^{ic}分析の異様な迄の迫真性の出処は、批判に事よせた“ファッショ^{ic}への隠された共感的呼びかけ”に基くものと考へるより外に考へられないと言へよう。

恐らくは竹山先生の場合、置かれてゐる指導的地位と知能の高さとが、当然反ファッショ^{ic}的な批判へとおもむかせるのだが、其処にあるのは実是否認的批判ではなく、批判に事よせた共感的分析に違ひないのである。その隠された共感的呼びかけを前提する事なしには、その際の分析の異様な迄の精緻さ・迫真性は、とうてい生れえないものと言へよう。その隠された共感的呼びかけは、当然以前の論文では相反的な題目の陰に隠されてをり、天理に関するエッセイでは、表面に特殊な形をとって現はれたと見るべきであらう。

元来 CA' 的 Leben の Boden となるのは、種〔族〕的生である。CA' 的 Leben は当然種的生に連るが故に、恐らくはこのタイプに属した人達は、全体主義的 Form を目的とする Materie 的 Leben に担はれた人達である。その material な種的生は、当然自らを formen する A'B-A''B-A'''B 的 Form を相補性的に要求するであらう。その Form は、時として国家主義的ファッショ^{ic}となり又ある時は Kommunismus 的全体主義とならう。その際国家主義は当然の事として、恐らくは Kommunismus さへもが、種的生を原素材として必要とするのではないだらうか。国家を否認する事と種的生をその素材として必要とする事との2つの事柄から、Kommunismus における複雑な対国家関係が派生すると言へる。Kommunismus が觀念に終始せず現実的な力を備へた働きをもつものとなるには、それが種的生を自らの Materie としてそれと結付いた場合に限られてゐると言へよう。従つて大ざっぱな言ひ方をするならば、国内的な労働者の疎外化といふ問題だけでは Kommunismus は現実の力を備へたものとなりえず、帝国主義の問題が事実上の第一義的意味をもつ場合〔例へば東南アジア等の後進国〕に初めて、それは現実化すると言へよう。

しかし竹山先生がある場合にファッショ^{ic}と呼ばれるのは正確とは言へない。正確には、竹山先生自身がファッショ^{ic}なのではなく、“ファッショ^{ic}的なものへの共感的呼びかけ”を隠された Ethos とする CA' 的文学者・外国文学研究家・評論家と言ふ事にならう。

桑原武夫氏の文学入門は、CA''-CA''' 的動物精氣的 Energie と A'B 的 Norm 意識との相補性的結合から文学を把へてゐる。其処では新しい時代を展く新しい Leben の Energie が文学の母胎であつて、旧い時代・社会の Sitte・Norm を破壊する新しい担手に担はれた Leben は、やがて新しい社会と時代の新しい Norm を生み出す健康な生の息ぶきと考へられ、その Leben の表現に文学の意味が見られてゐる。

A'B 的文学研究家は、訓古学・文献学的啓蒙的実証的方法をとるか、CA' ポーズによる趣味的立場をとるか、さもなくば A'B 的^〇べしをヒューマニズムとすりかへた上で、その思想内容を扱ふかであらう [A'B 的べしと AB' 的べしに就いては後述 p. 55 参照]。CA' 的情緒的——CA の実証的——A'B 的啓蒙的といふ学的態度は、国文学・外国文学研究に際しても当然他の研究部門と等しく考へられる事である。

例へば独乙文学で R. M. Rilke は恐らく現代 C'B 詩人と考へて間違ひはないと思ふ。ところが、日本の独乙文学者を介して普及したのは、そのリルケの CA' 的解釈である。例へば堀辰雄のリルケはいかに深刻めいてゐるにしても所詮は病的 CA' リルケであらうが、大山定一氏のリルケにも、やはり CA' 的情緒化が加へられてゐるやうに思はれる。

付]

○一見ありとあらゆる Sitte, Norm の束縛を破壊し去らうとする“太陽族”的 Energie も、CB' 的なものではなくて、恐らくは CA''' 的なものと考へられよう。その爆発的破壊的 Energie を規整しうるのは、鉄の規律を備へた A'''B 的ファッショ的 Form 丈であり、又その CA''' 的 Energie は無意識にその A'''B 的 Form との結合を求めあぐんで、渾沌としたあてどのない爆発を続けてゐるのではないかと思はれる。

○マンの“GuT”の“自然と国家”では、CA' 的自然と C'B 的自然の区別に関して曖昧である。その点ではそれはシラーの“NuS”と軌を一にしてゐる。

又最近の伊藤整氏の“文学〔K〕と社会”に関するいくつかのエッセイでも、K を純粹 Leben の表現と見做してゐるが、其処でも CA' 的 Leben と C'B 的 Sein の区別が曖昧である。そしてその事が CA''' 的破壊的反 Sitte と CB 族的 A 欠除的非 or 反 Sitte との夫々の対社会的性格の区別の曖昧さに連り、其処から結極“K と社会”の関係それ自身の曖昧さが生じてゐると思はれる。

○インテリ型——インテリ型 A'B, インテリ型 CA'[CA] の特徴は、彼等の自覚面での AB' 的性格と無自覚的本性的 A'B—CA'[CA] 性の二重性にある。

例へばインテリ CA' は、その自覚面では AB' に準じて反応を示すので A'B に対して相反的に見える。而もその生地においては相補性的である。其処からインテリ CA' の言動の矛盾的二重性が出て来る。教養人士につきものの“滑稽と悲惨”は、多分に夫々のインテリ型の二重性に根ざしてゐる事が多い。

しかしこの部分は説明文での説明にゆづつて省略する。インテリ型 A'B に就いては、後述 AB' の項で多少ふれる。又特にインテリ型 CA' の文学といふものもありうると思はれるが、それも此処では省略する。

○CA'' 道化師と C'B 道化師

芸能人 CA'' 群に属した CA'' 道化師と C'B 道化師とを対比的に把へる事によって、夫々の特徴が明かになると同時に、後述 C'B K の特徴を把へるための手がかりを獲得する事が出来る。

CA'' 道化師は生地そのままの、吾々が殆ど通念として持つてゐる喜劇役者の事であり、C'B 道化師はチャップリンにその典型を見る事の出来る数の上では極く少数の道化師である。その他トーマス・マンの小説の主題の一つである道化師〔詐偽師クルル〕が、このタイプである。但しマンの初期の短篇では、彼自身の C'B 的 A 欠除的脱世界的性格を象徴するために、CA'' 道化師を主人公にしてゐる。又太宰治の小説の主題の一つである“お道化”も、C'B 作者による C'B 的お道化である。

C'B 道化師は、B 要素〔この際にはポーズ・扮装意識〕を備へ、而もポーズ〔扮装〕を取るための踏板となる A 要素の欠除した道化師である。その事から、C'B 道化師の特性は、④ A 欠除、⑤ B 要素、⑥ A→C に縛られない、といふ 3 点に集約する事が出来る。そしてその特徴は、後述 C'B K 一般に通じるものである。又 CA'' 道化師の特徴は、C'B 道化師の特徴に対して対比的に把へる事が出来る。

C'B 道化師の特徴——

④ A 欠除——〔この項目は人文6号の“芸術作品における世界”又、美学 38. 1959. 描写的 Schöpfen”参照〕——脱世界的〔負符号的〕情念〔内世界的負符号的情念との区別は上巻の論文参照〕たる Schuld・Schwermut・Schmerz〔リルケ・トラークル〕を“認識根拠”とする脱世界的性格が A 欠除といふ事である。それは時として、世界からの顔落=Eksistenz〔Heidegger〕der Ausnahme〔Jaspers〕, der Fremde〔simmel〕, der Abgeschiedene〔Abschied〕〔トラークル・リルケ〕etc と呼ばれる存在論的性格である。

A 欠除といふ事は、A'B 的意味での cultural goal, institutionalized means〔R. Merton〕に関して負符号的 deviance を示す事である。その A 欠除的 deviance は、消極的には①アモラルな浮浪者気質、②反生活的賭博者気質、積極的には①純粹 Sein, ②反 Sitte 的 moral を支柱にする事、を意味する。多くの場合、①と①、②と②とが結付いて現はれる〔後者同志の結付きの例としてドストエフスキイ CB〕。R. Merton は anomie の一つとして Retreatism と Rebellion を指摘してゐる〔Ⅱ章参照〕が、夫々 C'B と CB' に該当してゐる。その際 Merton は、Retreatism の例としてチャップリンの映画に出て来る浮浪者を挙げてゐるが、チャップリンでは彼の A 欠除的性格が、好んで彼の扮する浮浪者・ルンペン・放浪者によって象徴されてゐる。その浮浪者はよく資本主義制度の欠陥として生れたものだと言はれるが、恐らくは社会主義の制度のもとでも人間の A 欠除といふ事は、ある種のタイプの人間において同様な形 or 別種の形で現はれるのではないかと思はれる。例へばソ連や中共に乞食や売春婦がゐる事は、その地での社会主義体制の未成熟といふ事で弁明がなされるかも知れないが、deviance といふ事を、社会制度の欠陥又個人的に Negative な生理的人格の欠陥と見る見方の外に、個人の positive な Ethos に根ざすものと見る見方も可能であらう。

⑤ B 要素——C'B 道化師は B 要素による演技家である。即ち、彼は意図的意識的な道化師である。

⑥——彼は A→C といふ定められたルートに縛られてゐないので、他の全てのタイプへの坐標

軸の転換の意識的自在さを備へ、兼ねて他のタイプへの感情移入の能力をも合せもってゐる。従つて彼の扮装能力は、表における①②③組の全てに向ふ事が可能である。そして以上3つの特徴が集約されるときに、C'B 道化師の詐欺師型といふ形容詞になるのである。

CA'' 道化師の特徴——

④彼は世俗グループの一員である。而も A'B から相補性的に愛される CA' 芸能人の一員である。

⑤彼にはB要素が欠除してゐる。これは、彼が意識的道化師ではなく、生地のままの道化師である事を物語つてゐる。

⑥扮装の及ぶ範囲は、定理1によつて A'B の世界での様々な役柄に向ふ。消極的に言へば、彼には C'B に可能な反俗グループ群への扮装の能力は欠けてゐる。

○CA'' 道化師と怒りの情念——道化師の哀しみといふものがある。観衆は CA'' 道化師を飼犬を可愛がるやうな惨酷な仕方であつて、CA'' 道化師は、世間の優越感に奉仕する限りにおいて人気を保つ事が出来る。CA'' 道化師は時として、世間の陰でしかない、軽んじられ笑はれる事にしか存在理由のない自分に対して、限りない憤懣、悲しみを抱く事がある。しかし、若し CA'' 道化師が観客の前で泣いた所で、観客は愈々可笑味を感じて笑ひこけるであらう。その事は恐らく、彼の惨めさを2倍に深めそして同時にその2倍に深められた哀しみは、そのまま2倍に強められた観客の笑ひをそそるであらう。

ところが CA'' 道化師を道化師として失敗させる情念がある。それは、“怒り”の情念である。観客に対する怒りは論外としても、怒りの演技それ自体が、CA'' 道化師の演技を失敗に導く可能性が多い。何故なら、怒りの演技は外の如何なる演技よりも、彼の無意識的な A'B ポーズ〔これは彼の A'B 演技ではない〕を誘ひやすいからである。“芸人は怒ってはならない”といふ言葉がある。それは無論人気商売たる芸人のお得意様への腰の低さを自戒する芸人のモラルであらうが、しかし、その外に怒りが CA'' 型を無意識に A'B ポーズへ誘ひやすい事を、彼等自身が長年月の間に体得して来た事からして、さう言はれるのではないだらうか。怒りの演技さへもが、彼を無意識的な A'B ポーズへと誘ひやすい。従つて彼が怒りの演技を介して、無意識的に A'B ポーズを示す時、彼はその A'B ポーズによつて最早や愛すべき CA'' 道化師ではなくなる。観客は、わざわざ舞台やスクリーンの上に自分達と変らぬ・くそ面白くない A'B を見るために劇場に足を運ぶのではない。怒りを演じて而も其処に CA'' 的の生地を二重映しになしうる CA'' 道化師が若しあるとすれば、恐らくそれは CA'' 型のとびきりの名優と言へるであらう。

怒りの情念と C'B 型との関係は、CA'' 型の場合とは正反対の関係である事が指摘出来る。即ち、C'B 型に関して若し怒る事があるとすれば、それは観客の側から C'B 型に対してである。C'B 道化師の滑稽的演技に対しては、時として観客は安心しては笑へないものを感じる。C'B 道化師の演技を見て笑ひながら、観客はフトだまされてゐるのではないかといった危惧の念、又いや笑はれ馬鹿にされてゐるのは自分の方じやなからうか、といった後味の悪さにとら

へられる事がある。少くともある場合には観客は、ある種の疑惑の念をこの C'B 道化師に対して抱くのである。恐らくは、彼の演技の出所の A 欠除性と B 的演技からある種の Anstößigkeit が生じるのである。

付]

○映画“夫婦善哉”で森繁扮するところの勘当された道楽息子が親父の店でがなり立てるシーンがあった。元来この映画では森繁はあく迄 CA' 的な A'B 的 act で終始してゐる。恐らくは彼の扮する道楽息子自体が CA'-CA'' 的であるが、A'B 的なえげつなさを様々に劃策しつつ而も結局は CA'' であるところに主人公の道楽息子の面目がある。従つてそれに扮しての森繁の演技を仮りに CA' 的 A'B 的演技即ち、CA'' の A'B 的演技と名付けて置く。

ところが彼が父親の店先きでどなり立てるシーンでは、彼の A'B 演技は、A'B ポーズ〔これは CA'' にとっての第二次的生地〕にとって代られてゐる。即ち CA'' 的 A'B 的演技が其処では、A'B 的 CA'' といふ無意識的に自然なポーズにとって代られてゐるのである。

換言すれば、それ迄の庶民的な道化性を備へた A'B 的演技の中に、突然くそ面白くもない愛嬌のない世間人 A'B の顔丈けが出現したのである。ある映画批評家が、特にそのシーンの品の悪さを指摘し、その説明として監督が余りに内容につきすぎてゐたからだと付け加へてゐた。しかしそのシーンの品の悪さは、恐らくは怒りといふ情念と CA'' 型との上述の如き関係から生れたものと言へよう。CA'' 型にとって、無意識的 A'B ポーズ〔繰り返すならばそれは最早や演技ではない〕に墮しやうい“怒り”は、いはば弁慶の泣き所とも言ふべき情念である。

○C'B 道化師と郷愁愛——CA'' 道化師の泣き所が怒りの情念であるのに対して、C'B 道化師の泣き所は CA' タイプにある。

例へばチャップリンの映画では、先づ彼自身の扮する浮浪者・ルンペンに対して滑稽化の操作が加へられると共に、登場する人物あるひは状況の一切に彼の綿密に計算された滑稽操作が隅々まで行き渡つてゐる。ところが作中決してその操作の加へられてゐない登場人物がある〔加へられてゐるにしても、せいぜいの所暖いユーモアによって抱きとめられてゐる〕。而もその登場人物は、常に副主人公的に重要なパートを受持つ人物である。それは、ある時には CA' 幼児〔キッド〕又貧しい CA' 娘〔モダンタイムスその他〕である。それ等の CA' に対して彼の滑稽操作が加へられてゐないのは、彼の CA' への郷愁愛〔定理 4 の系〕のためである。作品の効果としては、その郷愁愛が、ヒューマニスティックな人類愛・同胞愛、又ある場合には貧しき者への社会主義的な同胞愛、と誤解されてその誤解の上に立つ讃同となつて効果を上げてゐると言へるかも知れないが、しかしその効果は、彼の滑稽操作の自由をある意味で犠牲にした上での〔といふのは滑稽操作にアクセントを置くならば、当然 CA' 幼児や CA' 娘に対してもその操作が加へられてしかるべきであらう〕効果であるから、あく迄彼の滑稽精神に坐標を取るならば、それは結局一種のマイナスと言へる筈である。

なほ又その郷愁愛を、ヒューマニスティックな人類愛・同胞愛・同志愛と同一視する受取り方は、誤りと言はねばならない。ヒューマニズムに根ざした人間愛は、上向き〔ギリシャ的パイディアに由来する〕のものであれ下向き〔中世的キリスト教的〕のものであれ、ともかく人間・同胞に対する人間としての同一次元での一体感〔パルパロイに対し又神に対して〕を前提としてゐる。しかし郷愁愛は、対象に対する異次元的な距離を前提し、心理的に言へば輕蔑と羨望との入混

じった ironisch な愛である。チャップリンにおける CA' への愛をヒューマニスティックな人間愛と見るか郷愁愛と見るかは、微妙な差異の如くに見えるが、実は彼自身の Wesen に関する重要な問題である。

付]

○トニオ・クレーゲルでの郷愁愛の問題——チャップリンの郷愁愛を、原現象的な形で浮彫りにし、かつは、その郷愁愛を介して文学者「CB 文学者と言ふべきであらうが」の運命を主題にしたのが、トーマス・マンの自伝的中篇小説トニオ・クレーゲルである。上衣の胸に何時も野の花を挿した、長身で冥想的な父親は、実務家でありながら AB' タイプである。南国生れで陽気な、そして後ピアノ教師と出奔してしまった美しくてだらしない母親は CA''—CA''' タイプと言へる。この結婚は相互に不幸な結婚といはねばならない [AB' × A'B—CA']。

小学生の CB トニオは、シラーのドンカルロスよりも競馬の早取写真の方が好きな美少年で優等生の AB ハンス・ハンゼンに近付かうとするが、A'B ハンスは興味も話も常にくひ違ふ面白くないトニオに対してお義理一辺の態度しか見せない。そして切角トニオと一緒にゐても、乗馬友達が現はれるとさっさとトニオを放って行ってしまう。時としてハンスがお義理にやさしくしてくれると、それがミスミスお世辞と分つてゐても、有頂天になる程トニオは喜んでしまふ。後にトニオは、ブロードの CA'' イングに恋をする。詩を作る真面目な AB' 娘が切角彼に好意を寄せてくれてゐるのに、トニオは彼の方に向いて関心など持ちさうにもない冷淡なインゲを忘れる事が出来ない。

舞踏の練習でトニオはインゲと組んだために上気してとちり、インゲは皆と一緒にゲラゲラ笑ふ。休憩の時間になって、しよげかへったトニオは人気のない廊下に出て、ブラインドがおりてゐるのにも気付かず窓の前に立って外を眺める振りをしながら、物思ひに沈んでしまふ。

さっきゲラゲラ笑った薄情だったらしいインゲの事を考へてゐると、何時の間にか身勝手な空想に耽り始める。さっき彼女はゲラゲラ笑ったけれども、殊によると室内に自分のゐない事に気付いて探しに来てくれるかも知れない……「元気を出して。私本当は貴下が好きなのよ」と。しかし勿論インゲは廊下になど現はれるわけはなかった。「そのやうな事は決して此の世に実現しっこないのだ」と作者は、断定を下す。

しかしそれでもトニオの目には、CA'' イングはまるで Leben そのもののやうに魅惑的である。トニオの事に関しては全く無関心そのもので、トニオの失敗を見れば只ゲラゲラ笑ふ事しかないインゲが、彼の目には彼に許されない Leben の等価物である。

後トニオの家は離散して、彼は文学者として独立し成長し、舞台はミュンヘンのアパートの一室に移り、更に其処から北欧に近い故郷の町への帰省の旅に三転する。

故郷の町での彼の少年時代がソナタ形式での提示部に当たるとすれば、ミュンヘンの町での C'A リザベータとの会話の部分は展開部を構成し、故郷の町への帰省「リザベータへの手紙で語られる」は再現部に相当するといへよう。なほ各楽章を通して、同一文章の反覆的繰返へしが点綴される事によって、この小説の抒情詩的效果が倍加されてゐる。

その展開部では、相補的な親しみを感じ合つてゐる女流画家の C'A リザベータ「Kの教化的意義といふ彼女の言葉が、彼女の C'A 性格を暗示してゐる」との会話を中心に、CB 文学者の A 欠除の呪ひと CA' への ironisch な郷愁愛とが語られてゐる。

トニオの友人 CB' アダルベルトは、CA' 的 Leben など完全に無視し去り軽蔑し切つてゐる。例へば彼は春になると、その季節が“いかがはしく血をむづむづさせる”といふ理由で、彼自身の命名による“超絶地帯”たるカフェに飛び込んでしまふ。

彼に言はせると K 家はいささかも感じてならない。感じる事は、彼を K 家から Leben an sich な俗人へと墮落させてしまふのである。

ところがトニオは、CA' 群に具現されてゐる Leben そのものとも言ふべき愚かしく明るくそしてき

ちんとてがたい人達を、さう簡単に軽蔑し切る事が出来ない。

異常なもの、怪奇なものへの偏奇〔CB' アダルベルトの好み〕が、K家をK家たらしめるのではなく、寧ろその CA' の平凡で凡庸な Leben への絶望的な距離を前提した、複雑な、羨望と軽蔑の入混じった ironisch な郷愁愛こそ、文学者を文学者たらしめるのではないか、と彼は考へるのである。

C'B トニオは自らにA欠除の呪ひ〔脱世界的 Abgeschiedenheit、マンはその事を Geist と言ふが、それはB要素としての Geist ではない。後述 C'B 文学のⅡ参照〕を感じてゐるが故に、若し Leben と取り換へがきくものなら、その呪ひの上に立つ文学など捨ててしまつてよいと思ふ。

トニオにとって文学は、A欠除の呪ひ故の CA' 的 Leben への ironisch な愛と結付いたものである〔その意味で彼は文学を呪ひだと言ふのである〕。

小説の終りの再現部で、彼は久々に故郷の町―北海に面した湿っぽい港町―を訪ね、町の図書館になつてゐる自分の旧宅を訪ね、ハンスの家の鉄の門扉を少年の頃さうしたやうにギイギイきしませ、そしてホテルでは拐帯犯人と間違へられかける。

やり切れなくなつて北欧への船旅に出る。

この小説の途中に出て来る二人のKパリサイ人がある。一人は自作の詩を朗吟して、周りの人達に白らけたバツの悪い思ひをさせる陸軍少尉であり、一人は旅の終りの船の甲板で辺りの海や雲を眺めてセンチメンタルな御託を並べ立てる若い商人である。

Kなど本当は必要としない筈の世間そのものとも言へる A'B が、自らに何の犠牲も払はずに、而も CA'K がKの全てと決めこんで、その CA'K ポーズを誇示し、それに酔っぱらつてゐるのは、まことにやり切れない事と言はねばならない。

丁度イエスにとって、最も憎むべき相手が無信仰者ではなく、寧ろ本当は神に無縁でしかないくせに空疎な形式的な信仰への自信から、自らを最高の眞の信仰者と信じ切つてゐる学者、パリサイ人であつたやうに、トニオにとってK家にとって、最もやり切れないのは、露骨にKに無縁な事を誇示しKを馬鹿にし切つてゐる A'B やKに無関心な CA' ではなくて、KCA' ポーズの A'B である。

トニオは北欧の海岸のホテルの扉の陰で、ホールのさんざめきの中を、昔のハンスとインゲが手を取り合つて睦みに行くの眺める。そして其処で小説が終る。

トニオにとって Leben への郷愁愛〔そのためには呪はれた文学など捨ててしまつても惜しくはないと思はれる〕も、結局は世界からの Verfall といふ怖しいA欠除の呪ひを前提した、絶望的な距離を介した郷愁愛である。

その絶望的な距離が、その郷愁愛を距離の愛として ironisch な愛たらしめるのである。その郷愁愛の文学者を、C'A リザベータは“道を踏み外した小市民”とからかふ。

C'B 一般の特徴は、A'B に対する似而非の反撥とそして A'B と相補性をなす CA' への郷愁愛にある。其処から C'B の世界に対する ironisch な Ethos が生れる。

その ironisch な Ethos からする“絶望的な距離”を介しての愛が、C'B の CA' への郷愁愛である。そしてその ironisch な郷愁愛を端的に表現するのは、Hölderlin の“Sokrates und Alchibiades”と題する詩である。

○CA''' 的 天 才

CA''' の内発的な dynamic な生の Energie による非合理的生産力とそれに基いた直感力とによって、天才的K家が生れる事がある。ピカソはその典型と言へる。これは衝動型天才と言ふべきK家である〔マルクスと同時代のラッサールはこの種の CA''' 的指導者といへよう〕。ところが天才といふ概念には、当然天才の才としてB要素が予想される筈であるから、CA''' 天才は衝動型・白痴型天才として天才の天と呼ばれるべきであるかも知れない。

従来天才のタイプとしては、CA''' 対 CB' の似而非の関係で把へられて来たやうに思はれる。

勿論どのタイプにも天才的な人はありえようが、特に天才と呼ばれるに相応しいタイプといふものが考へられる筈である。A'B と AB' とはその内包する世俗性の故に、又 C'A はその円満な健全さの故に、又 C'B はその外見上の A'B との似而非の関係と CA' への郷愁愛とが示す外見上の凡庸さの故に、天才概念につきものの shocking な性格〔ランゲ・アイヒバウム、天才、参照〕に欠けるところがある。

ところが、最も天才概念に相応しい shocking さを備へた CA''' と CB' とのうちで、更により強烈に天才概念に相応しいのは CB' である。即ち、反 A'B の不可抗的な破滅的な闘争に打ち倒れる・Idee と Sein との分裂によって亡び去るであらう・不幸な天才 CB' が、最も天才に相応しい shocking さを備へたタイプである。それに対して CA''' は、原理的な A'B 的世俗性に対する相補性的同和性から、何処かで底の見えた安心を与える事によって天才概念の充分条件に欠けると言へよう。以上、CA''' の天才の B 欠除性と A'B に対する同和性からして、CA''' 天才は結局天才の天と呼ばれるに相応しいタイプと言へるのである〔p. 73 CB' の項参照〕。

○ Deviance と CA'''

CA''' の衝動性は時として、自らの Form を得ずに徒らに素材的 Passivität のままに空転するに過ぎない時がある。その場合には、R. Merton の言ふ retreatism の一つとしての CA'''、T. Parsons の言ふ withdrawal としての CA''' が現はれる。ピカソや山下清から絵を取り去る時に、C'B 的浮浪者とは異なる意味の浮浪者・乞食としての CA''' withdrawal が現はれると言へる。

又 CA''' の衝動性が A'B への相補性において A'B 的 Cultural goal を目指して active に働く場合に、自らの欲求充足のために Norm-Sitte を介さない直接的逸脱的行為が現はれ、犯罪者 CA''' が現はれる。R. Merton の innovation の一つとしての Tough guy 的な夫れである。以上の passive な形と active な形とが混同した形で、deviance としての CA''' が考へられる。説明文でふれた通りドストエフスキイの“白痴”のラゴージンはその CA''' 的 deviance の好例である。なほ deviance はⅡ章でふれたやうに他に A'''B, C'B, CB' が考へられるべきであらう。そしてその中 CA''' と A'''B とは量的意味での、CB' と C'B とは質的意味での deviance として扱へられるべきである。但しそれらの事に就いては、先述Ⅱ章にゆづっておく。

付]

○ K の内容となる CA'''——CA''' の K ではなく、K の内容となる CA''' を考へて見る。AB'—CB'K で CA''' を K の内容とする場合と C'BK で CA''' を取上げる場合とでは、同じ CA''' を取扱ひながら、その取扱ひ方が質的に異質である事が注意されねばならない。たとへば AB'—CB' 文学で、反 A'B 的モラリズムが基調となる場合に、A'B 的 Norm に対立的な意味で CA''' 的 Leben の純潔さが〔時として原始性の形で〕持ち出される。

しかしその際 CA''' 的なものは、CB' 的破壊的反 A'B 的モラリズムの比喩乃至象徴としていはば手段的な意味で持出されるのであって、主導的なものはあく迄反 A'B 的モラリズムである〔CB' ランボ—・地獄の季節、AB' ジイド、背徳者〕。

ところが C'BK では、CA''' 的なものは CA' への郷愁愛の深化的 modi として取上げられる。

C'B からする CA' への郷愁愛は、後述する如く CA' を基にして、其処から CA''→CA'''→CA'''' [リルケ、ランボーのいふけもの・けだもの] →CAV.....→CAN の方向に深まるものと考へる事が出来る。CAN といふ極限に A→C の質的変換が考へられ、其処に純粹 Sein が現はれると見る事が出来る。そして郷愁愛は、その極限において Sein への Heimkehr となるのである。なほその途中 CA'''' 的なものとして、けもの・けだものが考へられるが、其処では又 Sex が Leben の等価物となる事が考へられる。

以上の AB'—CB' における CA''' の意味と C'B における CA''' の意味は、例へば AB'→CB' 化の方向をとったジイドの“背徳者”での CA''' と C'B ゴーギャンのノアノアにおける CA''' との意味の相異として区別されねばならない。

なほ C'B からの郷愁愛として持出された CA''' の一例として、谷崎潤一郎の文学に特殊な例が見られる。彼の文学の系列として、普通“細雪”と“痴人の愛”とが代表する2系列が考へられてゐる。しかし前者で主題となつてゐる CA', 後者での CA'''—CA'''' は、同じ C'B 作者の CA' への郷愁愛並びにその modi と考へられるべきであらう。

但し、彼は先きにふれたやうに現代の C'B としては珍しい A 欠除に関する自意識の稀薄な、いはば古典的な現代 C'B 文学者である[彼の文体にそれが見られる事は、先述の通り]。その彼に欠けた A 欠除の自意識に代るのが CA' への郷愁愛の畸形成・妖怪変化化と考へる事が出来る。即ち、CA''' 的女性、CA'''' 的 sex への偏好といふ形をとった郷愁愛が夫れである。彼が若し古典 C'B なら、CA' への郷愁愛による牧歌的文学[CA' 文学そのものは牧歌文学である]に終始したかも知れない。

しかし彼は現代の C'B である。而も A 欠除の自覚が極めて稀薄である。

其処に、その自意識の代償として妖怪变化的 CA' 群への郷愁愛の作品が、新に補填されるのである。従つて彼の文学が時として、唯美主義・悪魔主義といはれる場合、それはロマン主義に属した病的 CA' の文学や CB' 文学とは異質のものである。

一見極めて奇異な配列の如くであるが、チャップリン映画の CA' 幼児、谷崎文学での CA''' ナホミ [or CA''' 的 Sex], 芭蕉の造化 [or Heidegger の純粹 Sein] は、バラバラな atrandom な寄せ集めに見えながら実は、C'B の CA' への郷愁愛並びにその modi として、一筋の線で貫かれてゐるのである。

○Kの基本類型

Schelling は彼の“芸術哲学”で、K を Poesie+Kunst [Technik]=Kunst [カントの言葉では schöne Kunst] と考へてゐるが、更にその事と平行して、Kunst=無意識+意識と考へてゐる。その2つを合はせると、無意識的 Poesie+意識的 Kunst [Technik]=無意識的 CA' Poesie+意識的 CA Technik=[CA'+CA]=CA' 牧歌K [乃至 CA にアクセントをおくもの、更には C'AK] といふ方式が生れる。

ところが CA Kunst [Technik] は、B 要素を欠除する故になほ依然として無意識的 Technik に留り、意識的といふ形容詞を冠せる事は出来ないといへる。例へばカントは次の如く言ふ。“正当には、その行為の根底に理性を据ゑてゐる所の自由による、即ち、Willkür による、生産のみを技術 [Kunst] と呼ぶべきである。何故なら、ひとは蜂の産出物 [規則正しく築かれた蜂蝸] を技術品と呼びたがるが、併しそれは、技術品との類比によつてのみさう呼ばれるに過ぎないのだからである。従つて、蜂がその仕事を決して自らの理性的熟慮に基づけてゐない事に気付くや否や、ひとは次の如くに言ふであらう、即ち、「それは彼等の自然 [本能 Instinkt] の産物であつて、若し技術と見るなら、その仕事は彼等の創造者にのみ帰せられる」と” [第

3 批判, 43 節, 技術一般について]。従って, 無意識的 Kunst はなほ“自然 [本能]”の所産として K における無意識的要素に属せしめられるべきであらう。以上の事を考慮に入れると, Schelling の方式は, Kunst=無意識的 [CA'+CA]+意識的 B とならう。尤も, Technik は B 要素を予想する事によって初めて本来的な意識的 Kunst と認められるのであるから, その方式は, K=無意識的 [CA'+CA]+意識的 B といふ形であらはされる方がより適當といへるかも知れない。そしてその際 B 要素は, 技術を意識的技術たらしめると同時に, それ自らの働きを K そのものに加へる事によって, 無意識的 [CA'+CA]+意識的 B としての K を, CA 族的世俗的 K 群に対して別種の領域の反俗的 K 群へと変質させるのである。その反俗的 K 群は, AB' 的情感的モラリズムの K を発端とし, C'B 的郷愁愛の K 並びに CB' 的破壊的破滅的モラリズムの K を中心とする K 群である。

更に注目されるのは, 前者即ち [CA'+CA] K=世俗 K といふ方式のコレラートとなるのが, 世俗グループ的学的態度であるのに対して, 後者即ち反俗 K のコレラートとなるのは, 反俗グループ的学的態度だといふ事である。

A'B 啓蒙的—CA 実証的—CA' 情緒的学的態度→[CA'+CA] 世俗 K=CA' 牧歌 K, [CA'+CA] K, 系 C'AK

AB' 理想主義的—[C'A ピタゴラス的]—C'B 的—CB' 的学的態度→[[CA'+CA]+B] 反俗 K=AB'K, C'BK, CB'K, [C'AK].

従って若し, 世俗的学的態度のもとに K 論がなされると, 対象となる反俗 K はその本質を歪曲される可能性にさらされる事になる。元来普遍的学的態度といふものは先述の如く主観的格率に留るものである。“いかなる哲学を選ぶかはその人間による”と言はれるが, その事は, 哲学といはず科学的と称する一切の学問に通じる事である。

なほ, 世俗 K 対反俗 K といふ基本類型の最初の現はれは, プラトンの“詩人追放”に見る事が出来るが, その事に就いての詳細は別の機会にゆづらねばならない。

Ⅱ. 反俗 group とその芸術

○理想主義 AB' 並びにその K

○同族関係——AB' は反俗 group の起点となる。従って AB' の第一の特徴は, A'B に対する端的な [強度においてではなく, 反俗 group の起点として, 世俗 group に接しつつ而も反俗 group に属してゐる事から来る] 対立 [意識] である [但しより正確には, AB' は自らの内部の A 要素を介して反 A 的であるが故の反 A'B といふべきである。なほ, CB' の破滅的理想主義に対しては, AB' の夫れは, 向上的理想主義といへよう]。AB' が represent するのは, T. Parsons での Goal Gratification phase である。その G. phase が, Adaptive phase と連続的に連りつつ, 而も, T. Parsons のいふ 2 つの phase movement における到達点を分け合つてゐる事から, その 2 つの phase の対立的性格をうかがふ事が出来る。即ち, social control としての $L \begin{smallmatrix} \nearrow G \\ \searrow I \end{smallmatrix} A$ なる movement と performance process としての $L \begin{smallmatrix} \nearrow I \\ \searrow A \end{smallmatrix} G$ なる movement が夫れである。AB' と A'B と

の間には、一方では連続的同族的同質性と他方ではその同族性によって逆に強められた対立的性格が見られるのである。

○インテリ型 A'B 対 AB'——人間としての AB' と事柄としての AB' といふ事のずれから生れるのがインテリ A'B である。人間としての AB' は、マンに倣ふならば病気によって精神化・霊化した A'B である。AB' は自らの内部の自然〔AB 的 A 要素＝自然主義的自然＝術策的世俗的欲望＝悪しき自然＝Sinnlichkeit としての自然〕を扼殺する事によって、自らを傷付け病気を自らに招き寄せ、そしてその事によって初めて AB' である。自らの自然を虐殺する AB' 的 Geist のコレラートとなるのは、本来は理念ではなく寧ろ理想と呼ばれるべき AB' 的 Idee である。事柄としての AB'、即ち、AB' 的 Idee とそのコレラートたる AB' 的 Geist に人間の本性を見又其処に人間の人間としての価値を見る考へ方は、古くから道德・教養・文化・ヒューマニズム etc の名のもとに吾々の通念とさへなっている。従って、人間を人間たらしめる最低限の人間の教養を備へた人間は、当然この AB' 的理想主義に人間の尊厳を確保する“かくあるべし”のべしを求める。ところが上述のやうに AB' 的なものを具現する人間は、自らの自然を敢へて傷付け扼殺するといふある意味で極めて不自然な精神主義を Ethos とする人間である。従って、人間としての AB' は、事柄としての AB' とは逆に量的な稀少性を余儀なくされたものとならざるをえない。其処から、真正の AB' に代って、観念 AB' 生地インテリ A'B といふインテリ型 A'B が、自らを AB' と詐称して現はれる事が理解出来る。

説明文でふれたやうに、インテリ CA' が、AB' 的情感性と CA' 的哀傷性を混同する芸術上のパリサイ人であるのに対して、インテリ A'B は、同一のべしといふ言葉を介して、AB' 的べしと A'B 的功利主義的べしを混同するモラル上のパリサイ人である。べし AB' は、カントの言ふ自律的定言的命令としてのべしであり、べし A'B は、他律的幸福説的仮説的命令〔格率〕としてのべしである。A'B 的べしは、A'B 相互の権力意志の相互コントロールの役を果たす社会的 Sitte の形をとって現はれる。従って、ある時は当然それは各人に自らの露骨な権力意志を制禦する事を命じるけれども、しかしその際当事者は、そのべしに従って自らの権力意志をセイヴする事が、結局の所自己の権力意志のために得策だと了解してゐるが故に、彼はその A'B 的べしに恭順の意を示すのである。即ち、“此のべしに従ふ事は一見お前にとって損のやうであるけれども、しかしそれに従ふ方が結局はお前の身のためでもあり得でもあるのだぞ”と勧告するのが、その A'B 的べしである。社会的律法を意味する倫理・道德は、以上の如き A'B 的 das Man の権力意志の相互調整の機能をもつと同時に、CA' 的種的 Leben を formen し規整する“閉じた社会”への呪縛の機能を合はせもっている。社会的 Sitte の意味は、恐らくは上の2つの機能から合成されてゐるといへる。

その A'B 的べしに対して AB' 的べしは、自らの内部にある AB 的 A 要素を“悪しき自然”とみなし、それを否定し、否定する事によって、Geist の自由を主張せよ、と命じるべしである。以上の相反的に異質なべしを、同一のべしといふ言葉によって混同するモラル・パリサイ人が、インテリ A'B である。彼は自覚的には AB' を自任し、無自覚的な本性においては A'B

的 Ethos の持主である。そしてその二重性から生れるのが、インテリ A'B の偽善性である。

AB' は先づ自らの内部の A 要素に対して非寛容であり、その A 要素に対する敵対を介して A'B に対して対立的であるが、インテリ A'B は、自らの詐称する^{〇〇}べしによって先づ他に対して非寛容であり、威嚇的な審きの態度をもつ。その審きは主観的には自らを安全地帯に置いて平然としてゐる無反省的な自信のために極端に非寛容であり、客観的には自らの二重性に気付かぬ無反省の愚かしさによって、極めて偽善的であり俗悪である。物分りのよい A'B [pretest 参照] はギリシヤの教養俗物—ソフィスト—の Ethos であったが、更に、K CA' ポーズ、乃至、モラル AB' ポーズのインテリ A'B [系インテリ CA' (CA)] が、K 並びにモラルに関するパリサイ人として教養俗物の名に値してゐる。そして、ジャーナリズムや学問の世界で需要供給の関係からして常に量的に巾をきかせやすいのが、此の種のタイプのインテリ型である。

○似而非の関係——AB' の反俗性は、自らの内部の A 要素に対する反^〇の態度から生れる。従つて、AB' の反俗は、社会的範疇における反 A'B である前に先づ主観的二元論的反^〇A である。その故に、AB' の A'B に対する敵対関係のプリメールな形は、独乙理想主義的な感性対理性、現実対理想、自然対精神といふ形での敵対関係である。なほフロイドの二元論は、上の社会的範疇での夫れと主観的二元論との折衷と考へられる。或ひは、独乙理想主義的二元論の社会的範疇の方向への variation と考へられる。社会的範疇のもとでの反俗は、CB 族特に CB' における反 A'B [破滅的破壊的モラリズム] 的^〇超俗において現はれるといへる。

なほ、独乙理想主義的主観的二元論の対立意識を、当時の独乙の社会的経済的未成熟性・後進性に由来するとみる考へ方があるが、しかしその対立意識は同時に、時代・社会の如何に拘らずに回帰する人間的 Ethos の問題としても当然考へられるべき事である。

AB' 的思考によれば、自然は、“よき自然” [CA 的 A, 素朴的自然] と “あしき自然” [AB 的 A, 自然主義的自然, 世俗的術策的欲望] とに分れる [シラー, N und S]。AB' はその CA 的 A たる^{〇〇〇〇}よき自然における理性と感性、精神と自然の未分化的渾一体を、失はれたアルカディアと見做し、その失はれた CA 的 A の代りに AB 的 A を見出し、その^{〇〇〇〇}悪しき自然に対する精神の開放的闘ひ [シラーによれば、その闘ひが文化・自由の意味] により、遠い未来の Idee における精神と自然の新しい再統一を、未到来のエリジウムとして求める [アルカディア対エリジウム]。AB' は AB 的 A たる^{〇〇〇〇}悪しき自然との敵対関係を通して、已に CA 的 A たる^{〇〇〇〇}よき自然に安住出来ない。彼は^{〇〇〇〇}その故に^{〇〇〇〇}よき自然を^{〇〇〇〇}あしき自然との闘ひを介して Idee の形で遠い未到来のエリジウムに求める [自然—文化—理想が、AB' シラーの文学、哲学、歴史観の原構造である]。

以上の AB' 的反 A 的反俗は、C'A の^{〇〇}出俗に対して似而非の関係にある。AB' は反俗 group の起点として、C'A は世俗 group の頂点として、両者は共に世俗 group と反俗 group の接点に位置してゐる。しかし C'A の^{〇〇}出世間は、動物精気の稀薄化による^{〇〇〇〇}おのづからなる出俗である。それに対して AB' の反俗は、上述の如くに自らの内部の世俗性に対する意志的闘ひによる自己扼殺的な苦悩を担った^{〇〇}反俗である。前者の^{〇〇〇〇}おのづからなる安らかな出俗に対して、これは^{〇〇〇〇}みづからなる意志に基づく・Geist の名による不自然を敢へてする反俗である。その AB' 的 Geist

の高貴さについてマンは次のやうに言ふ[G und T, 邦訳38頁]。“人間といふものは自然から離脱する事が甚しければ甚しい程、即ち、病気であればある程、人間らしくなるのではないか”。そして彼はヘッベルの言葉を引いてゐる。“君の指が痛たければ、その指は君の身体から離れてしまったのだ。そして生氣は君の指の中で別にめぐり始める。ところで人間も亦、ひよっとすると神の痛める指ではないか”。更にマン自身の言葉が続く。“人間を病める動物だと言つたのはニーチェだった。その意は、人間は病気である限りにおいてのみ動物以上のものだと言ふのではないだらうか。従つて精神のうちにこそ、即ち病気のうちにこそ、人間の尊厳が存する。そして病気の天才は、健康な天才よりもはるかに人間的なのである”。健康な肥え太ったAB'は当然考へられない。肥え太ったAB'があるとすれば、それはインテリA'B-CA'[CA]であらう。そして又病気の細長型AB'[更にはCB']には、当然天逝こそ相応しいと言はねばならない。マンは言ふ、“シラーとドストエフスキイは高齢の貴族性にあづかる事がなかった。二人は比較的早く死んだ。一人は肺をやみ一人は癩病だった”。但しAB'シラーとCB'ドストエフスキイの區別に就いては、当然マンはふれてゐない。

生活に窮し病苦にせめられながら、なほ無頓着で快活さを失はないモーツァルトは考へられるが、例へ生活的に豊かで又健康であっても、精神的に病み苦しんでゐないベートーヴェンは考へられない[ベートーヴェンのフモールを無視する訳ではないが]。マンは又、シラーとドストエフスキイを病気の聖者・英雄・キリスト教的苦難の殉教者・殉難者と呼び、それに対してゲーテとトルストイを健康で長寿の異教的貴族と呼んでゐる。

AB'の典型としては、独乙理想主義時代を代表するフィヒテ・シラー[更には、ルーテル・ベートーヴェン]が考へられる。よくカントがドイツ理想主義の祖とみられ、その倫理的リゴリズムは一見してAB'性格の端的なあらはれと考へられる事がある。しかしカントのそのリゴリズムの出所は、C'A的宇宙的秩序感にあるといへる。カントの処女論文の一つが、天体に関する自然科学的論文[天体の一般的自然史及び理説、1775、後にカントーラプラス星雲説と呼ばれたもの]であつた事は暗示的である。なほ彼の非AB'的Ethosは、彼の人間学又彼の伝記等からして充分にうかがへる事である。

一方シラーは、その詩でカントの道徳的リゴリズムを皮肉つてゐる。

“私は悦んで友人に奉仕する。しかし遺憾な事には傾向性をもつてである。

それで私は道徳的でないといふ不安をしばしば感じる。

それでかう言ふより外仕方がない。まづお前は友人を軽蔑すべく努めねばならない。

そしてその上で義務がお前に命じる所を、厭々なさねばならない”

シラーがそのリゴリズムの代りに義務と傾向性の合致たる“美しい魂”を美並びに道徳上の理想とした事は、まるでシラーを非AB'の如く思はせ、そしてシラーによって皮肉られた限りにおけるカントは、まるでAB'の如くである。しかし実際には、カントはC'Aなるが故に安らかに道徳的リゴリズムを説き得たのであり、一方シラーはAB'なるが故に、両者の調和を追ひ求めたのである。事実カントにその調和の考へがなかったわけではない。それは、神聖

性といふ形で第2批判の弁証論に説かれ、更にはその調和が第3批判への道を開くのである。

シラーは終生変る事なく忠実なカントの弟子を以て任じ続けたが、同時に常にカントに満足しえないものを感じ続けてゐる。其処に AB' と C'A との似而非のズレを見る事が出来る。

○AB' 的反Aと CB' 的反 A'B——反俗 group の反俗が、理性対感性といふ主観的二元論としてではなく、文字通りの反俗即ち反 A'B として社会的範疇のもとに把へられるのは、C'B 並びに CB'——特に CB' における——反俗である。即ち、C'B は retreatism 的脱俗として又 CB' は rebellion 的反 A'B 的超俗として、AB' の反A的反俗と区別される。C'B の脱俗は、その passive な形では withdrawal として、同様に passive な CA''' とその点では軌を一にした非 A'B 乃至反 A'B 的 retreatism である〔ⅡのⅢ Deviance の諸現象参照〕。CB' の超俗は、その active, passive を問はず積極的な反 A'B である。従って、その反 A'B の強烈さに関して最も純度の高いのが、CB' であらう。AB' の反俗の烈しさは、前述の如く反Aを介しての反 A'B であり又 A'B と境を接してゐる事から来る端的さである。

実存哲学乃至実存主義の^{〇〇}実存の出所は、当然 A'B 的〔日常的〕世界又 AB' 的〔形而上学的〕世界からの又それに対する retreatism 乃至 rebellion として、A 欠除的反俗性において把へられるべきである。例へばその事への考慮を欠いて、実存を理想主義の同義語と扱ふ〔事実そのやうな実存規定が見られる〕のは、それが若し人間並びに事柄に関する A'B 対 AB' 対 C'B [CB'] といふ事への無感覚から言はれるとすれば誤りである。

○シラーによる AB' 文学の説明——〔素朴文学と情感文学に就いて〕——AB' 詩人は上述の如く、Geist と Natur の分裂を前提し、アルカディアへの嘆きとエリジウムへの憧憬を住家とする詩人である。その分裂の苦悩とアルカディアへの嘆きとエリジウムへの憧憬が、elegisch な情感性を生む。それは geistig な Sentiment である故に AB' 的情感性と呼ばれる。

その AB' 文学を内容から見ると次の3種になる。即ち、① Idylle 牧歌文学、② Elegie 悲歌文学、③ Satire 諷刺文学、である。そのうち① Idylle 牧歌文学は、本来的には CA' 牧歌文学を指すものといふべきであらう。元来 CA' poesie はKそのものの Ur-Poesie であるから、肯定的にせよ否定的にせよ情感文学がKである以上、その Ur-Poerie と関わりをもつ事は当然の事といへる。しかし情感文学における CA' 牧歌文学の占める位置は、およそ消極的たらざるをえない筈である。シラー自身もそれを単に Elegie の系に入れて、更に次の如き註を付け加へる事を忘れてゐない〔邦訳70頁の註〕。“しかし私は外ならぬ牧歌を悲歌の種類に数へる事に就いては、寧ろ弁明を必要とするやうに思はれる。尤も今問題にしてゐるのは、自然と人工、理想と現実の対立をその本質とする情感文学の一種なる牧歌だけである事を想起してもらひたい。その対立が詩人によって明かに表白されてゐないとしても、又傷はれない自然あるひは実現された理想の姿が詩人によって吾々の眼前に独立的に示されたとしても、かの対立はやはり詩人の心中に存してゐるし、彼にその意志がなくとも一筆ごとにおのづと現はれるであらう”。又③の Satire 文学は、本来的には当然 CB'[or C'B] 文学に属してゐるといへよう。即ちそれは、実現されたエリジウムの理想の上に立って、それを現実に対立させる事によって、

醜惡な現実を曝露的懲罰的に取扱ふ“懲罰的悲愴的諷刺文学”の事である。更にその系として、その諷刺が知的諧謔的になされる場合の諧謔的諷刺文学が付け加へられる。前者は悲劇、後者が喜劇としての諷刺文学である。彼の付け加へる注意によると、後者の場合には、題材の非悲愴性と方法の知的諧謔性のために悲劇の場合よりも作者の側により強烈な理想への意志が必要とされる。さもなくば、喜劇における諷刺の本来的性格が失はれてしまふ事になる。以上のシラーの説明を概括すれば、この Satire 文学は、A 欠除的 Ironie を母胎とする文学と考へる事が出来る〔その Ironie による C'B-CB'K は後述〕。従つてシラーのいふ情感文学プロパーとして認められるのは、②の Elegie 文学である。これは、シラーによれば失はれたよき自然、未到来の理想への嘆き、Geist と Natur の分裂の苦悩から生れた文学である。その嘆き・苦悩は、当然単に seelisch な Leidenschaft ではない。あく迄 geistig に情感的な Pathos である。シラーは自らを別にして、クロップシュトックとルソーを挙げてゐるが、ルソーは恐らくは後述する CB' に属してゐよう。以上のシラーの説明を手がかりにして、以下改めて AB' 文学に就いて考へる事にする。

○AB' 文学——情感的理想主義的モラリズムの文学——情感性と広義のモラリズムといふ2つの構成因子にその特徴をみる事が出来る。

I. AB' 的情感性——

AB' 文学に流れてゐるのは、惡しき自然との分裂の苦悩、失はれたアルカディアへの嘆き、理想への憧憬から成る geistig な情感性である。それは、CB' 文学が C'B 文学と共有する A 欠除的脱世界的情念と混同されてはならない〔昭和34年秋“美学”38 所載“描写的 schöpfen”参照〕。特に下記する挫折的悲歌的情感性と A 欠除的情念性〔脱世界の負符号的情念〕とは、一見まぎらはしく見える事がある〔例へば後述 C'B 文学に属したトーマス・マンでは、A 欠除の自覚とその情念性とが、Geist といふ言葉で現はされてゐる。マンの“G und T”の訳者がマンを情感文学者に数へてゐるのはそのためであらう。しかしそれは恐らくは上述の区別の混同である。又リルケのマルテに流れてゐる A 欠除の自覚とそれに結付く情念性は、時として AB' 的悲歌的情感性を混同される。しかしそれもあくまで混同である〕。

しかし、CB' では脱世界的情念は、反 A'B の激烈さ並びに反 A'B 的 Idee における乾燥性の狂熱的偏執の陰に隠されてゐる事が多い。従つて AB' と特に CB' とのその点の区別は、AB' の反 A 的情感性と CB' の反 A'B 的乾燥の狂熱にある。AB' の情感性が Idee への憧憬と悲嘆に根ざすのに対して、CB' にあるのは、反 A'B 的な怒りと Idee における狂熱の乾燥性である。例へば AB'→CB' の方向に生れたジイドの背徳者と CB' ランボーの地獄の季節との違ひの一つは、前者の情感性に対する後者の乾燥性にある〔内容的には共に、反 A'B の Mittel として、CA''' or CA'''' 的なものの謳歌といふ点で連つてゐる〕。

更には已にふれた如く、AB' 的情感性と CA' 的哀傷性の区別が無視されてはならない。ヘッセ・ジイド・ロマン・ロランに流れてゐるのはこの AB' 的情感性であるが、それは時として抒情性・浪漫性の名の元に CA' 的哀傷性と混同される事がある。

Ⅱ 反A的理想主義的モラリズム——

①反A的理想主義的モラリズム

①上昇的憧憬的モラリズム——^{ジイド}狭き門, ^{ヘミッセン}デミアン, ^{ジャン・クリストフ}ジャン・クリストフ

②挫折的悲歌的モラリズム——^{ヘミッセン}車輪の下, 春の嵐

③CB' 化——AB'→CB' としての破滅的破壊的モラリズム——^{ジイド}背徳者

以上のⅠ情感性+Ⅱモラリズム=AB'的理想主義的悲歌的モラリズムの文学といふ規定によって、AB'文学の特徴を定着しておく。

上述のⅡの①④、即ち反Aの上昇的憧憬的モラリズムのAB'文学は、時として広義の Bildungsroman の1つと見られる。その際には、例へば C'B ゲーテのマイスターが時としてさう呼ばれる場合と対比的に把へられる必要がある。Bildung に AB' 的憧憬的な方向をもつものと C'B 的郷愁的帰郷的な方向をもつものが、区別されねばならない。又Ⅱの②、即ち CB' 化の文学の場合、反 A'B の象徴として CA''' or CA'''' が持出される事があるが、その際先述の如く如何なる視点から如何なる態度でその CA''' or CA'''' が取扱はれてゐるかが、注意されねばならない。又 AB' 文学そのものの内部に古典的対現代的の区別があるとすれば、古典 AB' におけるⅡ④の上升性へのアクセント、現代 AB' におけるⅡ②挫折性へのアクセントの相異を考へる事が出来るであらう。なほ改めてシラーの言ふ所を顧ると、彼のいふ Elegie は主としてⅡ①にそして Satire はⅡ②に相当してゐる。

なほ AB' 文学では、人間そのものへの興味・関心ではなく、寧ろ Idee に参与する限りにおける人間が問題となるので、事柄も人間も全てが作品全体を貫く作者自らの情感的モラリズムといふ一本の線で貫かれてゐるといへる。従つて、時として生きてゐる現実の人間が忘れられ、生きたタイプへの関心が失はれる事がある。そして人間が Idee の単なる事例として観念化される危険がある。AB' 文学で特に生きた人間として把へられるのは、AB'—CB' 特に CB' タイプである。従つてその作品に好んで CB' 的主人公を設定する事は、AB' 的作家の一つの特徴として注目する事である。

○シラーの自然観並びに C'B 的自然——シラーは素朴文学の母胎を AB' にとって失はれたアルカディア的 CA' 的牧歌的自然[CA 的 A]に見てゐる。そして彼はホメロス・シェクスピア・ゲーテをその素朴文学の典型とみなしてゐるが、彼等の眞の住家である筈の CB 的自然は、其処では説かれてゐない[この点では、マンの“G und T”も同様である]。即ち、彼の自然に就いての説明は、CA' 的素朴的自然[Leben としての自然, CA 的 A]と C'B 的素朴的自然[Sein としての自然, CB 的 C]との区別に関してふれる所がない。しかし彼は正しくは、AB 的自然, CA 的自然, CB 的自然の区別のもとに自然を説くべきだったのである。例へば自然主義文学で扱ふ自然は、A'B 的権力意志的配慮とからみ合った術策的欲望として悪しき自然[Bと結付いた AB 的 A]である[シラーはそのエッセイの巻末近くでこの悪しき自然に就いてふれてゐる]。それに対して、彼のいふよき自然——素朴的自然——は、CA' 的素朴的自然を指してゐる。それは B 要素から切離され C 要素と結付く事によって、術策的世俗性から払ひ清よめられた素朴的自

然である。それは特に CA' 的素朴的 Seele [あどけない少年の無邪気さに喩へられる] として現はれる純潔な Leben [純潔な Seele としての CA' 的 Leben] を基にして、それを人間以外の動物又自然一般に迄拡大して把へた場合の自然である。その故にそれは、Leben としての自然 or 素朴^{〇〇}的自然と呼ばれるべきである。それは一方では B 要素による不純化をまぬかれた純潔な自然であると共に、他方では相補性的に A'B 的 Sitte に照応するよき自然である。只例外的に CA''' 的自然が衝動的 Leben として、換言すれば量的意味での悪しき自然として、時として deviance 性をもって働く場合があるが、質的にいへばその CA''' を含めて CA' 的自然は、自然主義的自然の術策的配慮的 B 性から払ひ清よめられたよき自然として、人工・文明の虚飾を恥じさせるに足るアルカディア的自然である。

それに対して C'B 的自然は、素朴^{〇〇}的自然として、Leben そのものをその背後から支へる Sein としての自然を意味する [芭蕉の造化, Heidegger の Sein, その Heidegger に倣へばその自然は、人間・動物の Leben によってではなく、寧ろそれ以前のより根源的な機能的自然たる風のソヨギ, エーテル, 大地 etc の語であらはされる自然である。これが Sein と呼ばれる]。比喩的にいへば, CA' 的 seelisches Leben → CA'' → CA''' 的 Drang・Trieb → …… CA^N といふ方向への A 要素の増大は、その極限において純粹 C への質的転換をなしとげるといへる [例へば CA''' として, Sex があるひはリルケやランボーのいふ Kreatur が考へられる]。この純粹 C が C'B 的 Sein 的自然である。

この C'B 的自然は, A'B 的 Sitte に対して異次元的な, その規準によっては計る事の出来ない自然である。其処に CB 的自然と CA 的自然との相異点の一つがある。従つてその C'B 的自然は A'B 的 Sitte にとって, そしてその点では同様に AB' 的モラルにとつても, [A'B と AB' とはこの点に関しては同盟する], 一種の悪しき自然である。A'B 的自然は A'B 的 Sitte の領域内での悪しき自然である。ところが, この C'B 的自然は, A'B 的 Sitte の領域外にあるといふ意味での悪しき自然である。C'B 的自然は, CA' 的自然よりもより根源的である事によってより無垢でありより純潔であるが, A'B 的 Sitte に坐標をとれば, その無垢, 純潔は, “無垢の罪・純潔な悪” である事によって, よき自然たる CA' 的自然と區別される悪しき自然である。

例へば風流といはれるのは, 九鬼博士の指摘するやうに “風の流れ” たる Sein に徹した生き方を示す語である。風流人とは, その行為の内容においてたとへ如何にえげつない——A'B 的——行為に耽るにしても, 又如何に A'B 的 Sitte に背く場合でも, その言動の Innere Form において常に風の流れの純粹 Sein 的性格を帯びた人の事である。極端な例を引くならば, 彼は例へば卑猥な猥談に耽る場合でも, 其処に純粹 Sein 的な存在論的高貴さを爽やかに匂はせるに違ひないのである。それに反して, Trieb an sich をむんむんさせる猥談あるひは B 的配慮 [罪, 隠蔽の意識] による不潔感を匂はせる猥談は, 最も風流から遠い人間を開示する。風流人の猥談では, 人間としての自然 [食慾, 色慾 etc] が, 純粹 Sein たる風のソヨギと等しい純潔さで発現するのである。例へば CA' 的自然としての官能性は, 比喩的にいへば, A'B 的 Sitte に見守られた少年の seelisch に純潔な官能性である。キェルケゴールに倣へば, そ

れは、可能性としてまどろんでゐる官能性である。それに対して C'B 的自然は、A'B 的 Sitte の圏外にある嬰兒としての自然である。例へば C'B 的自然は、外見上極めて A'B くさいあるひは又その反対に A'B 的 Norm に反した色慾や物慾においても、その慾望自体が比喩的にいって丁度嬰兒の泣き声に等しいアモラルな純潔さに担はれて発現するのである。

メンデルスゾーンの CA' 的に純潔な Gemüt に担はれた音楽には、CA' 的 Leben が有機体として放なつ粘液質のねばっこい体臭がこもってゐる。それに対してモーツァルトの音楽の純潔さは、そのメンデルスゾーンの粘液質的な体臭を払拭し去った C'B 的自然の爽やかさに溢れてゐる。其処に流れる哀しみや苦しみは、丁度吹く風のソヨギ、往く雲のうつろひそのままの意味しかもたない悲しみであり苦しみである。若し“人間的に意義の充実した [Menschlichesbedeutungsvoll]”情念が、ある時は A'B—CA' 的な Leben に即した Leidenschaft としての喜びや哀しみに相応しく、又ある時は AB' 的に壮大悲痛な Pathos に相応しいとするならば、モーツァルトの音楽の奏でる夫れは、ある意味で極めて非人間的な、人間的にいて極めて意味内容の空疎な情念でしかないといへる [モーツァルトのウイーンでの人氣が、短い期間に泡のやうに消へた事は、その事に関係がないとはいへない]。それは、吹く風のソヨギ・日照りと日のカゲリ・空の雲の移ろひに等しい意味しかもたない喜びや哀しみだからである。其処に流れてゐる情念は、世俗的又形而上学的な人間性といふ点では、全く無意味・無内容・無目的でしかない。そして只、eksistenzial な意味でこの上なく純潔で、Sein の充溢といふ意味でこの上なく満ち溢れたものといふべきである。

芭蕉の“造化に還れとなり”といふ言葉は、人間の社会そしてそれを支へる Wille を捨てて旅に出、山に籠るといふ意味で自然に還れといふのではなく、人間の本能・意志・情念 etc をそのまま、純粹 Sein たらしめよ、といふのであらう。李白の詩句“別有天地非人間”——別に天地の人間 [じんかん] に非ざるあり——の意味するところもその別天地は空間の意味での別天地ではなく、脱存疇としての“世界からの顔落 [脱世界性]”によって吾々が純粹 Sein への Heimkehr をなしとげる事が別天地 [Sein] を開示させるの意である。人間 [じんかん] とは、日常的形而上学的世界であり、その故に A'B—CA' 的なあるひは AB' 的に人間的な一切が Sein へと還元される事を、“非人間 [じんかんに非ず]”といふのである。造化に還るためには、兎も角も何等かの意味で人間世界からの還帰といふ意味が出て来るが、そのからは、常に空間的範疇としてではなく脱存疇として解されねばならない。即ち、人間の自然をそのまま Sein たらしめるための場合は、日常生活そのものにおいてであって、空間的に世俗を厭ひ捨て、山に籠ったり山里に隠遁したりする事は別に必要ではない。日常生活の場を捨て、山里へ隠遁する事によって純潔を守らうとするのは、AB' 的理想主義的隠遁でありその隠遁の行きつく先きは、形而上学的人間——じんかん——にすぎない。空間的に又心理的にどれ程じんかんを離れても、予め先づそのにんげんが、彼の全てを純粹 Sein たらしめてゐない限り彼自身がじんかんのにんげんであるから、彼の行く所ににんげんが一人もゐなくとも、其処には別天地は開示されない [1959 “美学” 38 所載の描写的 Schöpfen 参照]。

キェルケゴールのドンジュアン論によると、“フィガロの結婚”のケルビーノは、まどろんでゐる可能性としての官能愛を示し、ドンジュアンは、現実化した官能愛の具現者である。それは一見 CA' ケルビーノ、CA''' ドンジュアンといふ規定のやうに思はれる。しかし、キェルケゴールの把へるドンジュアンは、CA''' 衝動型のドンジュアンではない。恐らくは CA' ケルビーノ対 C'B ドンジュアンと解すべきであらう。即ち其処では、ドンジュアンは C'B 的純粹 Sein 的官能愛の体现者として把へられてゐるのである。キェルケゴールは、そのドンジュアンは音楽によってのみ表現可能であるといふが、正確には、C'B ドンジュアンは C'B モーツァルトによって初めて表現可能といへるのである。ドンジュアンの官能愛は、それが反 Sitte 的に働く場合でも正確には上述のやうに無垢の罪、純潔な悪として働く官能愛といふべきである。

AB' ベートーヴェンのフィデリオは、モーツァルトのドンジュアンの背徳性へのいら立ちから生まれたといはれる。恐らく彼は、モーツァルトの音楽に流れてゐる C'B 的自然を感じ取り、それが AB' 的倫理性、精神性によっては審く事の出来ない異質の悪しき自然である事——而もそれが AB 的 A としての悪しき自然ではない事——が余計彼をいらいらさせたに違ひないのである。シラーも亦恐らくは、下意識的にはゲーテからその C'B 的自然を感じ取つてゐたに違ひないのであるが、しかし意識的にはその自然を CA' 的自然に置き換へ、その上で何処かに優越感を混じへた讃同をおくつてゐるのではないかと思はれる〔シラー Anmut und Würde〕。ゲーテは、偉大な K 作品の誕生には、必ず dämonisch なものが働いてゐるといふ。その dämonisch なものは、決して單純に CA''' 的に dynamic な非合理的生産力〔並びに直感力〕を指すものとは考へられない。それは上述した無垢の罪としての C'B 的自然の根源力を指すものと考へられる。シラーは CA' 的素朴的自然のみが天才を生むといふが、しかし、CA' 的自然は CA''' 的自然として B 欠除の天才即ち天才の天を生むに留るものといへる。シラーは恐らくは、半ば意識的に意地の悪い complex によって、その誤りを犯してゐるといへるのである。

付]

○ AB' の老年芸術——AB' 詩人としては当然シラー〔彼の挙げるのはクロップシュトック〕、現代の AB' としてはヘッセ、ジイド、ロマン・ロラン、が考へられる。

音楽家としては当然ベートーヴェン、そしてシューベルトが考へられる。ベートーヴェンの第 9 の合唱部は、特に 2 人の AB' 的 K 家の握手による AB' 的 Geist の壮大な凱歌であるといへよう。しかしベートーヴェンの晩年のソナタ又クワルテットはもはや決して單純に AB' 的な音楽とはいへない。又シューベルトは生理的には夭逝したが、死後出版の“白鳥の歌”にではなく、“冬の旅”に、ベートーヴェンの晩年に等しい AB' 的なものを宿してゐる。

それらは恐らくは、AB' 的苦悩・苦闘の果ての Entsagen が生んだ音楽といへよう。

元来 AB' 的に Geistig な闘ひは、Vollendung をもたない悪無限的な苦闘の連続乃至 AB' 的 Idee への絶え間ない精進と上昇にその特性をもつてゐる。endlos な悪無限を敢へて担つて果てしのない苦闘の上昇への精進をやめないのが、AB' の本領である。しかし間々その苦闘の歴史の果てに、自己放棄的な Entsagen が見られる。

そして而もその Entsagen は、AB' にとって自らの崩壊、無意味への転落を意味するのではない。

本来ならば、絶望的な挫折を招来する筈の Entsagen は、AB' に自らの本性にとっては異質であらうが、絶望を償って余りある別種の世界を開示する。

その世界は勿論 Geist の自己放棄によって復活する悪しき自然の世界ではなく、又 CA' 的アルカディアへの復帰による世界でもない。AB' のその Entsagen は、A→C への質的転換を意味し、その Entsagen が開示するのは、その背後に長い AB' 的苦闘の歴史をまざまざとにじませた CB 的自然の世界である。それが彼等の晩年の音楽の特徴である。それは又決して、AB' に対して相補的な意味をもった CB' 的音楽でもなく、又 C'B 音楽そのものでもない。

それは AB' 的苦闘の歴史を背後に刻みこんだ純粋 C 的音楽である。

ジメルは“老年芸術”について語ってゐるが、具体的に取上げると種々の類型における夫々性格の異なる老年 K が考へられよう。例へばモーツァルトの晩年の諸交響曲を含む K 500 番以降のものには、人間的な苦しみ・哀しみに傾きかけた純粋 C 的ニュアンスが感じられ、その結果其処には、ベートーヴェンの晩年の音楽に連る如き性格が嗅ぎとられるのである。

以上 2 人の音楽家について述べられた事は、当然文学者の場合にも考へられる事であるが、その事については省略しておく。

○C'B 並びにその K, C'B 対 CB',

シラーにいはせると、素朴文学は素朴的自然を抛り所として“現実の模倣”といふ単一の形体をもつに留るものである。しかしシラーのその規定は、特に A 欠除に関しての自意識を備へた現代 C'B 文学にはふれる所のない単純すぎる規定といはねばならない〔複雑さといふ点では却って AB' 文学の方がより単一に近い形体といへよう〕。以下シラーの定義づけを手懸りにしながら C'B 文学を考へてみる。

その前にゲーテ〔以下にふれるやうに古典 C'B と現代 C'B の中間に位置してゐるので、ある意味では不適当な例であり、ある意味では適例である〕を中心にして、C'B タイプに就いて考へてみる。

○似而非の関係——C'B と A'B [特に pretest におけるもの分りのよいソフィスト的 A'B] との似而非の関係からすれば、C'B は反俗 group の中での俗物である。その事を裏側から指摘してゐるのは、トニオ・クレーゲルでのリザベータの“道を踏み外した小市民”という冗談である。又浪漫主義者達が口をきはめてゲーテの俗物性を罵る所にも、その事はみられる。彼等の目には、ゲーテのマイスターは、およそ愚劣な俗物的散文臭に満ちたものでしかなかった。又彼の勲章好きや枢密院顧問官めいた尊大な態度は、有名である。ゲーテ自身も自分の事を臆面もなく“中庸の世間兄”と呼んだりする。ゲーテが A 欠除の自意識に関していはば中間的な場所にある事が、なほ更 A'B との似而非の外見を強よめてゐるといへる。従つて更に古典 C'B [ホメロスやシェクスピア] になれば、恐らく現代的 K 家意識からすれば愈々 A'B との似而非の関係が目立つといへよう。日本では C'B 利久や芭蕉の一見 A'B まがひの生活が、その例となるかも知れない。利久と秀吉との間の身分上の C'B < CA''' ,そして人間的な C'B > CA''' [B 要素による郷愁愛] といふ幅轆した関係が、利久の不幸な死を招来した原因の一つと考へられる。その利休には伝記によると A'B まがひの言動が極めて多い。芥川龍之介が、芭蕉の事を“蕉風の宣伝にこれ努めた大山師”とからかふのも、C'B の似而非 A'B 性に就いてであるといへよう。

○CA' 群への郷愁愛——C'B の似而非俗物性を端的に示すのが、CA' への郷愁愛だといへる。

しかしその郷愁愛を A'B 的な相補性的愛と見做せば、C'B の C'B たるゆえんは理解不能になる。だが、例へば AB' シラーの目からしてさへ、ゲーテの郷愁愛は、時として余りに A'B 臭いものと映ったのではないかと思はれる。元来 AB' の目からすれば、CA' は対立的 A'B の陰としてせいぜい軽蔑的黙殺に値するだけの存在でしかない。従って多少でも自らの側からする敬愛を混じへた交友関係にある相手の C'B が、その CA' に愛着を示す事には AB' は、我慢が出来ない。AB' [そして CB' からも] の目には、C'B の CA' への郷愁愛は、真面目さを欠いた „イロゴト” としか見えない。AB'-CB' の厳格なモラリスト的性格と C'B のその点でのさう見える不真面目さは、CA' 的 Leben への夫々異なる視点を示すものである。そして AB'-CB' に対してその点では、C'B はアモラルな “erotic type” [Adorno] といへよう。ゲーテは生涯の間に幾多の奇妙な恋愛事件を引起してゐる。その恋愛の殆どは、CA' 娘への接近と逃亡の繰り返しである。ところが AB' シラーには、およそ geistig に高潔な恋愛しか考へられない。事実彼は、高潔な恋愛の果てに貞淑で気高いシャルロッテとの結婚生活に入った [若し多くの場合男性の側に選択権があるとすれば、AB' 男性は CB' 女性を選び、CB' 男性は AB' 女性乃至は C'A 女性を選ぶであらう]。そのシラーからすれば、ゲーテがしようこりもなく CA' 娘へのイロゴト的接近を繰り返へし続けるのは、決して真面目な所業とは思はれない。あげくの果てにゲーテは、中年を迎へると CA'' とさへ思はれる女性と結婚してゐる [中年を迎へてといふ事とゲーテが中間的 C'B である事とが、CA'' 女性との結婚を可能にしたといへる]。

一見奇異な結付けのやうに見えるかも知れないが、ゲーテの幾多の CA' 娘への接近と逃亡とは、キェルケゴールの唯一人の許婚者レギーネ・オルセンとの婚約並びに謎めいたその破棄と、質的に軌を一にしてゐる。ゲーテの逃亡は、従来充分な説明が与へられずに只謎とされ、キェルケゴールの婚約破棄とその後のいわくありげなポーズは、同様に彼の伝記研究者にとって現在迄謎のままである。しかし、上の2つは共に C'B の CA' への郷愁愛の特質からして把へられるべきであらう。即ち、それらの現象は、トニオ・クレゲルにおける郷愁愛の variation 乃至トニオ・クレゲルを一つの variation とするものの variation と見做す事が可能であらう。換言すれば、その接近と逃亡は、C'B からする CA' への郷愁愛の Wesen の一つをなす絶望的な隔離的な距離に基くものである。その際その隔離的な距離を生み出すものとして、C'B と CA' との間に介在する A'B を考へる事が出来る。但しその A'B を挟む三角関係では、A'B は別に実在する特定の間人である必要はない。架空のそして世界観・生活観としての A'B が、その際の A'B である。特にキェルケゴールの場合、彼には A 欠除の自覚が極めて強い [時代的にはゲーテとほぼ等しい時代であるが、哲学は時代に無関係に C'B に対してその A 欠除の自覚を要求するといへる。例へばプラトンの対話篇では充全的に把へられてゐないソクラテスの Ironie は、ソクラテスの A 欠除の自覚を物語るものといふべきである] ので、その両者を隔てる Ethos としての A'B が、特に彼の実存的体験に深刻にかかはる問題となつて現はれてゐる。

以上普通なら決して一つにはなりさうもない上挙の三つの場合 [ゲーテ・キェルケゴール、そしてトニオ・クレゲル] が、C'B の CA' への郷愁愛の特質を介して一つに結付く事が注目される

であらう。

○C'B 対 C'A, CB', AB'——ゲーテの女性遍歴中例外的な女性が二人ある。一人はワイマールのシュタイン夫人 C'A である。当時彼はヴェルテルを介して Sturm und Drang 期を乗り越えたものの、なほ新しい方向に就いては暗中模索の状態のまま、ワイマールの政治顧問として文学を離れた10年間を過してゐた。此の間のシュタイン夫人との相補性的交友は、彼の将来のギリシャ的古典期への準備となった〔当時のギリシャ観が専らアポロ的 C'A 的ギリシャ観であった事が、なほ C'A シュタイン夫人との交友を意味深いものにしてゐる〕。当時の彼にとってシュタイン夫人は一種の導きの星であり沈静した母性愛の女性だった。

更にもう一人は、ベッティナーと呼ばれる CB' 的女性である。彼女は相補的に好意を抱いてゐた AB' ベートーヴェンをゲーテに引合はせたが、この出逢ひは AB' シラーとの出逢ひのやうには熟する事なく終った。なほゲーテが晩年になって CA→C'A エッケルマンと出逢った事は、“ゲーテとの対話”といふ貴重な作品を考へる時、極めて運命的である。なほ又その対話の中にしばしばバイロン卿 CB' の事が出て来る。ゲーテはバイロンの CB' 的反 A'B 的モラリズムの時として陰惨な過激さに抵抗を感じつつも、同族意識を強く感じてゐたものの如くである。

シラーとの交友は、例の往復書簡を含めて余りにも文学史上精神史上著名である。この交友には、当然シラーの側からの敬愛的要素が含まれてゐる。但しこの二人——AB' 的自由精神と C'B 的異教的自然——が交友関係に入る迄には、特にゲーテの側の誤解もあって、長い間のこだはりがあった。元来彼の交友関係を B 要素から見ると〔ABC 表の説明、公理参照〕、CA 族に対しては当然彼の方から active であったらうし、ベッティナー CB', シラー AB' との場合には恐らく彼の方が passive であったと思はれる。ゲーテとシラーが友情をもった交友に入るきっかけになったイエナの自然研究協会での植物のメタモルフォーゼをめぐるエピソードは有名である。AB' 的 Geist と C'B 的 Natur とが、Idee の所在に関して反撥し合ひ、しかし、相互の妥協？ によって新しい話合ひの手がかりが開かれたのであるが、元来友情といふものに 2 種類を考へる事が出来る。①人間形成に特に関はる文化的教化的意味合ひにアクセントのあるもの、②人間そのものの自然に直接関はるもの、である。無論②の面も端的に生理的テムペラメントに関はるのではなくやはりその人間の Ethos に関はるが、①に対して相対的な意味で自然的性格的といふのである。ゲーテとシラーの場合の敬愛関係を混へた交友は前者①にアクセントがあり、エッケルマン、シュタイン夫人、その他 CA' との交友は②に相当する。シラーとの交友は、彼の Bildung にとって無論無視しえない意義深いものに違ひないが、しかしゲーテの人間そのものに密着した意味で見逃す事の出来ない交友は、AB' シラーよりも寧ろシュタイン夫人・エッケルマン・更には CA' 群に属した女性達、そして更には同族的 CB' ベッティナーだったといへる筈である。

○C'B 的郷愁愛の文学——シラーの素朴文学といふ規定は、C'B と CA' との区別に関して不明確であるから採用出来ない。C'B 文学の特徴は、先述チャップリンを構成する要素を手引にして導出する事が出来る。

I. A欠除的存在論的性格——これは、C'B K家ばかりでなく、更にC'B型の哲学者・宗教家に通じる性格である。但しan sichなA欠除〔④〕とfür sichなその自覚〔⑥〕との違ひを無視する事は出来ない。④A欠除に関する自意識を欠いた古典的C'B, ⑥その自意識を備へた現代的C'B, と規定しておく〔但し、上述の如く時代の新旧の別の外に、C'BKとC'B哲学との大ざっぱな相異としては、時代の新旧とは無関係にK→④, 哲学→⑥と考へられるから、古典的、現代的はそれだけの弾力性を備へた形容詞と考へられねばならない。A欠除の説明はチャップリンの項参照〕。

II. B要素の働きから見たC'B文学——

①「現実の模倣としてのC'B的素朴文学」——A欠除のB〔扮装〕意識〔チャップリンの項参照〕からの派生的modiと考へられるC'B的叙事詩文学の事である。多くの場合上述④と結付いてゐる。

②CA'への郷愁愛を中核とするC'B的郷愁愛の文学。

④——牧歌的文学〔④と結合〕

⑥——自伝的文学〔⑥と結合〕

III. 純粹C的自然へのHeimkehrとしてのC'B文学

④古典的C'Bバラッド〔④と結合〕

⑥C'B的抒情詩〔⑥と結合〕

以上のIIとIIIの区別は、④対⑥に無関係である。C'BのB要素に即してC'B文学を考へるとIIの文学が浮び上り、C'BのC要素に即して考へるとIIIの特徴が現はれる。即ち、夫々の文学者におけるEthosの構成因子のアクセントの差異が、以上の如き形体のC'B文学に連つてゐるのである〔BにアクセントをもったC'B文学者には、B要素の働く場面として人間の世界が開かれ、彼は叙事詩の一郷愁愛の作家となり、C要素にアクセントをもったC'B文学者には、文学の舞台として自然の世界が開かれ、彼は抒情詩的一帰郷的作家となる。但し以上は単にアクセントの違ひに過ぎない。又後者の場合でも、それをBによるSeinのstiftenと見做す事は出来るが、CA^NにおけるA→Cの質的轉換を考慮すると、CA'—CA^{'''}へのBによる郷愁愛とCA^N的C'B的CへのHeim-Kehrとは、そのBの働きにおいても区別が可能であるといへる。IIとIIIとの区別は、その事を前提した上での区別である〕。以上の如きII, IIIの夫々において④対⑥が様々に種別を異にする形体の文学を生み出してゐる。

特にIIにおいては、ホメロス・シェクスピアは①, そして①→②のWendepunktに立つのがゲーテである。その際A欠除の自意識に関する④古典的C'B→⑥現代的C'Bの推移が、①素朴文学→②郷愁愛の文学、又②における④牧歌的→⑥自伝的、の推移と平行的である。又⑥の自伝的においても、⑥の濃度によって例へばゲーテの「詩と真実」とマンの「トニオ・クレーゲル」との差異が生じる。以上の事から、古典的C'Bは①中心、現代的C'Bは②中心といふ大筋が理解されよう。古典期ゲーテの②④牧歌的文学〔ヘルマンとドロテア、マイスター、後述〕は、彼が同時にA欠除に関する自意識の点で、④→⑥の過渡的位置を占めてゐる事を物語つてゐる。現代C'Bによる①の文学があるとすれば〔マンの“ワイマールのロッデ”“大公殿下”〕、それはユーモア乃至諷刺文学とならう。又古典的C'Bによる①の文学が特にユーモア・諷刺の

傾向を示してゐるとすれば、其処には⑥の現代的自意識の萌芽を見る事が出来る。ゲーテとマンをさながら異質の文学者の如くに見せるのは、専らA欠除に関する自意識の如何にかかつてゐる。例へば先述の如くマンの“G und T”の訳者がマンを情感文学者に数へてゐるのは、マン自身がA欠除の自覚を備へたBを、Leben に対立する Geist と呼んでゐる事にも責任があるが、A欠除の自意識に関する②対⑥を、C'B 対 AB' と混同してゐるのである。

Ⅱ ①「現実の模倣」による素朴文学——シラーのいふ素朴文学は、チャップリンの扮装術に連る由来をもったものと考へる事が出来る。改めて繰り返へすならば、C'B 道化師のBは、固定したA→Cといふルートに縛られないので、他の一切のタイプへの坐標軸の転換と感情移入の自在さを備へた扮装能力として発現する。その扮装への欲求と能力がそのまま、ホメロス・シェクスピアにおける“現実の模倣”としての“素朴文学”の特徴を生み出すのである。

Kを模倣によって説明するのは、ギリシヤ人に共通するK観である。プラトンは模倣によってKの価値を否認し、アリストテレスは彼の詩学で模倣を介してKの価値を積極的に認めてゐる。Kを認めるか認めないかの別はあるが、いづれもKを模倣によって説明する点では軌を一にしてゐる。

そのアリストテレスによれば、Kをうみ出すのは“模倣の悦び”である。その悦びは、先づ人間が子供の頃から本然に備へてゐる“模倣する悦び”である。“人間は模倣する動物である”といはれるゆえんである。次ぎにその悦びは、模倣されたものに対する悦びである。例へばある対象が、吾々に苦痛を与へるもの〔最も低級な動物や人間の死体の描写〕であっても、それが写實的に模写された場合、吾々はそれに対して悦びを感じる。ドラマは彼によると、K家〔模倣者〕による“行動する人間の模倣”である。そのドラマの媒材は、彼によると律と言葉と調和であるから、恐らくはドラマは特に言葉を中核的媒材とする“行動する人間の写實的模写”といふ事にならう。ところが一方行動する人間の模写は、対象の写實的模写と考へられる前に、ミミックなるおどりににおける人間の模倣と考へる事が出来る。即ち、対象の写實的模写といふ広義の知的認識論的態度とミミックといふより源初的な行動的な態度とのいづれがK的模倣の意味にかなふのであらうか。恐らくは、対象の写實的模写は、物真似の模倣を母胎として其処から派生した modi と考へられるのではないか。そして、そのミミックの模倣の原動力となるのが、その場合A欠除のBなのであるから、従つて逆に、A欠除のBが扮装意識として働く時に初めて、特にK的な模倣とその悦びとが生れ、其処からやがて対象の写實的模写といふ広義の知的認識論的営みが派生するといへるのである。吾々は普通通念として、K的模倣を説く時に例へば絵画における描写対象と描写主体との間に成立つ写實的模写を考へがちである。例へばプラトンが寝台の絵画を説明の例として挙げ、アリストテレスがやはり同様に絵の例を引いてゐるのが、夫れである。しかしK的模倣に関する限り、それは、派生的 modi によってそのものの Substanz としての Wesen を語るといふ誤りを犯す事になる。K的模倣は、絵画的な主観——客観関係としての模倣であるよりも前に、寧ろ物真似の模倣をその Ur-phaenomenon として成立ち、その故に絵画的模写の際にもミミックの模倣の生理的・心理的 Process

は生き残ってゐるのである。

従ってシラーのいふ“現実の模倣”の根源には、当然ミミックにおける俳優の扮装術の悦びがある、といふべきである。

元来模倣する悦びは確にアリストテレスのいふやうに、人間そのものに備はった悦びであるに違ひないが、しかし特にK的な模倣の一つとしては、特定のA→Cといふ一本道のコースに縛られない。A欠除のBによる自由な広さを備へた模倣の悦びが考へられねばならない。それが、素朴文学の原動的な Ur-phaenomenon である C/B 的扮装術的模倣である。従って、文学者としてのオメロス・シェクスピア・ゲーテ、更には現代的 C/B 作家達の俳優的素質並びに嗜好といふ事が、当然考へられる事である〔シェクスピアは実際に俳優であり又ゲーテに関しては彼がその素質と嗜好を備へてゐた事は知られてゐる。キエルケゴールの場合は後述〕。

シラーにいはせると、例へばシェクスピアの作品の一つの特徴は、作者が常に作品の背後に隠れて姿を現はさない所にある。作者は作品に登場する多種多様なタイプの人物そのものに分化的化身をなしとげるのである。従って、作者の分化的化身によって生気を吹き込まれた登場人物は、完全にそれ自身としての有機的統一を備へた自律的個性〔典型〕として作品に登場する。それは外からレッテルを貼られた類型的人物〔シラーのドラマには時としてこの種の人物が目立つ〕ではなく、内的有機的統一を備へた・完全に内部から生かされたタイプとして現はれる。これは、作者の登場人物へのA欠除のB的化身が完全な場合に見られる事であつて、其処では観念的類型的人物像が、作者の否 Idee のあやつり人形として現はれる余地はない。

ある人間の性格は、その人間の言動の内容に現はれるのではなく、寧ろ時としてその内容に対して極端な場合には相反的な性質さへもちうる、彼の言動を貫く Innere Form=生のリズムに現はれる、といへる。従って例へばけちな人間は、ある時は当然彼の言動の内容においてけちであり、又ある時は同じくある言動の内容において気前がよく、而もそのいずれの言動をも一貫して貫く彼の生のリズムにおいてけちなのである。言動の内容と生のリズムとが偶々相反的な場合に、その生のリズムの在り家は、より明確に浮び上る。即ち、言動の内容においては常に正しく親切な人が、にも拘らず常に人に敬遠されたり嫌はれたりする場合がある。それは、親切な言動を貫く彼の生のリズムに現はれる彼が、その親切を裏切つてゐるからである。ある場合には、言動の当事者がその内容に自らの在り家を見ようとし、第三者は無意識に彼の生のリズムに彼の性格を感じようとする事がある。その際恐らくは第三者の会得の仕方の方が、本人の自覚よりも正しいといへよう。しかし、ある場合には、上の場合とは逆に、言動の内容からする第三者の理解のために、その人間の本性が会得されないままでゐる事も当然ありうる事である。

兎も角も、人間を開示するのは、決して彼の言動の内容ではなく、その都度一定の内容を備へた言動を貫く Innere Form としての生のリズムなのである。

シラーの言ふ素朴文学に現はれる典型としての人物は、作者によっていはばその生のリズムが把へられ、其処からして彼の一切のその都度の時としては矛盾し合ふ内容をもつ言動がつむ

ぎ出されて来るのである。従って作者はその人物の外的説明は何一つ与へずに、而も人物は内部から生かされて、無意味極はまるやうなささいな言動の隅々に至る迄、その人物の中核的な生のリズムに貫かれてゐるのである。吾々はよくある人間を、言葉や觀念に至る以前のある内的直観で把へてをり、而もその人間の特性は、意味をもった言動におけるよりも寧ろ却って意味もないやうな一寸した手振りや又一寸した身振りに、より純粹に現はれるといへる。例へば絵画において、デッサンが大作より以上に作家の個性を直かに伝へる事が多いのも、上述の事と歩調をそろへてゐるといへよう。

以上のやうな人間の把へ方を、特に鋭く可能にさせるのが、A 欠除の B の働きである。例へばシェクスピアの作品の人間関係は、以上の如くして把へられた生きたタイプである。

更に C'B 素朴文学では、作品を動かすのは、例へば AB' 情感文学における如く作者の意志〔作者の Idee への Wille〕ではなく、以上の如くに化身的に把へられた登場人物相互の乃至人物と状況のからみ合ひである事が、注目される。其処では、以上の如き相互交渉乃至からみ合ひが、劇の進行をうながし、そしてその進行それ自身の帰結として劇の結末が生れる。だから作者の geistig な Idee への目的意志が劇を導く AB' 情感文学とは違って、その進行と帰結とは、登場人物の性格の又性格相互の又状況とのからみ合ひのその都度の色調そのものによって、ある時は悲劇的ある時は喜劇的そして又ある時は両者の混同体として、導き出される。若しシラーに倣って、人物又人物相互の又人物と状況とのからみ合ひそれ自身を、“現実”と呼ぶならば、其処では、その現実それ自身の意志が、劇の全てを支配するといへる。作者の〔Idee〕への意志が劇を支配するのではない。AB' 情感文学では、劇を支配するのは作者自身の〔Idee〕への意志であり、C'B 素朴文学では、劇を支配するのは現実それ自身の意志である。

吾々が世界に対して、A'B 的に又 AB' 的に又 CA' 的に目的・意味・統一を求めるのに対して、その現実の意志は恐らくは常に吾々のその意志の意表をつく現はれ方をし、吾々のそれらの意図を途惑ひさせる結末を示すといへる。露骨にいふならば、その意表ぶりは、吾々の求める目的・意味・統一への意志に対して単に偶然といふ丈けではなく、その意志に対して逆行的・敵対的な意志の仕業といふべきであらう。即ち、吾々が吾々の意志によって架構しようとする目的・意味・統一に代って、それを否定するノンセンス・背理・支離滅裂・不条理が、その現実そのものの意志の現はれとして姿をあらはすのである。従って、その際以上の如きノンセンス・背理・不条理たる現実の意志こそ、真に現実の名に相應しい ousia であって、吾々が時としてこれこそ現実なりと思ひこむ所の目的・意味・統一への吾々の意志によって規整された世界は、その ousia の吾々の意志にさからふ怖ろしさ・不愉快さから目をそむけるために吾々が解釈として架構した幻影の城でしかない、とニーチェならばいふであらう。

素朴文学を支配する現実の意志が上の如きものであるとすれば、その文学は、ノンセンス・背理・不条理に担はれた悲劇と喜劇の混合体として、そして、その混合体は結局の所は悲劇として、姿を現はすといへよう。

ニーチェは言う、“在るものを在るがままに確認する事は、「かくあるべきだ」といふより

も、名状しがたく高く厳肅な事である”〔力への意志、333〕。悲劇において^{〇〇}べしを主張するのは、AB' 的目的意志である。そして又悲劇の顔落態があるとすれば、其処で^{〇〇}べしを言ふのは、A'B 的 Sitte 意志である。詩的正義はその露骨な現はれである。ところがニーチエにいはせると、その^{〇〇}べし意志に反してそれを否定する“在るがまま”の現実の中に現実そのものの意志を“確認”させるのが、悲劇である。そしてその現実の意志の確認を介して、吾々は悲劇からいはずば“形而上学的慰籍”ともいふべきカタルシスを受け取るのである。

更に考へられる事は、C'B 的素朴文学的ドラマのゲネラルバスの性格を担った・作者のA欠除的存在論的性格〔但し単に an sich な〕の投影といふ事である。即ち、その素朴文学では、C'B 作者の脱存的 Abgeschiedenheit が、丁度多声音楽でのゲネラルバスに等しい意味を担って投影され、そしてそれが、劇全体を蔽ふ雰囲気として劇そのものを担ひ導くのである。

Ⅱ ②. C'B 的郷愁愛の文学、④牧歌的⑩自伝的文学——C'B 作家におけるA欠除のBは、上述の如く各坐標軸への自由な扮装意識として働くと同時に、やがてそのBは、A欠除の bodenlos な心もとなさから、人間=Leben への郷愁意識として作用するやうになる。A欠除の自意識の度合ひが、前者から後者へのB要素の収斂となって現はれるのである。

元来CB族は、A欠除といふ大前提をもったタイプである。それは、彼がある意味で極めて非人間的な乃至は人間失格的なタイプである事の意である。そのA欠除の自覚は、彼をして自らに欠けた充実した人間的なもの〔Leben に満ちたものとしての夫れ、geistig な意味での夫れではない〕を求めさせる。即ち、CB族にとって、最も充実したLebenはA要素の最も濃厚なタイプに求められる。しかし、Bと結付いたA要素は、AB' にとってと同様にCB族にとっても悪しき自然であるから、そのA要素は、当然Bを欠いたCA族の中に求められる。すると当然CA' 群に、純粹で汚れないLebenの充実が求められる訳である。

AB' がCB' を理想像としながらIdeeへの憧憬を追ふのに対して、C'Bは、彼にとってのLebenの原現象たるCA' 群への郷愁を介してSeinへのHeimkehrを求める。

以上の事から、C'Bにおける⑥的自意識の度合ひと共に、Ⅱ①の素朴文学がⅡ②④の牧歌的文学へと収斂されるのは自然の傾きといへる。ゲーテのイフィゲーニエ・マイスター・ヘルマンとドロテア・ファウスト第2部 etc は、その牧歌的文学への収斂が生んだ文学である〔但しゲーテのA欠除の自意識の中間的な度合ひが、牧歌的なものへの郷愁を同時に、当時のギリシヤ観であったC'A 的ギリシヤへの昇華と結合させてゐる—グレートヒエンとヘレナ〕。

その牧歌的文学には、Lebenの原形を求める働きを介して、当然、A欠除に関する作者の自意識〔従って作者自身の姿〕が、Ⅱ①の素朴文学におけるよりもより濃い影を落してゐるといへる。その牧歌的文学に更により確然たる⑥意識が加はると、其処に生れるのが、⑩の自伝的文学である。

マンはC'B文学の特徴の一つを自伝的文学に見て、それを更にLiebe zu sich selbstといふ事に基づけてゐるが、しかしそれは、A欠除の自意識に関して古典と現代の中間に位置するゲーテとそしてゲーテよりはややその⑥意識の濃いトルストイ〔彼はゲーテに1世紀おくれた19C人

である。従って彼にその自意識の影がゲーテより濃厚であるのは当然であるといへる。彼のザンゲ録や奇妙に道徳的なK論は、その彼の自意識の Schuld から生み出されたものである〕に就いてそのまま該当する事である。なほ下ってその Selbst に、A欠除の自意識が付け加はる場合には、その自己愛には、A欠除の Schuld・bodenlos な不安〔同様に、先述した Schwermut, Schmerz〕が纏綿し、その愛は苦渋の色を濃くするものとならざるをえない。従ってより現代的な C'B では、寧ろ、A欠除の自覚を発端とする CA' への郷愁愛が、古典的な C'B における自己愛に代って、自伝的文学を生む働きを引受けるといふべきである。その自伝的文学が自伝文学ではなく自伝的といはれるのは、丁度Ⅱ①④の牧歌的文学が、牧歌文学ではなく牧歌的といはれる〔その点では AB' 文学における牧歌文学の意味付けと同様である〕のと等しい意味においてである。その事をマンは次のやうにいふ〔GuT 邦訳20頁〕，“しかしゲーテ同様トルストイは一卷のザンゲ録を著したの故をもって自叙伝作家であるのではない。「レフ・トルストイの芸術作品は結局の所五十年間続けて書かれた龐大な日記，無限の詳細な告白に外ならない」といふロシアの大批評家メレシエーフの言によっても明かであるやうに，トルストイは青年の頃の「幼年時代と少年時代」からその生涯の全作品を通じて，全くの自叙伝作家だった。メレシエーフは更に続ける。「その私生活いや更にその最も秘密な面をトルストイ程にあげすけな正直さで暴露した作家は，恐らく古今未曾有であらう」”。さういふマン自身の“トニオ・クレーゲル”も亦，そしてリルケの“マルテ”も亦，同様に⑥意識と郷愁愛による自伝的文学の実例である。但し此処でも，⑥意識の度合ひの相異が，ゲーテの“詩と真実”とマンの“トニオ・クレーゲル”の違いを生み出してゐるのである。即ち，⑥意識の度合ひと共に，自己愛から郷愁愛へと収斂した自伝的文学が生れ，同時にその自己愛にはその⑥意識への自覚・反省から生れる疑問・呪ひ・Schwermut・Schuld etc が影を落し，やがては例へばリルケの“マルテ”におけるやうにその自覚乃至反省をめぐる問題が自己愛を超えて主題化するのである。

ゲーテは，ホメロス・シェクスピアに比較すると⑥の芽生えを感じさせ，しかし，現代的 C'B であるマンやリルケに較べるとその⑥意識の乏しさが目立ち，その場合にはゲーテは古典的 C'B に接近する。

マン・リルケ・トラークル，更には，ゴーギャン・セザンヌ・ロダン etc は，恐らくは夫々の度合ひで⑥意識を備へた現代 C'B K家といへよう。

なほ先述の如く，哲学者・宗教家の場合には当然その発端においてその⑥意識が要求されるので，時代的には古い C'B ソクラテスの場合であっても，その点では恐らく現代 C'B 的に等しい性格を備へてゐると考へる事が出来る。

Ⅲ. バラッド並びに抒情詩としての C'B 文学——Ⅱが C'B の B に基いた人間中心の物語り文学であるのに対して，このⅢは C'B の C に基く詩文学である。

中国の壺とギリシヤの壺を比較して，H. Read はその両者の texture〔肌理〕の相異に就いて語つてゐる。彼はそれを感じ覚的な問題として把へてゐるが，texture の源を普通さう考へられるK的主体ではなく，texture=Element として Sein と考へる事が可能である。Sein の

Lichtung によって lichten された texture をもつ作品とそれをもたない作品とがある。即ち、以上の意味において、texture をもつ作品とそれをもたない作品がある。Read の挙げた中国の壺とギリシヤの壺との違いは、叙上の意味における texture の有無にある。例へばセザンヌの絵には texture があり、ピカソの絵にはそれが欠けてゐる。而もセザンヌは、自らの作品並びに絵画一般に就いて語る時には、その texture に背を向けて専ら Express [“美学” 38 所載拙稿参照] のモメントにおいて語ってゐる。しかし、セザンヌの絵の魅力の大きな要素は、上の意味での texture にある。

芭蕉の句は texture に溢れ、蕪村の句はそれを欠いてゐる。

C'B 的バラッド並びに抒情詩の特徴は、Sein の Darstellen に基く texture にある。それはバラッドとして人間についてうたはれる場合にも、自然についてうたはれる場合にも、同様に通じてさういはれる事である。その事はなほ、先述した C'B 的自然 [シラーの自然観並びに C'B 的自然, 参照] の問題並びに K 的表現の問題と共に詳述されねばならないが、此処では省略しておく。

○C'B 対 CB'

C'B・CB' 共に反俗 group の構成員として世俗 group の中核たる A'B に対して反撥的である。而も C'B は A'B の相補性たる CA' に郷愁愛を抱き、CB' は C'A に郷愁的敬愛を持つ。其処から、C'B の世間に対するフモリスティッシュな Ironie, CB' の憤激的諷刺的 Ironie が生れる。同時に又其処から、C'B の retreatism 的脱俗, CB' の破壊的破滅的 rebellion 的超俗が生れる。C'B の脱俗は比喩的にいへば浮浪者の——乞食僧的であり、CB' の超俗は賭博者の犯罪者の——予言者的である [C'B ゴーギャン, キエルケゴール, CB' ゴッホ, ニーチェ]。

CA' に対する両者の態度から見ると、先づ CB' は現実の CA' に対しては極めて非寛容でありながら、K CA' [牧歌 K] に対しては比較的寛容である。C'B は反対に、現実の CA' に対してはその郷愁愛によって当然寛容であるが、K CA' に対しては逆に非寛容である。

C'B の A 欠除は純粹 C 的 Sein の明るさへと方向づけられてゐる。それに対して、CB' の A 欠除は、Sein への方向と共に反 A'B 的 Idee [A'B の反 A が時として向上的理想主義であるのに対して、CB' の Idee が反 A'B 的である事から、CB' の破壊的破滅的モラリズムが生れる] における^〇狂熱に連つてゐる。CB' を予言者たらしめると同時に自殺型破滅型たらしめるゆえんの一つは、その反 A'B 的狂熱的モラリズムの破壊的破滅的性格である。そのモラリズムは、A'B 的モラルのもつ功利性・偽善性に対する果敢で激烈な、しかし結局の所不可抗的絶望的な敵対に連つてゐる。

現実の生活面での対 A'B 的超俗的敵対は、恐らくは常に多勢に無勢的な敗北に終るのがおちである。吾々は通常敗北を恐れるが故に、A'B 的 Norm に対する遠慮・配慮・妥協を余儀なくされるのであるが、しかし、CB' の反 A'B はその敗北の予測によって自らを曲げる事がへんじない反 A'B である。彼は敢へて果敢な絶望的な戦ひを挑み、そして結局破滅し敗北する。その破滅を補填するのは、反 A'B 的な K・哲学・宗教である。この世界でならば、彼

は先づ思ひのままに彼の反 A'B 的モラリズムを徹底させ、人間の限界状況に向って果敢な思想的冒険を挑み、一切の妥協的配慮を排除して貫く徹底的なモラリズムによって、人間の心魂に徹する偉大な形而上学の世界を創建するであらう。

しかしそれが結局のところ彼にとってあく迄補填の世界でしかない事は、CB' にとっていかんともしがたい事といはねばならない。CB' のモラリズムは、最後の所でその補填の世界を乗り越えて現実の反 A'B 的モラリズムの実践者たらねばやまないのである。

その反 A'B 的実践的破壊的モラリズムが、而も現実の A'B 的配慮の権力世界で、A'B を支配し指導するといふ稀有な場合がないわけではない。乱世・非常時・戦国時代に現はれる指導者が夫れである。彼の反 A'B 的モラリズムの果敢さと敢為的な理想主義的使命感が、彼を乱世の Führer にのし上がらせ、そして乱世が切り開かれると共にあるひはその途次で、彼は必ずや A'B 的良識との衝突によって失脚するに違ひないのである〔信長、ヒットラー〕。

更には、彼が若しも K・哲学・宗教といふ CB' にとっての安全弁である世界に落付いたとしても、彼は結局自殺型・分裂型・破滅型たる事をまぬがれえないといへる。彼を破滅させる第2の要因は、C'B と共にもつ Sein と AB' と共にもつ形而上学的 Idee〔Welt〕との間の窮極の分裂である。C'B の脱存は、世界から Sein への Verfall といふ方向を保つ故に、兎も角も A' 欠除の暗さから Sein の Lichtung への道が開かれてあるといへる。それに反して、CB' は Sein と Idee との Innigkeit の只中に立つ事によって、その二つのものの窮極の Streit によって引き裂かれ、引き裂かれる事によって分裂してしまはねばならない。換言すれば、彼は CB 族として C'B と共有する窮極の Boden たる Sein さへもを、Idee〔Welt〕の形で把へ直さねばすまないのである。CB' ゴッホ・ヘルダーリンによって把へられた Sein は、精神と Idee の光りによって滲透され、精神の焰によって焼かれてゐる。其処には Sein への道が開かれると同時に、それに背を向ける Idee への geistig な狂熱が、Sein を突き破る如き燃え上り方で燃えてゐる。ゴッホの絵にきらめく星や太陽や風景は、燃え上る自然としてではなく、精神—Idee の狂熱に滲透された Idee の事例である。Sein は精神—Idee への上昇を追ひ求める意志に向って自己放棄を命じてゐる。Geist による Sein の包超の試みは、結局人を救ひがたい分裂へと追ひやるのである。

CB' が自らの分裂を逸れる道として、C'A への郷愁的敬愛がある。彼は C'A のピタゴラス的ハルモニアの世界像乃至現実の人間に向って、自らの分裂的破局を防ぐための無意識の支援を求める。ゴッホ→テオ、ヘルダーリン→ゴンタルド夫人、奇異な例としては、マルクス→エンゲルスが夫れである。又世界像としての場合には、K・哲学・宗教の世界で CB' が殊更に C'A 的沈静を目指す事に示されてゐる。例へば文学では、生地の CB' 的激烈さを露骨に示す B 過剰の息の短いテンポを示す文体と殊更に C'A 的沈静並びに簡潔を目指しつつ而も何処かにある種の破調を示す文体とが考へられる。前者はランボー、ヘルダーリン、後者はボウ、芥川龍之介がその例である。なほ CA''' との似而非の関係における天才的タイプとしての CB' に関して先述〔CA''' 的天才 52 頁〕の通りである。

付]

○キエルケゴールにおけるCA'への郷愁愛——彼の言ふ美的段階〔以下段階 Stufe の代りにSの字を使う〕とは、CA'的なものの一切を指してゐる。CA'的K、更には非CA' or 反CA'的Kも、それがUr-PoesieとしてCA'的なものに否定的にせよ関わりをもつ故に、それは結局美的Sに入れられるのである。更にはLebenの直接性に担はれた青春・恋愛・快樂も、CA'的な事柄として、美的Sに属してゐる。更にはA'B的Situationとのからみ合ひのもとに、Seelischな又triebartigな生き方をしてゐるCA'タイプの全ての老若男女も亦、美的Sに入れられる。この人達は、どれ程内省をしてゐるやうに見えても、geistigなReflexionを知らない。其処には、A'B的Situationとのからみ合ひにおける様々な似而非内省があるだけで、自己自身を自らのReflexionにさらず営みを彼等は知らない、とキエルケゴールは言ふ。従つて、彼等の自称する内省とは、単にseelisch, triebartigな、A'B的Situationとのからみ合ひでの、つまづき・こだはり・工夫・思案の域を越えないのである。

そして恐らくは彼の許婚者のレギーネ・オルセンは、現実のCA'のエッセンスとも言ふべき女性として、彼の目からすれば、当然美的Sに属した女性だったと言へよう。

CA'的直接性によって生きる事は、その都度の空ろな刹那々々のはかない幻影を追って生る事である。それは丁度森の中で青い鳥を追ひかけて道を失ふに似た自己喪失的な生き方を意味する。美的段階での生の充満は、無精神的な才氣と生理的Reizの如何にかかつてゐる。其処では、精神を欠いたseelisch-triebartigな直接性が、A'B的Situationとのからみ合ひの上で生の意味・価値を決定する。だから其処にはA'B的Situationの如何による失望はあつても、自己自身に関する反省的〔内省的〕絶望を知らないのんきさと無邪気さと愚かしさが支配してゐる。A'B的Situationとのからみ合ひを別とすれば、時間的に見ても、生理的なおとろへに襲はれる以外には、Lebenに満ちあふれてゐる限り、其処にはgeistigな絶望はないとさへ言へよう。自分自身が如何に絶望的な状態〔絶望に値する状態〕にあるかといふ事に少しも気付かぬ程に絶望的な状態にあるのが美的S的人間である〔死に至る病参照〕。

その美的Sに対してアレカ・コレカの質的弁証法によってへだてられてゐる自らの場所を、彼は単独者の例外者の宗教的Sと名付ける。これはA欠除的C'Bの自覚の住む場所である。但し、特に區別してその中間に倫理的Sが入られる場合には、AB'的モラリズムが指されてゐる。従つて厳密には、CA'的美的S、AB'的倫理的S、C'B的宗教的S、といふ3つの段階が考へられてゐる。

彼の言ふ宗教的Sは、その宗教の内容の如何を別にすれば、一切の一般者のなもの〔A'B的Norm, AB'的Idee, CA'的Leben, etc〕からverfallenした・怖れとおののきとしての不安・Schuldに担はれた・例外者のSといふ在り方をその前提としてゐるが、これはC'B的A欠除を示す規定である〔C'Bとの相異は以下参照〕。

彼は自らの在り方を、その宗教的例外者のSに置きつつ、而も自分が宗教的著作の中に常に美的著作を混へて来た事を認めて次のやうに言ふ〔吾が著作活動の視点、第一篇A〕。即ち、“著者が美的作家であるか、それとも宗教的作家であるかといふ全著作活動”における両義性又は二義性”といふ題目〔1〕は下記の註のしるし〕の中で、その註において、“何の話であるかを判つてもらふために、著書の標題を此処に挙げておく。第1期〔美的著書〕—アレカ・コレカ・怖れと慄き・反覆・不安の概念・哲学断片序・人生行路の諸段階、以上の外に次々に公にされた18の教化的講話がある。第2期—哲学断片、後記。第3期〔純キリスト教的著作〕—種々なる精神における教化的講話・愛について・キリスト教の修練〔日本訳、イエスの招き・角川文庫〕、外に美的小論文“ある女優の生活の危機”，と言ひ、なほその織り混ぜが美的著作から宗教的著作への変化として現はれたのではなく、常にその2種類が同時並存・混在をしてゐる事が指摘されてゐる。その彼の著作上のZweideutigkeitを説明するのに、彼はその美的著作が一種の詐術として生れたと言つてゐる。同じ本の5“制作活動全体から眺めるとすべての美的制作は、一つの詐術であり、しかも一風変つた詐術である事”なる題目のもとに、その事は説かれてゐる。なほそれらの美的著作が仮名のもとに出された理由も其処にあると言はれてゐる。彼の説明によると、彼が語りかけようとする相手は美的S的に生きてをり、例へば彼等が反美的S的に即ちキリスト教的に生きて

ある、と自認してゐる場合でも、結局彼等は、美的領域内でキリスト教を美的にしか受取ってゐない人達である。だから、その人達を相手に本当にキリスト教的宗教的Sを伝達するためには、先づ自分の方から相手の美的領域へと踏みこんで行く事によって、其処からアレカ・コレカの決断に迄相手を引っぱって行かねばならない。その踏みこみが、彼の美的著作となって現はれたのであるが、但し其処でも常に当然そのCA' 的美的仮装を通して宗教的Sへの方向が暗示されてゐる。又その踏みこみとしての詐術に関して、彼は幼い頃から、已にA欠除のSchwermutと共にそのBによる仮装の才が、自らの本性に備はつてゐたと述べてゐる。そのSchwermutは直接性の時期である青春の時代にも彼を絶望的なVerfallの状態に釘づけしてゐたが、又同時に仮装の才は常に自らのものではないCA' 的Lebenの中で彼を見事な演技家たらしめてゐた、と彼は其処で述べてゐる。

以上述べてゐる所は、先述のA欠除並びにそのA欠除に基づくB要素の働きの一例と見做す事が出来る。ところが一端彼の言を離れて考へて見ると、彼の著作上のその両義性は、彼のどの時期のどの著作の内部にも備はる両義性に由来すると考へる事が可能である。即ち、彼の宗教的著作の中にも美的性格が、そして美的著作にも当然宗教的方向が含まれてゐると見る事が出来る筈である。すると彼の著作上の両義性は、当然彼自身の在り方の美的Sと宗教的SとのZweideutigkeitに根ざすものと考へられるのである。

彼自身の言によれば、彼はあく迄宗教的Sに立ち、其処から一種の詐術として彼の美的著作が生れたのであるが、若しその扮装術を先述の如くCA' への郷愁愛に収斂させて考へると〔といふのは、彼は当然A欠除に関する自意識を備へたCBであるから、先述の如く③→⑥=Ⅱ①→Ⅱ②といふ方式の系として、さう考へる事は許される筈である〕、彼の宗教的著作そのものの内部には当然彼自身のCA' への郷愁愛のモメントが含まれてゐる事、そして彼が宗教的Sと美的Sとの切点に立ちつつ、一方では宗教的Sを目指しつつ〔A欠除の自覚の深化〕、同時に他方では常に美的Sへの郷愁愛を抱いてゐた事が、理解されよう。換言すれば、彼のA欠除の自覚の深化としての宗教性は、その中にCA' 的美的Sへの郷愁愛を含み、又彼のCA' 的美的性格〔それがあつたとすれば〕は常にその方向として直接CA' 的なものの否定に向つてゐたと言へる。

〔A欠除のBにアクセント〔先述③=Ⅱ①〕—彼の言ふ詐術—宗教的Sから美的Sへへの仮装的演技
〔CA' への郷愁愛にアクセント〔⑥=Ⅱ②〕—^{A欠除の自覚}—^{識と郷愁愛}—宗教的Sと美的Sとの切点的Zweideutigkeit

その郷愁愛的Zweideutigkeitの在り方は、丁度彼が“死に至る病”でふれてゐる“宗教的詩人”を連想させる在り方である。

元来彼は詩人一般の在り方をCA' 的に直接性的なPoesieの範囲にみてゐる。ところがそのCA' 的直接性的Poesieを否定する所から始められる詩もありうる。それはCA' 的A'B' 的直接性的Lebenの断念から生れる詩である。ある種の宗教・哲学が先づ日常的直接性の否定・断念から始まるやうに、詩そのものにも、詩一般の母胎と考へられるCA' 的Poesie〔的Leben〕の否定・断念から始められる詩がある。例へば詩の嘆き・哀しみは、CA' 的直接性的Leidenschaftに由来すると同時に、その直接性そのものの否定・断念に由来するものである事がありうる。キエルケゴールはその断念を“無限断念”と呼び、“怖れと慄き”の中では、“信仰の騎士”に連るその前段階の“諦念の騎士”として具象化を試みてゐる。その無限断念の諦念の騎士に詩の母胎を見たのが、例へばリルケであり、トラークルである。例へばリルケは、2元的Communicationの直接的Lebenの断念から彼の詩を始める〔マルテ・若き詩人に宛てた手紙〕。その種の詩人は、キエルケゴールによれば、その断念と諦念を深める事によって、当然宗教詩人になる〔リルケの場合、時禱詩集・マルテetc〕。ところが其処迄来ると、彼はCA' 的なものの完全な否定としての単独者の例外者の断絶的宗教的Sに接する場所に迄、来たわけである。ところが神は更に、宗教的詩人に向つて、其処になほ詩そのもののUr-Poesieとして否定的詩美を匂はせてゐる反CA' 的CA' Poesieの自愛性を完全に捨て去る事を命じる筈である。即ち、彼は彼のCA' 的なものの否定の底にある絶望の甘さ〔これがなくなれば、彼の言葉は詩ではなく

なる。そしてこれも当然結局 CA' 的だと彼は見る。即ち、反 CA' 的な CA' Poesie である〕に執着する直接性的自己愛を完全に捨て去る事〔従って彼の詩そのものを捨て去る事〕によってのみ、彼のしかあるべき方向が完全なものになる事を意識しないわけにはゆかない。しかし、彼は詩人である限り、CA' 否定の極に生れる詩美に執着して、絶望的に痛切な反 CA' 的な CA' Poesie を捨て去る事が出来ない。キエルケゴールはその種の詩人を、不思議な夜鶯に喩へる。即ち、彼詩人は、CA' Poesie=CA' Leben の断念による絶望が深まれば深まる程に、愈々世にも麗はしい音色で啼く夜鶯である。絶望の深化は当然、反 CA' 的な宗教的 S を目指し、しかも麗はしい音色は罪の自愛である CA' 的 Leben 的 Poesie を意味する。だから彼は、一方では反 CA' 的宗教的 S を目指しつつ而も、他方では CA' 的 Poesie の直接性への連りを否定的な形にせよ内包する詩人である。即ち、宗教的 S への方向を維持しつつ、同時に距離の愛としての郷愁愛を CA' に向けてゐる宗教的詩人である。キエルケゴールの著作上の Zweideutigkeit を、彼の詐術であるよりは、寧ろ彼自身のもつ Zweideutigkeit に由来すると考へる事が出来るとするならば、同時にその彼の Zweideutigkeit は、彼が CA' への郷愁愛を抱いてゐた C'B 的宗教詩人に外ならなかった事に由来すると考へる事が出来る。

彼は、例外者の断絶に関して次のやうに言ふ〔人生行路の諸段階、第2部、14〕，“……結局、断絶が起る。その時なほも私は切望する——彼が依然として人生を愛さん事を。若し彼が断絶によって人生の敵になれば、彼は正しい例外者ではない”〔この事は C'B と CB' との区別とも言へる〕。此処では断絶によって決定的に失はれた筈の CA' 的 Leben への郷愁愛が、寧ろ断絶にとって積極的なつきものとして語られてゐる。更に彼は次のやうにも言ふ，“彼は本当に愛した。全心をこめて結婚生活をした。それなのに、それから身を振りはなさねばならぬといふ事は、彼にとって実に苦しい事にちがひない。実際それは恋人同志が引き離されるよりもはるかに苦しいのである。だが彼は絶望の感激において、なほも神がこの名誉回復をしてくれるといふ事の中に歓びを見出す。かくて彼は、自ら責任をおふ。そして神の摂理に恵まれた者と共に、そのやり方がただ智慧と正義とである事を証しする”。以上の2つの引用文から、彼のレギーネ・オルセンからの離脱と郷愁愛とが、理解出来る。又上述の CA' の文字を、そのままレギーネ・オルセンといふ言葉におきかへる事が出来、そしてその事によって、彼とレギーネとの関係はそのまま浮び上ると言へる。

彼はその日記で言ふ〔1843, 5, 17〕，“信仰があつたら、彼女のもとに留つたであらう”。彼には信仰がなく、信仰への方向があつた。その信仰への方向が、彼を断絶の例外者へと馳り立て、レギーネから引き離し、同時に其処からレギーネ並びにその他の人には理解されず許されもしない距離の愛を、かはる事なくレギーネに向はせたのである。

彼の言ふ詐術を、そのまま認めると、彼は信仰をもつものとして宗教的 S〔A 欠除の自覚の深化としての〕に立ってゐた事になる。若し彼の詐術を、彼の CA' への郷愁愛に収斂させて考へる事が許されたとすれば、彼は一種の宗教的詩人として、彼のいふ宗教的 S と美的 S との切点に立ってゐた事になる。

先述した C'B の分類を参考にすると、彼の言に従へば、彼は①—Ⅱ①的 C'B 的宗教的人間であり、郷愁愛にアクセントをおけば、彼は①—Ⅱ②的宗教的詩人となる。勿論その2つは、彼を全く異質のものたらしめる把へ方ではなく、只単に同質的な構成要素の上に立って、そのいづれにアクセントを置くかの相異である。しかしそのいづれが彼の Wesen により密着した把へ方であるかは、彼自身の言明にも拘らず、否寧ろ彼自身の言明の故に愈々問題だと言へる。只先述の方式をふりかへるならば、彼は当然 A 欠除の自覚の点で自意識的現代 C'B 的である〔彼のその自覚の、その年代に珍しい徹底振りが、彼を後の実存哲学の先蹤たらしめてゐるのである〕。従って、当然先述の①—Ⅱ②なる方式の系に該当すると言へる。すると彼の Wesen の Ort も、①—Ⅱ②〔or Ⅱ②〕的 C'B 的宗教詩人と考へる方が一層適切と言へよう。

彼は、宗教的 S と美的 S とを非連続的にアレカ・コレカの質的弁証法で断ち切つてゐる。だからその2つの間に連続的なアレモ・コレモの橋渡しはありえない〔彼は、その調和的統一を認める弁証法を、量的弁証法と名付け、その弁証法そのものの美的 S 的性格を指摘してゐる〕。だから、そのアレカ・コレ

カ⁰の切点に立つ事は、極めて危険なある場合には自己喪失的な Zweideutigkeit [曖昧さの意味に連る事に注意、即ち、Anstößigkeit] に身をさらす事を意味する。それは悪くすれば、全く空疎な自己分裂的自己喪失的なそして又ある場合には文字通りいかがはしい妥協の危険に身をさらす事を意味する。そして此処にも、C'B と A'B との一種の似而非の関係が見られるとも言へよう。シンラン上人の“非僧非俗”といふ語も、この危険な Zweideutigkeit に身をさらさざるをえない宗教的詩人としての宗教人の語と解する事が出来るかも知れない。その危険な“断絶と郷愁愛”との Zweideutigkeit が、C'B キエルケゴールの CA' レギーネへの接近と離脱の謎を解く一つの鍵だと言へるわけである。

[以上の項目は、“美学 2—5”の“詩人的存在”におけるものと重複する部分の多い事をことわっておく]

Ⅲ. 人間の偉大・高貴と C 要素——公理への註

人間の偉大さは、マンに従へば、彼が何をなしうるか、さもなくば、彼が何であるか、の 2 つの異なる観点から量る事が出来る。その事をジムメルは次のやうにいふ [フラグメンテ 100] “客観的標準で計った人間の最高の営みは、また彼の人格そのものが、その力、独自性、完成の頂点に達した点、であるといふのは全くの架空の予定調和である。営みのカーヴの高さ [何処までも客観的な意味における] と存在のカーヴの高さとは、決して一致するものではない。素よりこれを信じるのは、主観的価値と客観的価値との関係に関する極めて深い形而上学的な確信に基く事であらう”。勿論マンのいふ“何であるか”とジムメルの“主観的価値”とは同義語ではない。特に後者が一種の⁰人格的価値と考へられてゐる限り、それは⁰存在の⁰カーヴといふ言葉でパラフレイズされる事は危険である。従って、人格的価値 [並びに身分価値、後述] を間に挟んで、差し当って以下の如く区別する事にしたい。

何をなしうるか——営みのカーヴ——客観的価値——→⁰業績価値

何であるか——存在のカーヴ——主観的価値——→⁰存在価値

世俗 group と反俗 group における業績価値と存在価値の具体的に異なる現はれから、人間の偉大・高貴を考へてみる。

①世俗的偉大・高貴——業績価値によって量られるのが、世俗的偉大・高貴である。ある人間の業績は、利己的権力意志を原因とし社会的効用性を結果としかつその合成から成るものである。そして、前者に特にアクセントが附される時に偉大、後者に附される時に高貴となる。業績はある物的財を介して客観的評価を獲得し、その業績価値によって人間の偉大・高貴が決定されるのである。社会的地位・財産、又不可視的財としての社会的名声が、その際の業績価値である。

封建制度の遺産である血統的価値——身分——といふ高貴性は、以上の世俗的高貴の中で一見“何であるか”の存在価値に似てゐる。それはしかし、上述の業績価値の固定化世襲化によって生れたものである。恐らくは世俗的業績価値を挟んでその原因である A'B 的業績とその結果たる CA' 的身分が考へられる。CA' 的身分がその原因である A'B 的権力意志を喪失すれば、ある種の高貴さは増し、そしてやがては“売り家と唐様で書く”病的 CA' が生れるのである。

②反俗の高貴——“G und T”のマンに倣ふと、AB' 的精神的高貴と CB' 的自然的高貴とが考へられる。いづれも世俗的業績価値に対立する存在価値に基いてゐる〔CA' の夫れは①と②の中間の意味、CB' の夫れは AB' と CB' との分裂的混合体である〕。

ところが以上の対立の大前提のもとで、AB' 的偉大と A'B 的偉大との間に、又、CB' の高貴と CA' 的身分的高貴との間に、ある種の類縁性が見られる。即ち、AB' 的精神的人格の Würde は精神貴族として、反A的即ち反世俗的業績価値たる精神的業績価値のもたらす高貴性である。例へばシラー・ベートーヴェンの偉大さは、反俗的存在価値的偉大として、当然彼等の精神的向上への不屈の闘志、精神の名における人格の尊厳、又、理想主義的精神界の聖者・殉教者といった人格的価値から発生するものといへるが、しかし、彼等の偉大さが窮極的に基づくのは、彼等の思想・言説に附与された精神的な業績価値〔彼等の作品に具現された思想・言説を介して彼等に付与された精神的名声としての客観的価値〕である。即ち、露骨ないひ方をするならば、彼等が偉大であるのは、彼等が偉大なのではなく、彼等の思想・言説が偉大なのである。

それに対して、CB' の高貴性は、CA' 的身分の血統の根源をなす“Sein の Gunst”〔先述した CB' 的自然 or CB' 的 texture を備へた人間のもつ純粹Cの高貴さ〕による高貴さである。これは CA' 的血統価値・AB' 的精神的業績価値、更には AB' 的 CA' 的人格的価値から区別されねばならない。その事についてマンは、世界各国から霊場ワイマールやヤスヤナ・ポリヤナを目指して集つて来た人達は、決してゲーテ・トルストイの偉大な思想言説に又精神的人格にふれるためにやって来たのではない、といふ。“人々はもっと奥深いもっと素朴な欲求に引きづられてやって来たのではあるまいか。一考を要する問題である。訪れさへすれば祝福が与へられる。かうした地球上の片隅の世界的な魅力といふものは、何か精神的なものではなくて、他の種類のもの、どうも他に言葉が見当らないしそれに神秘主義くさいといはれるかも知れないが、やはり素朴な性質のものだといへるのではないか。ゲーテに関しては、フンボルトの言葉を引用しよう。ゲーテの死後旬日を出でずして彼は言つてゐる。「面白いことにこの人間はいはば全く何等の意図も持たず無意識に唯々その存在によってあれ程力強い影響を及ぼしたのである。これこそは思想家や詩人としての彼の精神的創造とは全く別のもので、彼の偉大にして唯一の人格の裡に横たはるものだったのである」。まさにその通り。しかし「人格」といふ言葉は、名づけたり規定したりする事がどうにも出来ぬものに対する苦しまぎれの記号である”〔GuT, 邦訳 33—34 頁〕。そして上の事のしるしとして、精神界の聖者・英雄として人々にそれこそ偉大な思想と言説をもたらしした筈のシラーやドストエフスキイの周りには、そのやうな人々は決して集つて来なかつたではないか、とマンは言ふのである。

ゲーテやトルストイには、たとえ精神的業績なるものがない場合でも、人々は彼等の“存在価値”にうたれて集つて来るに違ひないのである。彼等はベルグソンに倣つて言へば、彼等の存在自体が呼び声である如き存在である。彼等はその存在そのものによって偉大な人達である。彼等は、閉じた社会を乗り越へてしまった開かれた世界の個人である。

ディオゲネスは真っ昼間提灯に火を点して往還を歩るき廻った、と伝えられてゐる。何を探してゐるのだ、と聞かれて彼は、“人間を探してゐる”と答へた。他ならぬ存在価値を備へた人間を探してゐる、といふ意であらう。

吾々は通常、偉大とか高貴とかいへば、業績価値に基づいた夫れを考へる。業績価値と存在価値とは必ずしも結付いた形で同一の人間に現はれるものではない。ジムメルといふ如くに「當のカーヴの高さと存在のカーヴの高さとは決して一致しない」のである。而も吾々は、業績市場ともいふべき時代と社会に生きる事を余儀なくされてゐる。従つて吾々はある場合には、存在論的高貴さへの感覚を意識の下に押込んでしまつてをり、又ある場合には已にその感覚そのものを失つてしまつてゐる。

以上の業績価値への意志の点で最も烈しいのは、A'B 的 A 要素である。そして、存在価値の中核をなすのは、CB 的 C 要素である。その限りに於いて、A'B 的業績価値と C'B 的存在価値とが対極的に対立し合つてゐるのである。そして、AB' 的精神的業績価値と CA' 的身分価値とは、夫々ある面で A'B に又ある面で C'B に連る中間的位置を占めるのである [C'A と C'B とは先述の通り]。

なほ、A'B 的偉大 [A'B 的権力意志 = A'B 的業績 - A'B 的社会的効用性、その A'B 的権力意志にアクセントのおかれた偉大さ] は、C 要素に坐標をとれば、そのまま人間的卑賤・えげつなさの同義語となる。即ち、A'B 的偉大さから社会的効用といふ包紙をはがすと、其処に顔を出すのは、AB 的 A 要素に由来する卑賤さである。

当然 A'B 自身その卑賤さの隠蔽を半ば意識的に企てる。A'B の CA' [CA] ポーズはその事を物語つてゐる。しかしそれは AB 的 A 要素そのものの原理的否定ではなく、それに伴ふえげつなさを蔽ひ隠くしを意味する。

その A'B の A 要素的えげつなさ——人間的卑賤さ——に真正面から対立し敵対するのが、AB' 的 Würde である。これは B 要素に基づいた精神的高貴性を A'B 的偉大さに対して立てる事である。しかし此の場合にも“同一次元で敵対し合ふものは、相互に相手の側からみこまれてゐる”といふ言葉がそのまま当てはまるといへる。即ち、A'B 的偉大—卑賤に直接的に対立する AB' 的精神的 Würde には、否応なしに、他ならぬ自らが否定し敵対する当の要素がまづはりついてゐるのである。

A'B 的品位・気品といふものは、A'B 的偉大さにまつはる A 的えげつなさを避けるために、A'B 的業績の発現の仕方を工夫する所に生れる。即ち、上品に術策的権力意志を発動させる事が、A'B 的偉大さの二次的屬性となる。当然その A'B 的品位と AB' 的精神的品位とは混同されてはならない。しかも、AB' 的 Würde は上述の如き由来によって、結局は A'B 的 A を自らに内含する事によって卑賤かつ下品である。上述した AB' 的精神的業績価値が、いかに反俗的精神的であるにしても結局は精神的業績価値である所に、AB' が AB 族として AB 的 A 要素を自らに含み、ペンダントの関係において A 的卑賤さを二重映しにしてゐる事が示されてゐる。

ところが、C要素的 Würde は、A'B 的卑賤 or 気品、更には AB' 的品位にふれる所のない別次元的に別種の Würde である。時としてそれは、反 AB 的 Würde として、AB 的に野卑・不作法・下品な行為の中にこそ却って現はれる事も可能である。少くとも、C 的 Würde は、AB 的上品と下品・野卑と尊厳には、ふれる所のない無関係な別次元の Würde といへる。その teilnahmslos といふ事が、A'B—AB' といふ AB 的水平的次元における C 要素の無視といふ事にも連つてゐる。

もともと吾々の日常生活 or 反俗の世界では吾々の世界は A'B 対 AB' といふ水平的平面的次元で把へられ、C 要素は CA 族的なものとして副次的属性としてのみ認められてゐる。

その平面的水平的な対概念 [CA 族を属性とする A'B 対 AB'] の世界に対して、垂直に交はるのが、異次元の CB 的 C 要素である。そしてこの C 要素はある意味で AB 的平面世界を破壊する・その世界の平安を邪げる・価値の転換を招来する危険な要素である。

A'B, AB' 共にその意図的ポーズ、敬愛関係において、C 要素に対してある種の容認を示してはゐるが、その要素の自律性を認める事、更にはそれのもつ Würde を自らを超えて認める事は、思ひも寄らない事といふべきである。

A'B を中核とする Normal な Social Structure にとって、C 要素の Würde を認める事は、alienative なものの Würde を認める事と同義語である。A'B を坐標にとる限り、CB 的 C 要素は“悪しき自然”である。それは、C'B 的脱俗にまつはる浮浪者の乞食的 C 要素、CB' 的超俗につきまとふ賭博者の犯罪者の C 要素として、反社会性の同義語を意味する。健全な社会の維持をのぞむ限り、C 要素的反社会性・非社会性はしりぞけられねばならない。

更には、AB' 的理想主義にとって、C 要素の導入は、A'B とは異なる意味で、自らの堅持する精神的 Würde の損傷を意味してゐる。Idee への反俗的 Wille を堅持する AB' にとって、C 要素の反 Wille 的顔落性は、時として当面の敵対者である世俗的 Wille よりもある意味で一層始末に悪いしろものといふべきである。それは自らの緊張した Wille に対して解体的溶解的に作用するが故に、自らの精神的 Würde の放棄・破壊をうながす働きを備へたものである。

しかし以上の事からして若し特に CB 的 C 要素を除外した AB 的世界に一切を限り、C 要素を副次的要素として CA 的 C 要素に限定するならば、それは無論それなりに一つの完結的世界を意味するであらうが、C 要素の垂直線による立体化を受ける事のない平面的世界は、そのまま同時に人間そのものの平面化・狭隘化を意味するに終るであらう。

かといって C 要素の Würde に最高位を認める事は、他の夫々の要素の Würde に最高位を主張する事と同様に、一種の主観的ドグマを招来する結果とならう。元来吾々の世界は、様々に異なる性格を担った人間が築き上げる立体的な世界といふべきであらう。その中に位置する人間は自らの坐軸が夫々相対的パースペクティブ的な性格を担ふものである事を認めるべきであらう。恐らくは、その立体的世界の夫々の各タイプに対しては、徹底的にニーチェの認識論が適用されるべきである。吾々は常にある特定の坐標軸からする特定の世界像の相対的な正当性

を普遍化し絶対化しようとする自然の誤りにさらされてゐるが、ある特定の世界像は、必ずある特定の坐標軸からする相対的主観的な世界像でしかない。平らたくいつてしまへば、夫々の坐標軸が夫々に“捨てる神あれば拾ふ神あり”的なものである事が認められるべきである。

とするならば、ある意味で最初からC要素の最高位といふ公理に貫かれて来た本論自体が、已に単なるドグマに過ぎず、その客観性において、特にその量的客観性において欠ける所の多いものでしかないといふ結論になるが、しかし、只上述の如くこれまで吾々の日常生活・性格論・K論・社会学・哲学 etc において、当然他の要素と共にそれ相応の意味で認められて然るべきC要素が、余りにその正当な意義を無視されて来た、と丈けはいへるのではないかと思はれる。

従つてその故に、C要素に対して少くとも改めて“拾ふ神”的態度でもって接し、それに相応しい意義を認める事は、決して無要の事ではないといへよう。特に上述の如くA'B 的業績市場になり果てたかに見える現代の吾々には、その認容が一層困難であるが故に、そして、困難であればある程に、なほ一層C要素並びにその Würde の確認が必要な事といへる筈である。